

192
55

故實
叢書
武家名目抄

稱呼部

卷十三



武家名目抄稿十三目次

第六十三册稱呼部十六上

武士	一三六五
武士	一三六八
軍士	一三六九
武頭	一三六九
武者	一三七〇
武者頭	一三七一
具足武者	一三七一
使武者	一三七一
母衣武者	一三七一
母衣者	一三七二
赤武者	一三七三
黑武者	一三七三
馬武者	一三七三
步武者	一三七四

第六十四册稱呼部十六下

平武者	一三七五
入武者	一三七五

武家名目抄稿十三目次

淨武者

一三七五

徒膚武者

一三七六

出法武者

一三七六

葉武者

一三七六

馳武者

一三七七

法師武者

一三七七

古武者

一三七八

老武者

一三七九

若武者

一三七九

懸武者

一三八〇

猪武者

一三八一

荒武者

一三八一

無雙ノ勇者

一三八二

不敵武者

一三八二

坂東武者

一三八二

田舎武者

一三八三

落武者

一三八三

第六十五册稱呼部十七上

武邊者	一三八四
武略者	一三八五



武道功者	一三八五
打物達者	一三八六
一騎當千一人當千	一三八六
手柄者	一三八七
切者	一三八七
剛者	一三八七
無雙勇者	一三九一
勇士	一三九二
壯士	一三九四
健士	一三九四
功者	一三九四
大功者	一三九四
大力ノ者	一三九五
第六十六册稱呼部十七下	
覺者免人	一三九六
早雄者	一三九七
弓矢程之者	一三九七
名譽者	一三九八
武勇者	一三九八
重代者	一三九八

老功者今元	一三九八
若者	一三九八
宗徒者	一三九八
恩願者	一三九九
強打	一三九九
槍柱	一三九九
骨切	一三九九
究竟兵究竟者	一三九九
打者兵	一四〇〇
城兵	一四〇〇
精兵	一四〇〇
古兵	一四〇三
軍兵	一四〇三
騎兵今元	一四〇三
馬強	一四〇四
馬上射手	一四〇四
步兵	一四〇四
番兵	一四〇四
當番衆	一四〇五
結番	一四〇五

雜兵	一四〇五
從兵	一四〇六
先手ノ兵	一四〇七
兵士	一四〇七
士卒	一四〇七
輕卒	一四〇八
荒手	一四〇八
第六十七册稱呼部十八	
在國衆國之衆	一四〇九
國衆	一四一〇
國家衆國衆	一四一一
國備衆	一四一二
國人	一四一二
國野郎	一四一三
籠城衆	一四一三
殿原	一四一三
殿達今元	一四一三
主達	一四一三
若衆	一四一四
若殿原	一四一四

小殿原	一四一四
第六十八册稱呼部十九	
下馬衆	一四一五
御紋衆	一四一五
同紋衆	一四一六
御朱印衆	一四一六
三人衆	一四一六
五人衆	一四一六
八本衆	一四一六
十人衆	一四一六
四天王	一四一六
十六騎	一四一七
廿人衆	一四一七
卅六人衆	一四一七
七組之家	一四一七
手脇衆	一四一七
近邊衆今元	一四一七
近寄衆今元	一四一七
昵近衆今元	一四一七
近臣	一四一八

祇候衆	一四二八
近士	一四一八
馬廻今元	一四一八
朋勢	一四一九
旗本旗下幕下	一四一九
寄合旗本今元	一四一九
第六十九册稱呼部二十	
御形代	一四二五
矢代	一四二五
代官	一四二五
一老	一四二六
職	一四二六
當職	一四二七
前職	一四二八
職衆	一四二八
下知司	一四二八
役者	一四二八
役人	一四二八
沙汰人	一四二九
甲乙人	一四二九

訴人	一四二九
證人	一四二九
論人	一四三〇
方人	一四三〇
雜人	一四三〇
人質	一四三一
降人	一四三六
預人	一四三七
落人	一四三八
缺落人	一四三八
下山人	一四三九
川立	一四三九
第七十册稱呼部廿女房	
北政所	一四四〇
大政所	一四四〇
御臺所	一四四一
大御臺所	一四四六
上御臺	一四四六
若御臺今元	一四四六
新御臺	一四四六

尼御臺所	一四四六
御臺代	一四四七
夫人	一四四七
御所	一四四七
守殿	一四四八
大御所	一四四八
奧御所今元	一四四八
第七十一册稱呼部廿一女房	
上様	一四四九
若上様	一四五二
大上様	一四五二
大方殿	一四五二
御方	一四五四
東御方	一四五五
北方	一四五五
北臺	一四五六
御北向	一四五七
御南向	一四五七
第七十二册稱呼部廿二上女房	
御簾中	一四五八

大御簾中	一四五八
御上	一四五八
新造上今元	一四五八
御前	一四五八
若君御前	一四六〇
奧方	一四六〇
奧様	一四六〇
內方	一四六〇
內證	一四六一
內室	一四六一
室家	一四六一
內儀	一四六二
妻女	一四六三
女房	一四六三
第七十三册稱呼部廿二下女房	
手懸	一四六七
腰打	一四六七
筵寄	一四六七
御袋	一四六七
母堂	一四六八

母儀	一四六九
內母	一四六九
繼母	一四六九
養母	一四七〇
嫡母	一四七〇
後室	一四七〇
後家	一四七一
尼君	一四七一
大姬君	一四七二
姬君	一四七二
御料人	一四七三
養女	一四七四
息女	一四七四
官女	一四七五
妾女	一四七五
女中	一四七五
下女	一四七五
一男	一四七六
二男	一四七六

第七十四冊稱呼部附錄一

二棟御方	一四七七
他家	一四七七
名家	一四七七
人夫	一四七七
內縁	一四七九
息女	一四七九
舍弟	一四七九
當家	一四七九
惡黨	一四七九
惡徒	一四七九
逆黨	一四七九
黨類	一四八〇
逆徒	一四八〇
類族	一四八〇
家名	一四八〇
亭主	一四八〇
老軍	一四八一
義兵	一四八一
主從	一四八二
流人	一四八三

騎馬	一四八三
凶徒	一四八三
凶賊	一四八三
專一之者	一四八四
主君	一四八四
逆賊	一四八四
東士	一四八四
日陰者	一四八五
貴殿	一四八五
一家棟梁	一四八五
義士	一四八五
繼父	一四八五
第七十五冊稱呼部附錄二	
誅罰專使	一四八六
勇敢者	一四八六
武勇之家	一四八七
響敵	一四八七
鎌倉殿	一四八七
大剛一之兵	一四八七
秘藏者	一四八七

小冠者	一四八八
老者	一四八八
謀士	一四八八
官軍	一四八八
諸將	一四八八
所之役人	一四八八
先祖	一四八九
國敵	一四八九
御敵	一四八九
河原者	一四八九
使節	一四九〇
老將	一四九一
勇卒	一四九一
相聲	一四九一
召使	一四九一
泊番	一四九一
御番	一四九二
譜第職	一四九二
手傳	一四九二
御供	一四九二

組勢與力	一四九二
城衆	一四九三
場敷之人	一四九三
氏長者	一四九三
兩院別當	一四九三
北之丸様	一四九三
總大將	一四九三
組合同番	一四九三
畑衆	一四九四
打手	一四九四
寄手	一四九四
先懸勢	一四九四
軍勢	一四九四
在京人	一四九四
兵法者	一四九五
兵法ツカヒ	一四九五
兵法仁	一四九五
軍法者	一四九六
軍者	一四九六

武家名目抄稿第六十三册

増檢校保己一編

稱呼部十六上

○武士

續日本紀云寶龜二年十一月丙午(中略)恪勤工巧武士總五十五人賜絲人十絢

平家物語云去程六月二日新大納言成親卿をば公卿之座に出し奉て御物まいられたりけれとも胸さき塞りて御箸をたにも立られす預りの武士難波次郎經遠御車を寄てとくくと申ければ大納言心ならず乗給ふ

百練抄云正治元年二月十四日武士等相具左衛門尉中原政經藤原基清小野義賢參院御所是件三人可亂世間之由有其聞之故也各預賜武士

吾妻鏡云文永二年五月廿三日庚申高柳彌次郎幹盛與縫殿頭文元就所領有相論事幹盛確執之餘訴申云文元年爲陰陽師其息子等帶太刀等偏如武士早可爲本道威儀之由可被仰下云々

梅松論云去程に夜も明しかは供奉の人に仰られけるは是

稱呼部十六上

千三百六十五

より大社へはいかほとあるやらんと御尋ありければ道はるかにへた、り候よし申上たりければ武士ともに向て勅して宜く汝等しるや此御神をば素盞鳥尊と申也云々

太平記云三人僧徒圓觀上人計コソ宗印圓照道勝トテ如影隨形ノ御弟子三人隨逐シテ與ノ前後ニ供奉シケレ其外文觀僧正忠圓僧正ニハ相隨者一人モ無テ怪ナル店馬ニ乗セラレテ見馴ヌ武士ニ打圍レマタ夜深キニ鳥カ鳴東ノ旅ニ出給心ノ中コソ哀ナレ

又云唐時使節如下向條 如今公家一統ノ御代トナランニハ天下ノ武士ハ指タル事モナキ京家ノ人々ニ付順テ唯奴婢僕從ノ如ナルヘシ是諸國ノ地頭御家人ノ心ニ憤リ望ヲ失トイヘトモ今マテハ武家棟梁ト成ヌヘキ人ナキニ依テ心ナラス公家ニ相順者也

又云唐時使節如下向條 海東カ嫡子幸若丸ト云ケル小兒父カ留置ケルニヨリテ軍ノ伴ヲハセサリケルカ猶モ覺東ナクヤ思ケン見物衆ニ紛テ跡ニ付テ來ケル也幸若稚シト云ヘトモ武士ノ家ニ生タル故ニヤ父カ討レケルヲ見テ同ク戰場ニ打死シテ名ヲ殘シケルニソ哀ナレ

又云師直以下被誅條 將軍ト打並テ馬ヲ進メ給ハンスル其内ヘ誰カ隔テ先立人有ヘキニ名モ知ヌ田舎武士無ニ云計一人ノ若黨

トモニ押隔ラレ々々馬サクリノ水ヲ蹴懸ラレテ衣深泥ニマミレヌレハ身ヲ知ル雨ノ止時ナク泪ヤ袖ヲヌラスラ

又云^{先帝船上}六條少將忠顯朝臣一人先舟ヨリヲリ給テ此邊ニハ何ナル者カ弓矢取テ被三人知タルト問レケレハ道行人立ヤスラヒテ此邊ニハ名和ノ又太郎長年ト申者コソ其身指テ名アル武士ニテ候ハネトモ家富一族廣シテ心カサアル者ニテ候ヘトソ語リケル

園太曆云觀應二年正月十一日慈靜法印來今日開將軍昨日到着山崎細川與州顯氏相逐將軍其邊次第相近云々隨又明日可有合戰之旨武士等謳歌云々

異本伯耆卷云主上今日兵庫ヲ御立アリ同五日東寺ニ着御有ケレハ諸公家ノ面々我劣ラント參候シ源平藤橘四門ノ武士各々警固シ奉ル

後愚昧記云延文四年九月廿五日癸酉今曉左馬助又沒落云云其間說縱橫不知何是非依此事去夜京中武士等騒動云々

又云貞治二年七月十日丁丑今夜洛中鼓騷武士馳集云々不知何事候所詮佐渡判官入道道譽以下大名等欲伐修理大夫入道^{當時武家}大夫入道又用心之故云々

又云應安五年九月廿四日後開今夜下邊武士馳集鼓騷云々執事身上事之由風聞云々

又云應安七年六月廿日晩頭山門神輿^{先年奉振神輿山門訴訟入眼之間奉返入山}上神人宮主等奉歸入之是神輿造替遲々訴也云々(中略)今度衆徒雖一人不供奉仍武家又無誓固之義然而內裏近邊武士等少々差進之神輿一基者行事所前^{一條}路以東奉置之所殘神輿六基出雲路邊奉昇^{南類}弃之神人等歸去了

又云永和三年八月十日雨下酉刻以後休止乘燭之後大樹之亭武士馳集騷動云々は恪勤者鬪爭相手煞害云々

花營三代記云應安元年六月十七日寺社本所領事禁裡仙洞御料所寺社一圓佛神領殿下渡領等異他之間會不可有半濟之儀固可停止武士妨云々

二水記云永正十七年五月七日三好筑前守前留于壘花院殿之由有雜說依之武士共可探寺中之由申入云々

二判問答云女房奉書等御請事繪旨勅書ハ傳奏ノ方ハ内狀如常可然候云々諸家之儀^{攝家は勿論諸大臣へも御懇候}大中納言以下は某大納言殿某中納言殿某宰相殿各稱號と官と相兼被載候右御名字計武士へは某とのへ右御判斗但武家御任槐の後には諸家へも御判候

北條五代記云^{源義明公滅亡の條}中山修理介御前に候す此者數度の合戦に武畧をもつて敵を亡し軍法兵義をしる故實の者兼て武士司にふせらる

澁橋云泰時消息近年在京の武士とも物を射るとして内野を馬場に定たるよし其間有事實ならば代々皇居の跡也馬の蹄にかけむ事恐あるへきよし内々御沙汰も候へは一定仰出さる、道も候はんと覺候其上物詣の還車若所詮なき人々態とも車を立て見物もし候らんによしといはれへき事はせめて如何はせん兒女房などに關東武士の弓矢徒事也と笑沙汰せられんはあやまりて上方の御耻ともいひつへけれ御手の本もしらすか、る晴わさをこのむ證は不忠なるへし

室町殿日記云^{佐々木貞頼、御使者道條}去程に義輝公はいか、せましと且暮思慮をめぐらし給ふか或時老若の臣をあつめ給ひて仰られけるは畿内は大方義長か手に屬する事なれば容易誅罰しかたし味方にもせめて一ヶ國二ヶ國も領するほどの武士を柱として差向すは勝利を得る事あるへからずされは近國にさはかりの大身なし佐々木貞頼ありといへともあれは故義晴公の時より隔心の者なれば今以頼かたし

甲陽軍鑑云武士はねてもさめても或は食事の時も主人忠節忠功を可存事

又云家職を大形にして止て餘の事をいたし精々いる、は大非儀なり其非儀といふは出家か學問をわきへなし武邊を心かくる儀と武士か奉公の武道をわきへなし學問を專一におもひ或は亂舞にすく事皆是家職をしらさる儀なり

又云大將をうつ人は大畧十か九ツ迄頭とおほしめせ然れとも國持大將をうつ人は國五ヶ國十ヶ國の家にもおほして二人三人ならてなし扱其冥加を感して是又譽の武士と云

甲陽軍鑑末書云典厩總指物黒山形總指物器具馬具皆赤高坂黃備小幡總指物赤殘ハ追而可被^{仰付}トノ儀也タシハ面々各々ニ仕ヘシ是大合戰城攻小攻合共ニ其走廻リ能キ武士總奉公ノ人ノ手柄歴然見ユル爲也指物ハ一手宛ノ分チ見ユル驗ナレハ如^スト也

又云小笠原内渡邊金大夫林平六吉原又兵衛伊達與兵衛小池左近ナト云者心ハセヲ仕ル内藤同心ノ内ニ手柄武士多駿河先方ニハ岡部治部同忠次郎大塚三助此衆鍵ヲ合義殘後覺云^{田上千坊野地カ城ニテ勇力之條}戸板和泉守ノ手ノ者ニ田上千坊

ト云人アリケリモトハ眞言坊主ニテアリケレトモカモ人ニ勝レテ強ク心モ至剛ノ者ナレハトテ泉州還俗サセテ八十貫ノ領主トシテ武士道ヲ立サセニケル去ルハ田上千坊ト名乗テ此手ニ向ヒケル

大友興廢記云^{高尾要}豊後大野の郡緒方の庄に頭分の武士堀中務軸丸大膳并に鶴原因幡守江民部少輔仲津道閑藤井左近此等を先として二百餘人あり

蒲生氏郷記云氏郷分別シテ竹タハラ近々ト付テ鐵炮數千挺ヲ以テ打スクメ候處ニ城中及ニ難儀ニコラヘカネ降參仕ルニ依テ身命ヲ助京都ヘ可レ被レ上トテ三ノ丸ヘ出シ本城ヲ請取九戸櫛引ニハ警固ノ武士ヲ付置ル家中ノ者ハ三ノ丸長屋ヘ押入燒殺ニ送ントスル者ヲハ弓鐵炮ニテ打殺ス

清正記云明二十五日辰の刻この城をのりとるへしとあり家中別て粉骨をぬきんすへしと惣軍兵召よせ清正立てまはれしは人は一代名は末代あつはれ武士の心かなと三へんおしかへし〜大手をうつて舞酒を軍兵共にまゐられる

○武臣

太平記云^{長崎意}二階堂出羽入道道蘊暫思案シテ申ケルハ

此儀尤モ然ルヘク聞ヘトモ退テ愚案ヲ廻スニ武家權ヲ執テ已ニ百六十四年(中略)然ニ今君ノ寵臣一兩人召置レ御歸依ノ高僧兩三人流罪ニ處セラル、事モ武臣惡行ノ專一ト云ツヘシ云々

又云^{新田足利}去元弘之初東藩武臣恣振逆威頻無朝憲禍亂起于茲國家不獲安云々

又云^{實房御二}萬里小路大納言宣房卿ハ元來前朝舊勞寵臣ニテオハセシ上子息藤房季房二人笠置ノ城ニテ被レ生捕テ被レ處ニ遠流シカハ父ノ卿モ罪科深キ人ニテ有ヘカリシヲ賢才ノ聞ヘ有テ關東以ニ別儀ニ其罪ヲ宥シテ當今ニ可レ被レ召仕之由奏シ申ス依レ之日野中納言資明卿ヲ勅使ニテ此旨ヲ被レ仰下ケレハ宣房卿勅使ニ對シテ被レ申ケルハ臣雖ニ不肖之身以ニ多年奉公之勞蒙ニ君恩寵ニ官祿共進剝汚ニ政道輔佐之名(中略)君今不義ノ行ヲハシテ爲ニ武臣被レ辱給ヘリ是臣カ預依ニ不レ知處ニ雖ニ不レ獻ニ諫言一世人豈其無ニ罪許ニ哉云々

又云^{御告}頼ヲ萬里小路大納言宣房卿ヲ勅使トシテ此告文ヲ關東ヘ下サル相模入道秋田城介ヲ以テ告文ヲ請取テ則被見セントシケルヲ二階堂出羽入道々蘊堅ク諫メテ申ケルハ天子武臣ニ對シテ直ニ告文ヲ被レ下タル事異國ニモ

未其例ヲ承ス然ヲ等閑ニ披見セラレン事冥見ニ付テ其恐レアリ

○軍士

舊事本紀云大伴室屋大連言於東漢掬直曰大泊瀨天皇之遺詔今將至矣宜從遺詔奉皇太子乃發軍士圍繞大藏自外拒閉縱火燔殺

吾妻鏡云文治五年六月廿七日乙卯此間與州征伐沙汰之外無他事此事依被申宣旨被催軍士等群集鎌倉之輩已及一千人也云々

又云建久四年六月五日庚子祐成等狼藉事隨聞及諸人馳參問諸國物恣者八田左衛門尉知家與多氣太郎義幹者常陸國大名也強雖不挿宿意於國中相互聊爭權勢也而和家依此事欲參上之刻内々有奸謀所存遣如足夫之男於義幹之許八田左衛門尉相催軍士欲討義幹之由令構之仍義幹構防戰用意招集一族等相籠于多氣山城

又云建保元年五月二日壬寅將軍家入御于右大將軍家法花堂可下道火災御之故也相州大官令被候御供此間及挑戰鳴鏑相和利劍耀及就中義秀振猛威彰壯力既以如神敵于彼之軍士等無免死所謂五十嵐小豐次葛貫

三郎盛重新野左近將監景直禮羽運乘以下數輩被害云々

又云建保元年五月四日甲辰將軍家令尋聞軍士等勳功之淺深給褒波多野中務丞忠綱申云於米町并政所兩度進先登云々依之被尋于彼時戰士等皇后宮少進山城判官次郎金子太郎云々

又云實治二年六月廿一日丁酉佐々木次郎兵衛尉實秀^{法名}捧歎狀申可浴恩澤之由是祖父三郎兵衛尉盛綱入道兄弟四人相共右大將軍家義兵最初爲御方軍士專一依^勵數度勳功雖有連々恩賞亡父太郎信實之時或就相論或自然被召放之於今者其計畧訖云々數枚續之載累家子細云々

梅松論云今當所を立て關東に御下向あるへき處に先代方の勢遠江の橋本を要害に構て相支る間先陣の軍士河保丹後守入海を渡して合戰を致し敵を追ちらして其身疵を蒙る間御威の餘りに其實として家督安左衛門入道々潭か跡を拜領せしむ

豆相記云于茲上總下總軍士房州里見氏等崇關東公方晴氏之一族發性院將令野處于小弓邑而當北條上矣

○武頭

與羽永慶軍記云^{長谷堂}城中ノ武頭ニ大風左衛門尉橫尾勘

稱呼部 十六上

解由ト云者究竟ノ兵二百人ヲ相具シ相言ヲ定メ袖印ヲツケ夜討ニ出云々

又云奥州大平落城條佐竹義久下知シテ町橋ニ放火スレハ在家二三十軒焼失ス于ノ時城ヨリ武頭五六騎足輕雜人五百人出テ大水ハシキヲ手々ニ持出熊手長柄鎌ニテ消ントス折節雨降テ火ハ忽消ヌ

○武者

續古事談云大安寺ノ釋迦佛ハ天人ノツクリタル也ソレヲウツシテ佛師康尙此佛ヲツクレリ維敏滿仲ナトイフ武者ヨリ始テ結縁助成セリ

保元物語云惟行二ノ失ヲ番テヒカントシケルカ心神忽ニクレ正念次第ニ失シカハ弓矢ヲ捨馬ヨリ倒ニ落ケルカ矢ニ荷ハレテ暫ク落ヌ馬驚テ彼方此方ヘ走ケル程ニ力ナクナリ落ニツ落ケル餘リニ武者ノ剛ナルモ却テオコカマシクオホエケル

平家物語云懸條武藏國住人熊谷次郎直實子息小次郎直家

一谷の先陣そやとそ名乗たる城のうちには是を聞いてよしよし音なせそ敵か馬のあしつからさせよ箭種を射盡させよとてあひしらふ者こそなかりけれ良あつて後より武者こそ二騎續きたれ誰と問へは季重と答ふ問ふは誰ぞ直實ル

そかしいかに熊谷殿はいつよりそ直實は宵よりそと答へける

梅松論云將軍仰られけるは遠達の境まで下向は本意にあらずといへとも進み退くは軍の法なり珍敷敵に合て最後の合戦未練ならば當家累代の武略を失ひ亦當國に弓箭の疵を殘すにあらずや甚以思慮なり我等一所に向て合戦難義に及事あらは何の頼あつて殘黨全からん一騎なりとも尊氏此陣にふまへは先陣の勢力を得て戦へしもし合戦利なくは馬廻りの武者ともを召具して入替て退治を致すへし

太平記云補出段天王寺條六波羅ノ勢五千餘騎所々ノ陣ヲ一ニ合

セ波部ノ橋マテ打征テ河向ニ引ヘタル敵ノ勢ヲ見渡セハ僅カニ二三騎ニハ不_レ過剩ヤセタル馬ニ繩手綱懸タル體ノ武者共也

信長記云六條合戰條三川國ヨリ村越孫六郎加藤三丞等ハ武者修行ニ出テ折節有合フタルカ幸也トテ先懸ノ勢ニ加リ皆四辻ヲ打出喚叫テ戰ケル

義殘後覺云豫州大津ノ城ヘ取掛リ給フ時内ヨリモ之節之條豫州大津ノ城ヘ取掛リ給フ時内ヨリモ面々印ヲ差タル毛能武者五十人計門ヲ開カセテ突テ出ル

又云鹿島源五左衛門ト申侍六十六ヶ國ヲ武者修行シタル

人ナリ何方ニテモ千貫ニテ許容セラレケルカ或人信長公ヘ三千貫ニテ肝煎可_レ申ト申サレケレハ源五申サル、様ハ如何程給ハリテモ信長公ハイヤナル主ニテ候(中略)是ヨリ東國ニ下リ甲州武田ノ家ヲ持_テ見候ハントテ色々イフトモ承引セス

甲陽軍鑑末書云山本勘助申上ル(中略)三州武者小返シテ透間ヲカソフル剛敵ニハ山縣三郎兵衛押ヘニ被_レ仰付

武林往昔日記云慶長改元元和に攝州大坂合戦の時節寄手方より心掛の武者三人は進退の足場を見ん爲め物見に出る細き流の小河ありて漸々人の腰たけにも立や不_レ立程の川成しか其川端の向ひの峯に一ツの石佛あり寄手の方三人之内二人は鎧を持ち來りて今一人は馬上筒を持たり又城方よりも分捕高名を心懸始より河端に三人出て敵を待處ニ寄手方鐵砲持たるにやおそれけん云々

○武者頭今元

○具足武者 鐵武者

太平記云正月廿七日合戰條上差一筋抽出テ櫓ノ小間ヲ手突ニソ突タリケル此矢不_レ誤矢間ノ陰ニ立タリケル鐵武者ノセンタシノ板ヨリ後ノ總角付ノ金物マテ裏表二重ヲ徹テ矢前ニ

三寸射出シケル云々

又云住吉合戰條安田彈正走寄テ何ナル事ニテ候フ大將ノ腹切所ニテハ候ハヌ者ヲト云テ己カ六尺三寸ノ太刀ヲ守木ニ成シ鐵武者ヲ鎧ノ上ニ攝負テ橋ノ上ヲ渡ルニ守木ノ太刀ニマキ落サレテ水に溺ル、者數ヲ不_レ知

伯耆卷云二方太郎と申者京都ニ候ける折山法師陣頭に御神輿ふる事候き此二方太郎被_レ仰付_ニ禦候築地の上に上り一手失頭を以て鐵武者二人射殺多の衆徒等を迫歸す自_レ夫彼者の末においては七代まで弓箭の道を免させ給ふとの勅定にて被_レ成_ニ下_ニ繪旨_ニて家に傳て候

備前文明亂記云敵陣ニ取向ヒ油斷スルハ未練ノ至也ト大ニ怒時尅ヲ不_レ移馳向一合戦スヘシトテ大賀ノ陣ヲ立テ節所ノ岩ノ懸路ヲ傳ヒ行程ニ具足武者ノ事ナレハ急カントスレト行ヤラテ夜ニ入ケル間免アル谷底ニ陣取テ居タル所ニ云々

○使武者今元

○母衣武者 母表頭

敦盛草紙云あらいたはしやあつもりくまかへとまこしめしのかれかたはくはおほしめされけれともこまにまかせて落させ給ふか、りけるところにはるかのおきを御覽すれ

は御座ふねまちかくうかへてありあのふねをまねきよせ
 のらふすものとおほしめしこしよりもくれなぬに日出し
 たるあふきぬきいてはらりとひらかせ給ひておきなるふ
 ねをめかけてひらりくともねかる、せんちうの人々こ
 ひとしもこそおふきにかとわき殿は御らんしてほろかけ
 むしやの船まねくは左馬のかみゆきもりかむくわんの太
 夫あつもりかあれを見よとの御ちやうなり
 大友興廢記云筑後國御そうりん公御てふにおほしめすし
 いによつて御開陣可被成よし先手へ母衣頭をさしこさ
 れまよくんせいきつと東郷表まで引へきとの御意おほせ
 つけらる、

初井日記云徳州野池田左馬助ヲハ臼木七郎兵衛惟茂討ツ
 是モ士大將母衣武者ナリ母衣ニ多田院政綱ト實名ヲノセ
 申候

義殘後覺云田上千坊池田カ義隆ノ勢ノ中ニ鷲津三澤ナント
 五百餘騎楯ヲ築寄責入ケルカ城ノ中ヨリ母衣武者二十騎
 計一同ニ懸出テ無二無三ニ打破ラント乘連テ懸テ來ル

織田信長譜云永祿十年信長定黒幌赤幌之士各十人
 増補家忠日記云天正十二年兩陣近ク進ミ寄テ輕卒ヲシテ矢
 ヲ發シ火炮ヲ飛シテ挑戰時ニ黒母衣ノ士五十騎計眞先ニ

勇ミ掛ル

小島景憲家譜云景憲一人進丸山之少崩たる所を左りに見
 山へ乗上敵を崩際にて然も母衣武者を一人討申候
 武陰叢話云大坂御陣五月六日河内國若江合戦の時大將木
 村長門守重成踏止り庵原助右衛門長門と鍵組戦ふ(中略)
 助右衛門郎等共長門首を取所へ安藤長三郎走り來り其首
 を貫ふ云々長三郎悦んで頭を持行を助右衛門呼戻し母衣
 緒に包持參候へ大御所様は御吟味つよくて母衣武者の頭
 母衣に添すは御非太刀入候はんとて母衣緒刀脇差迄くれ
 る云々

○母衣者

太閤記云北庄表翌日廿二日北庄へおしよせらる、勢の次
 第堀久太郎を先として其次取出々番手の次第ニ任せ打
 候へと定め給ふ控之事遣退其外何事も母衣之者并使番次
 第可守其法ニ事

又云池田勝入交密に觸給ふは今日未の刻より小幡に至て出
 勢の事有旗をまほりさし物を持せ密に小牧山を忍ひ出よ
 と榊原小平太後式部井伊滿千代後少輔丹羽勘介等其外兩心
 の小性馬廻母衣の者使番等其器を撰とふれられ小牧山を
 八日未之刻に立て急かせ給へは無程小幡の城に着陣あ

○赤武者

○黒武者

安土日記云天正三年五月二十一日信長ハ家康公ノ陣所ニ
 高松山トテ小高キ山ノ御座候ニ被取上(中略)三番西上
 野小幡一黨赤武者ニテ入替カ、リ來候關東衆馬上ノ功者
 ニテ是又馬可入所ニテ押大鼓ヲ打テ懸リ來人數ヲ備コ
 ナタハ身隠ヲシテ鐵炮ニテ待請打セラレ候へハ過半被ニ
 打倒無人ニ成テ引退四番典厩一黨黒武者ニテ懸リ來ル
 小島景憲家譜云とかく大坂衆御備は主馬殿御組二萬に及
 各計ニ其能ニ備定めして其上京都へ御働可然候殊兵部赤
 武者の手並見たる方へは秀頼様御墨印も先延られ明日打
 立宵に越給へ

○馬武者

平治物語云爰ニ鎌田カ下人八町次郎トテ大力ノ剛者早走
 ノ手キハアリ馬ニテコソ具スヘケレトモ中ニ徒立ヨカル
 ヘシ高名セヨト云ケレハ一年モ腹巻ニ小具足差固テ眞先
 ニ進タリケルカ敵ノ馬武者ノ遙ニ先立テ落ケルヲ八町カ
 内ニテ追ツメテ首ヲ取タリケレハソレヨリシテ八町次郎
 トソ云ケル
 太平記云四月三日孫三郎尻目ニハツタト睨テ敵モ敵ニヨル

又云丹羽五郎左衛門長秀堀きりのこなたなる勢は只今時
 引取とみへしを急き走着うたせよくと使番母衣の者を
 以被備付しかは心得候と云もはてすひしと引付堀切よ
 り引上候をかけ渡しにねらひすましようたせしかは時のま
 に手負二百餘りうち出しけり云々

松原自休手録云長門守夜半ニ出大坂ニ之處魁兵迷途拂
 曉來ニ矢尾ノ堤(中略)渡邊勘兵衛ハ押ニ出矢尾北道見ニ
 味方ノ負色割ニ微勢ニ矢尾ノ村裡入ニ横合ニ首得ニ二十餘
 級自身ハ出ニ矢尾ノ川原ニ母衣ノ者七八人相加リ欲伺ニ
 敵ノ旗本ニ彼レハ軍勢重リ味方ハ微ニシテ難シ及ニ一戰ニ
 引下東ノ堤ノ下ニ設備

東遷基業云酒井左衛門尉二千餘左の方を後へ廻りければ
 森尾藤羽黒村にたまり得す大山さして蛛の子を散すか如
 く崩れて引退き奥平酒井勝に乗て北るを追て進みける大
 須賀五郎左衛門丹羽勘助追々に馳加り追かくる故森尾殿
 か兵こ、かしこにて討る、者多かりけり羽黒の東の山際
 にて森か母衣の者野呂介左衛門返し合橋の真中に立こら
 へ松平紀伊守家信と槍を合けるか家信時に十六歳終に助
 左衛門を突伏て首をとる

ノ一騎ナレハトテ我ニ近付テアマチスナホシカラハス
 ハ是取ラセン請取ト云テ左ノ手ニ捉ケタル鎧武者ヲ右ノ
 手ニ取渡シテエイト抛タリケレハ跡ナル馬武者六騎カ上
 ヲ投越シテ深田ノ泥ノ中へ見ヘヌ程コソ打コウタレ
 又云 經島合 戰條 脇屋右衛門佐カ兵トモ五百餘騎ニテ中ニ是ヲ
 取籠弓手馬手ニ相付テ細手ヲ廻シテソ射タリケル二百餘
 騎ノ者共心ハ勇トイヘ共射手モ少ク徒立ナレハ馬武者ニ
 懸惱サレテ遂ニ一人モ殘ラヌ討レニケレハ乗捨タル船ハ
 徒ニ岸打浪ニ漂ヘリ
 又云 四條備手 合戰條 和田新兵衛鎧ノ袖ヲ引ヘテ暫思様アリ餘リニ
 勇ミ懸テ大事ノ敵ヲ打漏スナ敵ハ馬武者我等ハ徒立也追
 ハ敵定テ可引ヒカハ何トシテ敵ヲ可ニ打取云々
 箕輪軍記云 箕輪安中松 井田落城條 城中ノ究竟ノ射手百人餘に射ければ
 馬武者六十騎斗射付られ鐵炮の足輕は玉藥續き變へ打出
 ければ手負死人六七百人餘なり
 太閤記云 根來寺 兵火條 新手六萬騎をさし遣し此競を以て根來寺
 を打破候へ明日にも成ならは支度をなすへきと黄そな
 への騎兵あまた相添られし也
 武蔭叢話云甘粕栗生申候は政宗馬武者を川上に立歩行者
 を川下に立候は、上流を馬武者にて乗切下手に付て歩行

者を渡さんとの謀なり云々
 ○歩武者 徒立 歩兵
 吾妻鏡云文治五年八月十日丁酉卯尅二品已越阿津賀志
 山給大軍攻ニ近于木戸口一建ノ戈傳ノ箭(中路)小山七郎朝
 光討ニ金剛別當 其後退散歩兵等馳ニ向于泰衡陣阿津賀志
 山陣大敗之由告之泰衡周章失レ度逃亡赴ニ奥方云々
 又云建久元年二月五日合戰大體至ニ歩兵等ニ者路山驛尋
 レ之有ニ其便ニ然者求ニ宗敵在所ニ可ニ襲レ之云々
 太平記云 持明院殿行 幸六波羅條 南北ニ駆破テ敵ヲ一所ニ不ニ打寄ニ追立
 追立河野陶山ト一所ニ合テハ兩所ニ分レ兩所ニ分テハ又
 一所ニ合七八度カ程ノ採タリケル長途ニ疲タル歩立ノ武
 者駿馬ノ兵ニ被ニ驅惱ニテ討ル、者其數ヲ不知
 又云 四條備手 合戰條 和田新兵衛鎧ノ袖ヲ引ヘテ暫ク思フ様アリ餘
 ニ勇ミ懸テ大事ノ敵ヲ打漏スナ敵ハ馬武者也我等ハ徒立
 也追ハ敵定テ可引ヒカハ何トシテテキヲ可ニ打取云々
 甲陽軍鑑末書云鐵炮旗指物長柄鎗持迄革具足ヲキル是ヲ
 カチ武者ト云也
 三好記云同七月廿九日木澤左京亮三好伊賀守同名神五郎
 一味同心シテ大坂ニ發向ス中島マテ攻入ケレハ一揆衆門
 徒衆馳向ヒ攻戰フ一揆ハ皆歩者ニテ騎馬ニカケテラサン

武家名目抄稿第六十四册

塙檢校保己一編

稱呼部 十六下

○平武者

粗井日記云 粟田口 合戰條 小野原殿ハ人々ニ下知シテ平武者トモ
 ヲハ輕ク討捨ニシテ山へ上リ玉ヘトノ事ナレハ仁木足立
 モ其マ、打捨ニシテ山ニ上ル

○入武者

小島景憲家譜云中條又兵衛父子川西喜兵衛田村助右衛門
 本多安房歩小性葛右衛門悉名乗申候せはしき場合にて一
 人も覺不レ申候平野彌次右衛門とも才伊豆取成を以其場
 にて知人に成申候扱右之方六人より御手柄は見へ申候日
 暮に及び申候間御立退尤と申景憲者當時之入武者家中之
 衆へ諫候へと挨拶

○浮武者

たかたち草紙云御所のでへ追手はす、木兄弟かねふさた
 た三騎にてかためぬからめてはわしの尾かたをかまくまわ
 太郎源八兵衛ひろつな備前の平四郎以上五騎にてひかへ

八百人マテ打レケレハ一揆トモ散々ニナリ所々城トモ皆
 明テ落行ケル

愚耳舊聽記云 淺瀬石大和親 于御陣前之條 御馬廻の歩行武者廿人斗御供に
 めしつれられて大和の陣所へ御見廻被遊

たるも辨慶はうき武者にてをふ手のやくらにはしりあか
つていくさのけちをそしたりける

大友與廢記云堅田合兩國の勢も究竟の大剛の軍功にて一
合もせず急に西野の在家に曳とるうき武者匡徳の手入か
はりおつかけくた、かへはとつてかへした、かふては
ひきつゝに普坂の在家まで引とる

又云堅田にさしむかはる勢は三段に備也先陣のさふらひ
大將には佐伯大膳正惟末(中略)堅田三十六人の武士は匡
徳にしたかひうき武者也

○徒膺武者今元

○出法武者今元

○葉武者

太平記云大嶺津國豐土居得能後へツト懸抽テ左馬頭ノ引
へ玉ヘル打出宿ノ西ノ端へ駆通り葉武者共ニ目ナ懸ソ大
將ニ組アト下知云々

又云義貞自軍散シテ後氏家中務丞尾張守前ニ參テ重國コ
ソ新田殿ノ御一族カトヲホシキ敵ヲ討テ首ヲ取テ候へ
トハ名乗候ハネハ名字ヲハ知候ハネトモ馬物具ノ様相順
シ兵共ノ尸骸ヲ見テ腹ヲキリ討死ヲ仕候ツル體何様葉武
者ニテハアラシト覺テ候

又云武藏野義興義治魚鱗ニ連テ轡ヲナラヘテ敵ノ中ヲ破
ラント見繕フ處ニ仁木越後守義長是ヲ屹ト見テ敵ノ馬ノ
立様軍立ノ葉武者ニ非ス小勢ナレハトテ侮リテ中ヲ破
ラルナ

又云合久我名越尾張守ハ元ヨリ氣早ノ若武者ナレハ今度
ノ合戦人ノ耳目ヲ驚ス様ニシテ名ヲ揚ニスル者ヲト兼テ
有増ノ事ナレハ其日ノ馬物ノ具笠符ニ至マテ當リヲ耀カ
シテ被出立タリ(中略)敵モ自餘ノ葉武者共ニハ目ヲ不
レ懸此ニ開キ合セ彼ニ攻合テ是一人ヲ討ントシケレトモ
鎧ヨケレハ裏カ、スル矢モナシ打者達者ナレハ近付敵ヲ
切テ落ス其勢ヒ燦然タルニ辟易シテ官軍數萬ノ士卒已ニ
開キ靡キストソ見エタリケル

應仁記云近江源氏高頼衆六七百人枕ヲ並テ討死シ葉武者
ハナタレテ味方ノ陣へ引テ入

江渡記云淺井勢此由ヲ見テ御會寺川ノ表へ押出乘込ント
セシ時赤尾美作守先待玉へ山城守時ノ宜キ武者アマタア
リ卒爾ニ大川ヲ渡ラハ如何アラン先葉武者二三百越サセ
敵ノ應答ヲ見計ヒ其後同勢ヲ越サセ御合戦ヲ被テ遂候へ
カシト申シケレハ云々

高忠軍陣聞書云頭を鞍のつつ付に付る事大將の頭をはた

に付る也はむしやの頸をは右に付る也たふさをちかへて
其たふさにとつ付の緒をとをして可付法師の頸をは口
のうちよりとつ付の緒をあきとへとをして可付頸は四

より多くは付られぬ也とつ付の緒の長一尺二寸本也

賀越圖譯記云義貞地當方ハ僅ニ三國ノ主トシテ無勢也

征ニ虎口一端抱ヘキ者共ハ或ハ病死或ハ討死シテ無云

甲斐ニ殘黨葉武者トモ集リ居タリ云々

初井日記云退口塞リテ敵ハ大軍ニテ候必死ノ戦ヒヲシテ

大將ヲ退カシメヨ葉武者ニ手合スヘカラス織田カ旗頭ト

モフ一々ニ組テ刺セ

甲亂記云高遠ノ城備中守各ニ申ケルハ大將ヲ不知見程コ

ソ葉武者共トハ軍ヲ仕ツレ先ニ黒ノ馬ニ紅ノ房懸テ白地

ノ金襴ノ母衣着ニ唐頭懸タリシ若武者コソ正キ城介殿ト

ハ見ツレ迎モ死ナン命ヲ城介殿ニ懸合引組テ討死シテコ

ソ名ヲ末代ニ殘シ云々

○馳武者

平家物語云武士上總守申けるは福原を御立候へし時入道
殿の仰には軍をは忠清に任せ給ひとこそ仰せ候つれ
伊豆駿河の勢の參るへきたにもいまた見え候はず御方の
御勢は七萬餘騎とは申せとも國々の馳武者馬も人もみな

つかれば、候關東は草も木も皆兵衛佐に隨ひ付て候な
れば何十萬騎かあらん唯富士川を前に當て御方の御勢を
待せ給ふへうもや候らんと申

太平記云天正本三角入懸處ニ同七月五日美濃國ヨリ早馬打

テ土岐兵庫頭入道同濟房忽謀叛ヲ起シ國中ヲ却略ス(中

略)一日モ對治延引アラハ誠ニ帝都ノ煩ナルヘシトテ打

手ノ兵ヲ定メラレシカトモ末々ノ御氏族國々ノ葉馳武者

ニテハ叶フマシトテ宰相中將義詮ヲ上將軍トシテ武藏守

師直副將軍ニテ都合其勢二萬餘騎美濃國ニハセ下ル云々

聚樂物語云只今伏見殿へよせられ候共かいしく理を

得給ふ事は候はしあなたはふたいちうおんの侍ともなれ

は十騎か百騎にもむかひ候へしこなたは大勢なれとも諸

國のかり武者にて伏見に親をもち子をおきたる者或はさ

いあい心ひかれ何の御ようにもたちかたし又此城くわ

くに籠り給ふともよせてきひしく候は、頃てまづふもき

はまり候へさかたとをせめにして兵糧をつくし候は、みな

まゐるゐるんしやにつゐてかうさん云々

大友與廢記云小原盛元高橋秋種らうとう衛藤尾張守大將鑑

元を討捕ぬ鑑元重代の家臣は殘らすうち死すかり武者は

死をのかれ方々へおちゆさける

○法師武者

平家物語云法住寺合戦河内の日下黨に加賀房といふ法師武者有月毛なる馬の口のはきにそ乗たりける

承久軍物語云みをかさきをかためたるみの、りつしやくはんげんこのよしをみるよりもやすからぬ事におもひて小船にこきのり河中におし出しさしつめ引つめさんくにいるうつのみやよりなり又例の中さしとつてつがひかなくりはなちにいければまさきにす、んたる兵のくひのほねにいあてられやにはにたをれてしに、けりその次にくろかはおとしのよろひきたる法師むしや船はりにつ立あかりさんくにいける

太平記云住吉合戦楠カ勢ノ中ヨリ法師武者ノ長七尺餘モ有ラント覺エタルカ阿間了願ト名乗テ唐綾威ノ鎧ニ小太刀帶テ柄ノ長一丈計ニ見ヘタル鎧ヲ馬ノ平頭ニ引副テ少モ不擬議ニ懸出タリ

賀越關諍記云加賀越中能登一越前ノ勢ハ高木ノ要害ニ楯籠リ十死一生ノ合戦セントテ寄來ル敵ヲ待懸ル然ル所ニ寄手ノ方ヨリ月毛ノ馬ニ乗リ小櫻威ノ鎧着テ六尺有餘ノ法師武者眞前ニ懸出甲斐ノ法華院ト名乗テ出

伊勢兩宮兵亂記云濱湊ニ於テ宗徒ノ者十餘人其外雜兵餘

多討レテ鹿海川マテ引退ク宇治方ニモ法師武者宗本並ニ野臥一人楯突一人討ル

大友與廢記云長尾口合戦か、りける處に武者一騎歩立に成りて鎧を持出て上野四郎兵衛尉と名乗る豊後勢のうちよりも法師武者一人是も馬よりおり立て野上一閑と名乗大長刀をよこたへひかへたり

松隣夜話云上田又次郎二千餘兵佐藤一景ト云法師武者ヲ大將トシ太田ヲ包ミ寄來ル

又云黒き鎧に香染ノ頭巾シ念珠ヲ手ニ掛ケタル法師武者三人一所ニ立侍十人計リ打圍シタル有リ謙信見付玉フト等ク馬ヲ馳寄セ先達ノ口セ者トモ切拂ヒ三人カ中信立ト見エルヲ重子打ニ三刀切玉フ後ニ尋レハ其武者信立ニテ坐シケルトナリ

東遷基業云神君は法隆寺より御供の輩鎧を着すへしとの御下知にて胃をは着さりけり此時金地院并林道春民部卿法印與庵等も武具を帶し御前に伺候しけるを御覽して我幕下にも三人の法師武者ありとて笑はせ給ひけり

○古武者

異本太平記云目賀田合戦忠實ハ元來軍ノ競ヒ殿レヲ知タル古武者ナレハ目賀田ト屹ト目クハセシテ御方ノ勢ニ馳加ハ

ラント北ヲ差テ引テ行

○老武者

保元物語云長井齋藤別當眞盛弟三郎眞員片桐小八郎大夫景重須藤瀧口以下宗徒ノ兵攻入々々戦ケレハ惡七別當手取與次高間三郎同四郎吉田太郎以下爰ヲ前途ト防キケリ片桐八郎大夫ニ手取與次ソ懸合ケル與次ハ若武者也景重ハ老武者ナルウヘ戦渡テ既ニアフナク見ヘタリ云々

平家物語云實盛最手塚か郎等主をうたせしと中にへた、り齋藤別當にをしならへてむすくとむ實盛あつはれをのれは日本一の剛の者に組てうすなうれとて我乗りたりける鞍の前輪に押付てちつともはたらかさす頭かき、つて捨てけり手塚太郎郎等か討る、を見て弓手にまはりあひ鎧の草摺引上て二刀さしよはる處を組て落齋藤別當こ、ろは猛う進めとも軍にはしつかれぬ手は負い其上老武者てはあり手塚か下にを成にける

太平記云六波羅合戦爰ニ六波羅ノ勢ノ中ヨリ年ノ程五十計ナル老武者ノ黒絲ノ鎧ニ五枚甲ノ緒ヲ縮テ白栗毛ノ馬ニ青總懸テ乗タルカ馬ヲシツト歩マセテ高聲ニ名乗ケルハ其身雖ニ愚蒙ニ多年奉行ノ數ニ加ハリテ末席ヲ汚ス家ナレハ人ハ定テ筆トリナレト侮テアハ敵トソ思ヒ給フ覽

雖爾我等カ先祖ヲイヘハ利仁將軍ノ氏族トシテ武略累葉ノ家業也今某十七代ノ末孫ニ齋藤伊豫房玄基ト云者也云々

又云四條關合戦遙カニ北ノ方ヲ見ルニ輪遠ノ旗一流打立テ清ケナル老武者ヲ大將トシテ七八十騎カ程扣ヘタリ

明德記云山名奥州中務大輔兩人ノ兵共入替々々採ケル(中略)其中ニモ上原入道ト申老武者アリ引ケル御方ニ半町ハカリ先立テ猪熊ヲ上ニ一條マテ送タリケル云々

續清正記云谷の兵太夫といひし者道の傍より我を見付申けるはそこををるは虎之助にてはなきか若輩なる者のはやり過て敵前ちかくなりて馬に輪をかけたるは見くるしき物なるそ扣て馬を乗候へといひける時近比惡き言葉かな何とを彼に返答すへきと思ひ振かへつて見侍れば少こたかき其上に馬を横さまに立て居たりけりいやく、彼は功の入たる老武者なり味方は纒の勢なれば若追ひ立られ敵勝に乗て競ひきたらば横鎧を入れて突崩すへき爲めに屹と扣へたと見えたり

○若武者

保元物語云長井齋藤別當眞盛弟三郎眞員片桐小八郎大夫景重須藤瀧口以下宗徒ノ兵攻入々々戦ケレハ惡七別當手

取與次高間三郎同四郎吉田太郎以下爰ヲ前途ト防キケル片桐八郎大夫ニ手取與次ノ懸合ケル與次ハ若武者也景重ハ老武者ナルウヘ戦ヒ疲レテ既ニアフナク見エケル

太平記云六波羅河野對馬守カ猶子ニ七郎通遠トテ今年十六ニ成ケル若武者父ヲ討セシトヤ思ヒケン眞前ニ馳塞テ大高ニ押雙テムスト組

又云住吉合楠カ勢ノ中ヨリ年ノ程二十計ナル若武者和田新發意原秀ト名乗テ洗皮ノ鎧ニ大太刀小太刀二振帶テ六尺餘ノ長刀ヲ小脇ニ挟ミ閑々ト馬ヲ歩マセテ小歌々ヒテ進ミタリ

江濃記云牧村モ此由ヲ聞テ御方便最モニ候ヘトモ我等存スル子細候間先々二百四五十騎ノ勢ヲ出シ敵ノ様子ヲ見計ラヒ御手使ノ如ク致ス可トテ若武者二百五十騎御會寺表ヘ向フ云々

鹿島治亂記云左金吾下知相待所如案父義幹率ニ手勢夜中渡レ海未明押寄テ関ヲ揚ケ彼此々々ト下リ立チ案内ハ知ヌ門脇ノ塚ヲ乘リ門ヲ開ケト下知スル處ヲ矢フスマヲ作散々ニ射ル先ニ進ミシ若武者共射落サレ手負死人數ヲ不知

羽尾記云如案二ノ丸ヨリ本城ヘ通ル橋詰ニ武士トモ待

カケタリ勘解由橋ノ上ニ猶豫スル所ヲ或ハヤリヲノ若武者馳リカ、リテ擊ケル故ヲ蹈込過テボウヲ以テシタ、カ打レケルニヨリ云々

別所長治記云秀吉ハ再拜押取信長流ノ車引ニ人數ヲ左右ニ引取三木方ノ若武者跡ヲシタハントテ四五百人城戸ヲ開カセ出テントス

續撰清正記云本渡の城をのり取たる時或る若武者刀脇差の鞘を金のしつけにて指たるか城の塀に手をかけ乗こすへきとする處に何者やら二人來て後より尻を押あけるに此者は我を助侍る味方と思ひいかにもよろこび則城中へ乗込云々

武蔭叢話云後の眞田陣者慶長五年六月九日なり(中略)眞田カ兵山本清右衛門依田兵部唯二人城より出て二町はかりに堤の有る上へ登りて寄手を詠れば秀忠公御旗本よりはやり雄の若武者二三十騎馬の鼻を並へてかけ來る堤に兩人か居を見て馬をふみはなし鎧おつ取々々か、り來る

○懸武者
太平記云六波羅河野對馬守計一陣ニ進テ有ケルカ大高ニ詞ヲ被レ懸テ元來タマラス懸武者ナレハナシカハ少シモタメラウヘキ通治是レニ有リト云フ儘ニ大高ニ組ント相

近付ク云々

別所長治記云三木ニハ軍評定可有各出ラレヨト觸サセ天正七年己卯二月五日ノ早天ニ諸大將各相詰ル上坐ニハ小三郎ヲ始メ兄弟三人同名山城守一族侍大將面々三禮シテ席ヲサタメ二行ニ並ヒ居ル山城守申サレケルハ(中略)秀吉元來無ニ思慮懸リ武者ト聞ク其上今度野口神吉ノ兩城ヲ打取リ氣ニ乘リタル東國勢我カチニ距ケ出シ其時味方イカニモ弱々トアシラヒ川ヲ此ナタヘ可引取云々

○猪武者

保元物語云義朝白河殿討條爰ニ安藝守郎等ニ伊勢國住人山田小三郎伊行ト云ハ又ナキ剛ノ者カタカハ破リノ野猪武者ナルカ黒草威ノ鎧ニ同毛ノ五枚兜ヲ猪頭ニ著十八差染羽の矢負塗籠藤ノ弓持鹿毛ナル馬ニ黒鞍置ヲ乗タリケリ

源平盛衰記云八牧夜討條加藤兄弟心際不敵ナリト見テ軍ノ方人ニセント思ヒケレハ平家ニモハ、カラス親シク成リタリケルカツチニ佐渡ヘ參リテ憑ニ申ケレハ隔テナク被ニ思食ケリ兄弟トモニ兵也ケレトモ景廉ハコトニクラキリモナキ甲ノ者傍平ミスノ猪武者ナリ

太平記云細川相模守討條相模守ハイツモ己カ武勇ノ人ニ超タルヲ憑ミテ軍立餘リニ大早ナル人ナリケレハ寄手ノ旗ノ手ヲ

見ルト均シク二ノ木戸ヲ開ラカセ小具足ヲタニモ堅メス

拾ノ小袖引セタヲリテ鎧計リヲトツテ肩ニ抛懸ケテ馬上ニテ上帶縮メテ只一騎驅出給ヘハ相順フ兵三十餘騎モ或ハホウアテヲシテ未冑ヲ不着或ハ籠手ヲ差シテ未鎧ヲ不着眞前ニ裏連敵千餘騎カ中へ破テ入ル哀レ剛ノ者ヤトハ乍見片皮破ノ猪武者ヲコカマシク見ヘタリケル云々

勝軍地藏軍記云安藝守ハ元來軍立大早リニテ猪武者ナレハ敵ノカ、ルヲ見テ少シモ不擬議ヲメイテ進セメテ義賢ニモ馬淵ニモ牒シ合スル事モナク一文字ニ突イテカ、ル

○荒武者

吾妻鏡云文治二年四月五日壬子帥中納言去月十七日私書狀到ニ來鎌倉盛時披露之其詞云兼能事返々不便候別奇怪思食事不候傍置沙汰之間被仰出事計にて候歟被召仕可宜候歟如當時一者不善不見候世事可務粗知子細之間院中如召次訴訟などにても随分抽忠爲人不利惡事等候又漸見馴て候に聖人若荒武者など用使者も

無由候歟大事御使者にして候なん及廢置返々不便候奉爲君又無其詮事候歟爲被終身之歎候歟云々

大友與廢記云久留目合戦條野上清四郎肥前矢色鈍内といふ究竟のあら武者を討捕さある所に道雪馬しるしをよせられ貝を吹てとつと同勢威をまし押懸

甲陽軍鑑末書云景虎若氣ニテ荒武者ナレトモ晴信公御武勇ヲハカテ奉リ申ヘク候御人數一萬五千ハ堅御座アレハ午尅迄ハ敵一戰遅々仕ヘシサアレハ吉尅ト考申候ト申上ル故勸助申如ク備ヲ立ラル、也

○無雙勇者

別所長治記云此冬庵十三ノ年親ノ敵備前ノ國ノ住人萩原與市トテ大力ノ功者ヲ組打ニ打取シヨリ以來度々ノ高名不レ知ニ數ヲ無雙ノ勇士ト信忠モ感セラル云々

○不敵武者

太平記云赤坂合戦條武藏國住人ニ人見四郎入道恩阿年積テ七十二相模國ノ住人本間九郎資貞生年三十七歳鎌倉ヲ出シヨリ軍ノ先陣ヲ懸テ戸ヲ戰場ニ曝事ヲ存シテ相向ヘリ我ト思ハン人々出合テ手ナミノ程ヲ御覽セヨト聲々ニ呼ツテ城ヲ睨ンテ引ヘタリ城中ノ者トモ是ヲミテ是ソトヨ坂東武者ノ風情ト只是熊谷平山カーノ谷ノ先懸ヲ傳聞テ美

敷思ヘルモノトモ也跡ヲ見ルニ續ク武者モナシ又サマテ大名トモ見ヘヌ溢レ者ノ不敵武者ニ跳リ合テ命ヲ失ツテ何カセン只置テ事ノ様ヲ見ヨトテ東西鳴ヲ靜メテ返事モセス

賀越圖評記云江沼郡三城落去條城ノ内ニハ是ヲ見テ指テ大名トモ不見ヘ溢者ノ不敵武者ニ跳リ合テ命ヲ失テ何カセン只ヲイテ事ノ様ヲ見ヨトテ鳴ヲ靜テ返事モセス

天正記云北國御發向條四國のしゆこ長會我部くないのせうもちかはこんほん一條大納言家の侍にしてその名を知ものなし(中路)四國一へんに切なひけほしいま、にいせいをする此時五畿内七道の諸侍はくりくこうにたいし無敵者もとちか又ちけいをもつてせつ／＼こんたんをいゝといへともこれをゆるさす

○坂東武者

平家物語云橋合戦條上野國住人新田入道足利にかたらはれて故我杉の坂より寄んとてまうけたりける舟ともを秩父の方より皆わられて申けるは唯今爰を渡さすは長き弓箭の底なるへし水におほれてしなはしねいさ渡さうとて馬筏を作りてわたせはこそ渡しけめ坂東武者の習ひ敵を目にかけ川をへたてたる軍に淵瀬さらふ様や有る此河の深さ

早さ口河に幾程の劣り勝りはよもあらしつ、けや殿原とてまつさきにこそうちいれたれ

保元物語云是程軍立ハケシキ敵ニイマタアハス候雷電ナトノ落懸ランハ事ノ數ニモ候ハシト申ケレハ義明ソレハ聞ユル者ト思テヲツレハコソハ左有ルラメ八郎ハ筑紫生立ニテ舟ノ中ニテ遠矢ヲ射徒立ナトハ知ラス馬上ノ業ハ坂東武者ニハイカテ及ハン馳ナラヘテ組メヤ者トモト下知セラレケル

太平記云楠出張天王寺條正成ニ於テハ明日態ト此陣去リテ引退ソキ敵ニ一面目在様ニ思ハセ四五日ヲ經テ後方々ノ峯ニ篝ヲ燒キテ一蒸々程ナラハ坂東武者ノ習無シ程機波レテイヤイヤ長居シテハ悪カリナン一面目有時去來ヤ引返サント云ヌ者候ハシサレハ懸ルモ引モ折ニヨルトハ加様ノ事ヲ申也

又云赤坂城合戦條武藏國住人ニ人見四郎入道恩阿年積ツテ七十三相模國住人本間九郎資貞生年三十七歳鎌倉ヲ出シヨリ軍ノ先懸ヲ懸テ戸ヲ戰場ニ曝事ヲ存シテ相向ヘリ我ト思ハン人々ハ出合テ手ナミノ程ヲ御覽セヨト聲々ニ呼ツテ城ヲ睨ンテ引ヘタリ城中ノ者共是ヲ見テ是ソトヨ坂東武者ノ風情ト只是熊谷平山カーノ谷先懸ヲ傳ヘ聞キテ

羨敷思ヘル者共也跡ヲ見ルニ續ク武者モナシ又サマテ大名トモ見ヘヌ溢レ者ノ不敵武者ニ跳リ合テ命ヲ失ツテ何カセン

○田舎武者

異本伯耆卷云久シク在京シテ有リシ成田小三郎ト云田舎武者アリ醫法ヲ知タル由申笠置ノ皇居ヨリ雜色ノ驛ニテ召仕ハレシカ此度人夫男ノ走下部ニテソ隱岐國ヘモ下リケル

○落武者

天正記云秀吉上洛山崎合戦條たんはのみちすちをきつておちむしやにおゐては一人ものかさす是をうちせうりうしへよせ人數四方八めんにかこむ事た、あしろのことし

武家名目抄稿第六十五册

稿檢校保己一編

稱呼部 十七上

○武邊者 武籍者

甲陽軍鑑云山縣三郎兵衛土屋に語て云侍り武士道の沙汰に太身小身のうはさや時詞大方定りたり先第一に國持をは弓矢取と申第二に一郡一城斗の侍大將をは武籍者と申第三に小身なる人をは兵と申

又云あちま多田三八後は多田淡路守になさる、本國は美濃率人信虎公の御代より足輕大將を仕る此前以後ともに度々ほまれあり信州みな信玄公御手に入て虚空藏山の城けいこに多田淡路を指置なさる、時鬼を切たる大剛の武籍者也子息も淡路守にをとらぬ武籍之人なり

初井日記云織田信長日々威勢ツキケレハ一番ニ丹波ヲ手ニ入申度ト工夫シテ我家ノ明智十兵衛ト云族姓モシラヌモノヲ武籍者トテ漸々ニ取立惟任日向守ト名乗セ大將分トシテ大分ノ旗頭トモヲ加エ丹波ヲウカ、ウテ見ヨト申シ付レハ云々

又云道州忍郡丹波西國モ東國モ一面ニ此御家ヲ天下ノ主ニ取立ル人々ノ候ユヘ兎角上方へ御人數ヲ出サレト申

又云道州忍郡丹波西國モ東國モ一面ニ此御家ヲ天下ノ主ニ取立ル人々ノ候ユヘ兎角上方へ御人數ヲ出サレト申
コス其上丹波ノ波多野殿ハ大武邊者ニテ上方へ御越アラハ天下ヲ取テ進シ申スヘキト切々申送り給ヒテ候ユヘ御出馬ナリト云ヘハ又一方ヨリハ今度上方將軍ト和談トアルハ偽リ事ヨ誑リ候テ討亡ス丹波家ノ軍法ニ候ソナト、色々ニ耳ノ痛キ風説トモノ候

安土日記云天正八年八月十二日大坂大敵ト存武事ニモ不構調儀畧道ニモ不立入候ハ、居阪ノ取出ヲ丈夫ニ構幾年モ送候ヘハ彼相手長袖ノ軍候間行々ハ信長以威光ニ可退候條去而加遠慮候歟但武者道之儀可爲各別加様云々

又云天正八年八月武籍道フカヒナキニヲイテハ以屬詔調略ヲモ仕相タラハヌ所ヲハ我等ニキカセ相濟之所五ヶ年一度モ不申越之儀由斷曲事候

天正記云中川瀨兵衛きよひては度々に及ひふへんにをつとをらすようちせけんをの、しる侍也此のたひのはれわさ萬民の名をうるにおいては生涯のふかくと思ひさためうむにあふてしりそくことなかれしよそつ一千餘きにことはをかけるいを離れつきいたす

又云柴田修理柴田修理すけ勝家信長の内にてはふへんのおほへ其かくれなく越前へ信長度々にみたれ入といへ共御ふんこつをつくされ終に一國平きんにおほせつけられ云云

末森記云彼者カフイタル武邊ナレハ敵ニシテハ弱キニハ得ニ勝利ニ事モ可有之利家ヲ敵ニシテハ中々思モヨラス

當代記云舊冬就火災正二月方々音信無披露中一編十三
巴鳥居左門一蠟燭三百高木主水佐武備者ノ一同二百倉橋内匠助江戶近習一同百鶴殿兵庫頭江一同百青山圖書助江大緒大田新左衛門一御決拾五安藤彦四郎江已上奏者番永井右近去ル慶長五庚子年頭進物毎年大概如此年々ノ義以之可

知レ之

武蔭叢話云紀伊頼宣卿村上彦右衛門通清を武者奉行に仰付らる、云々村上は豫州來島にて武邊者なり其子八十郎相續ひて紀州に召仕はれけるとなり
又云黒田長政家老物頭ともを集長政か名代に出し采拜を取人數を扱ふへきものは誰にてあるへきと尋らる菅和泉

守罷出御名代にさいを取合戦仕るへき者は後藤又兵衛にて候尤高麗にて畜類にては候へとも虎御陣へ走り入御馬屋の馬とも噛殺し候へ共一人も出合す又兵衛掛出切留申候かやうの時も諸人に秀候間兎角極る所の武邊は後藤にて是あるへくと存候といふ

○武畧者

吾妻鏡云建久三年十二月十一日己酉走湯山住侶専光房進使者申云直實事就承御旨則走向海道之處企上洛之間忽然而行逢舉(中略)造一通書札一諫諍遁世逐電事一因茲於上洛者猶豫之氣出來歟者其狀案文送進(中略)凡生武畧之家携弓箭之習不痛殺身云々

小島長憲家譜云結句あなたより勘兵衛大坂へ參るを聞伊賀守武畧者にて出家に申付訴人をさせ此方に勘兵衛を爲殺て御所へ申

○武道功者

武林往昔日記云武道功者成人の云味方引取は一人残り留て殿を以て命を全く名を擧ぐるに心得有一寸海川ふせありて一道の處にては殿をするは大なる衆なり其子細は後に多の味方を持て一番をするさほひと一人跡に留り後に敵を持て味方の大勢を押し返し先えの遺下知をなすをは大

剛のはたはりある劔也といへとも一番鎧は人にはくれてぬけ出るのみならず敵の競を此方に取味方の勝利を定る一番鎧なれば尻もち同前の内に敵と一番は渡して合する一番鎧なれば古今是を擧たりと軍書にも書置なり

○打物達者

愚耳舊聽記云大光寺初度合戦之條味方のものとも瀧本一人は目にかけ爰に取こめかしこに追つめまければとも馬つよくして打物達者なれば懸合て打取へき様もなし

又云南部勢海瀨千餘人の寄手共亂懸て見へける處を城の中より見すまして大手の門を押開打物達者なる若者共百餘人一度にとつと切て出

○一騎當千 一人當千

平家物語云信連合戦之條信連物の具太刀をもおもふさまに仕りかねよき太刀をもつて候らはんには只今の官人共をよも安穩には歸し候はし其上宮の御在所はいつくに渡らせ給ひ候やらんまりまいらせぬ共たとへ知參らせ候共侍はんのものに申さしと思ひ切てん事を糺問に及て申へしやはとて其後は物も申さすいくらもなみたりける平家の侍ともあつはれ剛の者や是等をこそ一人當千の兵とも云へけれと口々に申ければ云々

又云一懸鎌倉權五郎か末葉梶原平三景時として一人當千の兵そや我と思はん人々はよりあへや見參せんとておめいてかく

太平記云稻村時成千浦條島津門前ヨリ此馬ヒタト打乗テ由井濱ノ浦風ニ濃紅ノ大笠符ヲ吹ソラサセ三ツ物四ツ物取着テアタリヲ拂テ馳向ヒケレハ數多ノ軍勢是ヲ見テ誠ニ一騎當千ノ兵也此間執事ノ重恩ヲ與ヘテ傍若無人ノ振舞セラレタルモ理リ哉ト思ハヌ人ハナカリケリ

又云大塔宮殿野落之條今ハトテモ通レヌ所ノ相構テ人々キタナヒレテ敵ニ笑ハルナト被レ仰ケレハ御供ノ兵何故カキタナヒレ候ヘキト申テ御前ニ立テ敵ノ大勢ニテ責上リケル故中ノ邊マテ下向フ其勢僅三十二人は皆一騎當千ノ兵トハイヘトモ敵五百餘騎ニ打合テ可レ戰様ハ無カリケリ、明德記云山名幡广守内野口へ押寄テ時ヲ同トソ揚タリケル先一番ニ島山右衛門佐ハ百餘騎ニテ懸合(中略)子息彈正小次男左馬助ヲ始トシテ遊佐神保譽田齋藤隅田蓮華院高山一騎當千ノ兵三百餘騎懸合ニ無手ト懸入テ黒煙ヲ立テ揉合タリ云々

箕輪軍記云榛名山の尾崎堀切築たる城の南表は箕に似たる迹みのわと名付たり名城なれば堅固にして飛鳥もかけ

りかたし況や籠城の面々上杉譜代の舊臣にて名惜む一騎當千の侍や

松原自休手録云翌年正月廿三日改懸川天王山ノ壯ニ立旗魁者ハ大須賀五郎右衛門(中略)從中駿河武功ノ士打出挑戰美濃浪人伊藤武兵衛一騎當千ノ兵ニテ進ミ出タルヲ原原次右衛門討取云々

○手柄者

伯耆之卷云成田入道を召て被レ仰下レけるは思召立る、事あり此番衆の中に誰をか可有御頼と勅定有ければ大屋又四郎と申者を召て來る以六條少將殿を汝を頼被レ思召由被レ仰下レければ小分限者にて難叶候但伯耆國奈和庄地頭に村上又太郎長高と申者こそ弓箭を取ては樊噲張良にも劣らしと思仁にて候其上家富一族も多く手柄の者共にて是を可有御頼候近國には自是外には候はずと申て御前を罷立ぬ云々

清正記云今日の働中々言舌にのへかたしと仰られ御硯より出され御自筆にあそはし下されたる書にいはいく武勇こころかけ手柄もの、若者とはなんちたるへしいよく武功をつくすへし

愚耳舊聽記云和徳殿戦死之條手柄ノ者共にも程々に御褒美被レ下

ける

○切者

初井日記云越州野合戦條尾林主膳父ニマサル程ノ大剛ノ者共切者ト云ハレタル男ナレハ今ハノカレヌ處ナリト存シツメタル體ニテ大音ニテ只討死ストヨハ、ツテ陣ヲ入カヘ入カヘ無二無三ニ切テカ、ル云々

○剛者

保元物語云安藝守郎等ニ伊勢國住人伊勢國語本當作伊賀本書前後作伊賀今偶誤耳山田小三郎伊行ト云バ又ナキ剛者カタカハ破リノ野猪武者ナルカ(中略)大將軍ノ引給フヲ見テサレハトテ矢一筋ニ恐テ向タル陣ヲ引事ヤアル縦筑紫八郎殿ノ矢ナリトモ伊行カ鎧ハヨモ徹ラシ五代中井本傳ヘテ軍ニ逢フ事十五箇度此下中井本我手ニ取テモ度々多クノ矢トモヲ受ケシカトイマタ裏ハカ、ヌ物ヲ人々見給ヒ八郎殿ノ矢一ツ受テ物語ニセントテ懸出レハ云々

平治物語云義朝鎌田ヲ召テ海道ハ宿ニ通りエカタキナル是ヨリ内海へ著ハヤト思フハ如何ト宣へハ慈栖玄光ト申ハ大炊カ弟也隠レナキ強盜名譽ノ大剛者ニテ候憑テ御覽候ヘト申セハ然ルヘシトテ此由ヲ仰セラル、ニ云々

平家物語云宗盛卿急出て競はあるか候はずと申すには

きやつめを手延にしてたはからぬるはあれ追かけて討
と宜へ共競は勝れたる大方の剛の者矢つきはやの手き、
にて有ければ廿四さいたる矢て先廿四人は射殺されなん
す音なせそとてつ、く者こそなかりけれ

源平盛衰記云高倉宮信信連モ消入様ニハ覺ケレトモカクモ
心弱テハカナウマシト思切涙ヲ押テ歸ニケリ御所中走リ
廻リテ見苦シキ者共モトリシタ、メ後青狩衣ノ下ニ萌黄
ノ糸威ノ腹巻キテ烏帽子ノ尻ホムノ窪ニ押入テ狩衣ノ小
袂ヨリ手ヲ出シ衛府ノ太刀ノ身ヲハ心得テ造リタリケル
ヲ帶テクラキリモナキ甲者ナリケレハ只一人中門ノ内ニ
タ、ツミテソ今カカト待タリケル

太平記云和田夜討和田カ兵赤坂ノ城ニ歸テ後四方ヨリ續松
ヲ出シ件ノ立勝リ居勝リヲシケルニ紛レ入四人ノ兵共敢
テ加様ノコトハ馴ヌ者共ナリケレハ無紛エリ出サレテ
大勢ノ中ニ取籠ラレ四人共ニ討死シテ名ヲ留メケルコソ
哀ナレ天下ノ剛者トハ是ヲソ誠ニイフヘキトホメヌ人
コソナカリケレ

又云實吹峠上杉民部大輔カ兵ニ長尾彈正根津小次郎トテ
大方ノ剛者アリ今日ノ合戦ニ打負タル事身一ノ耻辱ナリ
ト思ケレハ紛レテ敵ノ陣ヘ馳入將軍ヲ討奉ラント相謀テ

二人乍ラ俄ニ引兩ノ笠符ヲ著替ヘ人ニ見知レシト長尾ハ
亂髮ヲ顔ヘ振ト振リ懸根津ハ刀ヲ以テ己カ額ヲ突切テ血
ヲ面ニ流シカケ切テ落シタリツル敵ノ頭鋒ニ貫キトツ付
ニ取付テ只二騎將軍ノ陣ヘ入ル云々

又云六波羅武家可レ亡運ノ極ニヤ有ケン日來名ヲ顯セシ剛
ノ者ト云共武勇無双ノ強弓精兵ト被レ云者モ弓不レ引云
云

義貞記云石橋山合戦ノ時兵衛佐殿負軍ニテ落サセ給フニ
伊藤入道五十餘騎ニテ奉ニ追懸飯田三郎家義モ伊藤カ方
ニ有ケルカ唯一騎馳抜テ取テ返テ寄手方ヲ射ル其間ニ佐
殿落延サセ給ヒヌ家義カ振舞人ニ替レリサレハ右大將家
代ヲ取セ給テ先家義ヲ被ニ召出テ賞ヲ行ケルニモ數千
ノ侍ノ中ヨリ召拔テ日本一ノ大剛ノ者ヲ見ヨトツ被レ仰
ケル云々

鎌田雙紙云鎌田兵衛正清はならひもなきかうの者わらは
にしふやのこん王弓矢をとつて名人と名をえたるほと
もの也是三人をうたんに尾張八郡うこきてもたやす
うたれ給ふまし云々

應永記云豊後ナヲ大勢ノ中へ切テ入散々ニ戦ケレハ深手
十餘所負ヒ今ハ角フソト思ケン大音上テ名乗ケルハ日本

一ノ剛者大内左京權大夫内杉豊後入道ソ我ト思ハン人ニ
ハ討取テ弓箭取手ノ思出ニセヨトテ大勢ノ中へ切テ入云
云

又云去程ニ豊後入道ハ南ノ方ヲ固テ合戦シケルカ大將討
死ト聞テ吾モ討死セントテ北ノ陣ノ大勢中へ切テ入向敵
六人切テ落シ大太刀使ヒ剛ノ者死狂ヒノ事ナレハ不レ惜
レ命太刀ヲ打振テ懸リケレハ云々

蒲生氏郷記云九州名護屋御陣中ニテ正宗儀ヲ施藥院御取
成餘リニ結構ニ被ニ申過 太閤様御耳ニ當リ正宗事先年
企ニ逆意ニ氏郷ヲ可レ討ト籌策ヲ廻ス事雖及ニ度々一氏郷大
剛之者故手ハクレ仕不レ得レ討候キ其節正宗切腹可レ被ニ仰
付ニ候得共嶋津ノ者安藝ノ毛利景勝佐竹ヲ始其外遠國ノ
侍共氣遣可レ仕ト就レ被ニ思召ニ御用捨被レ成被ニ指置ニ云々

甲陽軍鑑云合戦せりあひ足輕場にて追頭の一ツ二ツをも
ふりよく取たる事をは利口者と云扱又右之場にて鎧をあ
はする人につ、き鎧下の高名をいたし此兩人につ、き鎧
わきをつめて譽有人を一度二度三度まではかひく敷

人と云右の仕合かさなりて四番めからは剛の兵として是を
おほえの者と云おほかたなり十度にあまるを場數ありて
名高き侍をさして大剛の人と云其人に分別工夫あれば何

と小身にても名人と名付る殊におのこの武籍走廻る事
老若によらす五百千ある一備の中より二人三人すくれて
せりあひの場或は城へ取よするにもふりの見ことにこた
へたる侍は一度にても剛の兵と名つけておほえの人とや
申さん

甲陽軍鑑末書云和田ノ城ニハ和田兄弟ノ騎馬三十騎ト申
セ共地戰ニテ七十騎加勢ノ横田三十騎ニ足輕百人手前ノ
者共ニ馬乗歩者合二百餘和田馬乗歩者合六百餘總合九百
ノ内外籠ル謙信一萬二千人數ニ攻落サレサルコト横田十
郎兵衛大剛ニシテ然モ弓矢功者ユヘ也

奥羽永慶軍記云大崎國分論敵ハ多勢ナリ千枝ハ上下七人ナ
リ危ク見ヘシ所ニ狼塚紀伊守ソレ千枝ヲ討スナト五六
人カケ來リ敵ヲ追返シ大勢ニ手ヲ負セ首十二三追討ニシ
テ引取レハ千枝主從七人數ケ所ノ手負引返シケル武者フ
リアツハレ武功ニソ見ヘニケル大將甚氣色ヨケニ打笑剛
ノ者ハ善惡ニ勝ル者也ト千枝葛岡ニ相劣ラス褒美ヲソ賜
リケリ

愚耳舊聽記云南部勢又峯野左兵衛として大方の剛の者は
も大和か家來成り土戸口をかためける
武蔭叢話云永井善左衛門は元來家康公御譜代也小田原城

の後出奔し浦生氏郷へ奉公氏卿死去の後上杉家へ出る元より大兵力の剛者也奥州福島口にて善左衛門唯一騎にて物見に出候蓋浦生の沼有其内より政宗の伏兵六人起つて善左衛門を取包む永井六人の敵中へ駆入四人討取殘二人は逃去けるかよりの手柄度々也若時分三州長篠の合戦に太刀打して高名する其時右の指を切られ太刀取落したるを外の敵口口口三町程にて追付其敵をも打て又高名し太刀を取戻す其時右の大指損し後迄見苦敷人か其指の疵を問は永井か曰馬に喰れ候由申ける惣して軍功にはこらぬ仁也とぞ

又云秀吉公ハ口口口仰らる、我此度京を打立時熊野山より佐藤四郎兵衛忠信か甲を求出せり彼忠信に替らぬ剛の者に此甲を取せんと思ふなり天下にて忠信同前の兵誰にて有へきと御尋に一言も出すものなし秀吉公御意に忠信に勝るも劣らぬと云は家康内本多中書也其子細は先年長久手合戦の時五百の小軍にて秀吉旗本數萬の陣にひたと挑かけ鐵砲足輕を掛たり兩軍相並て二里斗行連しに鹿角の甲着たる武士一騎川涯へ乗下し馬の口を洗はする誰も見知らずかと問ひしに稻葉豫州見知て本多平八郎と申上る秀吉覺えず涙流云々必ず々々平八を鐵砲にて打事なか

るへし此故に甲を中書に取らせんと仰られ其翌日御前へ召し段々仰立られ彼甲を下されたる其晩秀吉公中書を召て汝か武勇人是を知といへとも名を天下に知らしめ忠信か甲をくれ大剛一の兵と日本國中に披露せしは秀吉か恩なり云々
又云平松金四郎は家康公御譜代たりといへとも度々口論乙度有殊に遠州荒井の渡舟にて柏原新五郎と喧嘩致し目の前にて金四郎若黨をた、かれおめく、と除く世の人平松と刀を一所に置す家康公問召れ何共あれ平松か眼さし剛の者也仰らる天正二年四月九日に池田勝入父子森武藏守と御旗本にて御一戰大事に及候處に唯一人勝入か數萬の陣へ鎧を入突崩し候平松申者は最早思ひ殘す事なし誰にても出候へ薙刀打に切立へし昔の平松と思召候な殊の外荒成候と荒言咄に一人も詞を出者なし
又云廣澤兵庫頭小田原落去以後太田十郎氏房は氏直供にて高野へ登山有しかは廣澤弟乃關根織部諸共主に付高野へ登云々翌年氏房暇給り秀康卿へ御奉公仕り一伯殿御代になり敦賀町奉行に廣澤被仰付候て去子細有之公儀の囚人に成候を酒井讚岐守忠勝兼々大剛の兵たる事を聞及び廣澤を申預り若州小濱へ遣はす其子孫廣澤兵庫の

助として酒井修理大夫忠直家老と成て是あるよし長源寺上人物語なり

又云昔より皆朱の鍵瓊瑤の鍵は武功重りて歩士ならては免さず駿河に家康公御隠居成され候砌御城普請を諸大名へ仰付らる大横目衆に仰渡さるは向後皆朱瓊瑤の鍵禁制若持せ候輩は改申へき旨仰付らる四五日過て皆朱の鍵爲持たる者普請に掛り候役人と見え蓋浦皮の立付にて三十人斗供召連通る御横目衆是を咎め名を聞き候所に細川越中守内澤村大學と名乗て打過る其晩御夜詰の砌言上仕候家康公聞し召れ其澤村大學は若き時才八といふて小牧陣の砌(中略)太閤方敗軍に成候時細川越中守太閤の先手にて我等先勢を引受一戦有し此澤村一番鎧を合する其働眼前に見及たりかやうの剛の者持へき爲外の者皆朱瓊瑤の鍵禁制する事也と仰出さる澤村承り忝事身に餘り越中守も大慶致されたりと聞

○無雙之勇者

吾妻鏡云養和元年閏二月廿五日辛未足利又太郎忠綱雖令同意于義廣野木宮合戦敗北之後悔先非耻後勘潜籠于上野園山上郷龍興招郎從桐生六郎許數日熱居遂隨桐生之諫經山陰道赴西海方云々是末代無雙勇

士也三事越人也所謂一其力對三百人二其聲響十里三其齒一寸也云々

太平記云赤松入道圓心賜播磨國住人村上天皇第七御子具平親王六代ノ苗裔從三位季房カ末孫ニ赤松次郎入道圓心トテ弓矢取テ無雙ノ勇士有元來其心淵如トシテ人ノ下風ニ立タンコトヲ思ハサリケレハ此時絶エタルヲ繼廢レタルヲ興シテ名ヲ顯ハシ忠ヲ抽ハヤト思ヒケルニ此二三年大塔宮ニ屬輿奉テ吉野十津川ノ艱難ヲヘケル圓心カ子息律師則祐令旨ヲ捧テ來レリ
多聞院日記云文明十七年四月十日今度一所寄付の由來は播州備州以下赤松本來知行の分國の事を先年普光院を於赤松屋形奉誅の後公方依爲山名金吾入道令對治赤松自其以來依上意軍忠與赤松分國山名方令知行(中略)然に舊冬又赤松令下向致入國之企連に及合戦之間依小勢初は赤松打負大略無正跡然而兵部少輔依爲無雙之勇者當年閏二月廿七八日合戦盡得勝利赤松方大慶此事也

愚耳舊聽記云和德殿較戰死之條設岐親子の人には甚心剛猛にして謀計又たくましく當代無雙の勇士なれとも運つきぬれば力なし前後の敵を防きかねて見えにける

○勇士

吾妻鏡云治承四年八月十九日己亥兼隆親戚史大夫知親在當國蒲屋御厨一日者張行非法惱亂士民之間可停止其儀之趣武衛令加下知給(中略)又此間自土肥邊參北條之勇士等以走湯山爲往還路仍多見狼藉之由彼山衆徒等參訴之間武衛今日被遣御自筆御書被宥仰之一

又云治承四年十月廿二日辛丑武衛被感仰家能云本朝無雙勇士也於石橋乍相伴景親戰奉通訖今又竭此勳功未代不可有如此類者諸人無異心云々

又云治承四年十二月廿二日庚子東國勇士者皆奉從武衛畢仍武衛相引數萬騎令到鎌倉給

又云養和元年二月十八日乙未大河戸太郎廣行同弟次郎秀行號清同三郎行元號高四郎行平號高以上四人日來蒙御氣色今日有免許廣行者爲三浦介義明之掣就其好義澄預守護之間具參之武衛於籬中覺畢見其面皆勇士之相之間及御感云々

又云建久二年十二月十五日己丑故土佐房昌俊老母自下野國山田莊參上之由申之則召御前申出亡息事頻涕泣(中略)故豫州奉背幕下給之時及欲被遣討手一

伊山敵切塞不得通仍逗留桂川西川島邊南方勇士追懸之由有二其間

明德記云寄手ノ兵者十騎廿騎走寄々々下立テ一度ニ打死スル者有馬ニテ中ニ懸入テ切落サレテ討ル、モ有引組共ニ差違テ同枕ニ死モ有リ理リ哉西國一ノ勇士ト名ヲ得タル大内勢ト山名一家ノ其中ニ鬼神ナントオチラレシ上總介ト小林ト互ニ勇ミ進テ只死ルヲ限リニ戰者ハ有ケレトモ命ヲ惜テ一足モ退ク者ハナカリケリ

建内記云永享二年二月十一日興福寺學侶衆徒等捧事書豐田中坊退治事來十三日學侶下向菩提山相催勇士來十六日可發向云々

豆相記云景虎士卒太多猛威益大終越師伐於小田原而陣營大磯小磯藤澤田村大上八幡原木等邑其間無尺寸卓錮地矣氏康勇師松田尾張守拒戰

又云松田尾張守雖爲當千勇士當數萬大軍猶蟻蟻遮車精衛填海難遂防戰矣退于城景虎追及城中逆池前圖然未決雌雄矣

羽尾記云能登守待モウケタル事ナレハ持太刀ニテ丁ト打然レトモ木ノ内カタナハ二尺八寸海野太刀ハ三尺三寸殊ニ茶磨破トテ異名アリ備前長光也其上能登守打物トリテ

勇士等申障之處昌俊乍爲法體領狀遂奉命於關東之間至沒後今令引精兵之比量給云々

又云寶治元年五月廿八日庚辰凡當于關東鬼門方角被建五大明王院賞翫有驗知法高僧及陰陽道之類又愛譜代勇士等給云々

太平記云山崎兩六波羅ハ度々ノ合戰ニ打勝ケレハ西國ノ敵恐ル、ニ不足ト欺キナカラ宗徒ノ勇士ト被憑タリケル結城九郎左衛門尉ハ敵ニ成テ山崎ノ勢ニ加リス

又云六波羅已冠ノ始ヨリ大手搦手同時ニ軍始マテ馬烟南北ニ靡キ時ノ聲天地ヲ響カス内野ハ陶山ト河野トニ宗徒ノ勇士ニ萬餘騎ヲ副テ被向タレハ官軍モ無左右不懸入敵モ輒ク不懸出云々

又云左衛門佐ノ兵ノ中ニ三村首藤左衛門後藤掃部助西塔ノ金乘坊トテ手番タル勇士五騎アリ互ニ吃ト合眼メ南部ニ組ント相近付ク云々

又云今度南方退治ノ時モ敵ノ勝ニ乘ル時ハ悦ヒ御方ノ利ヲ得ルヲ聞テハ悲是ハ抑勇士ノ本意トヤ可申忠臣ノ舉動トヤ可申云々

園太曆云觀應二年正月十六日今朝將軍以下籠東寺之由風聞又或說無其儀差西沒落欲籠香山寺城之處於

ハ樊噲ヲアサムクホトノ勇士タリ片手ニ八十人カカヲ持本來サイコトハ思極タリ唯一打ト打ケルホトニサスガノ木内モ打レケリ

箕輪軍記云上野國群馬郡箕輪城主長野信濃守業政古今ノ勇士也殊に業平の末葉にて智仁勇の三徳を兼備ける

武蔭叢話云缺口に勇士有といふ事を或人乃曰上杉景勝の内川田盛物いくちなり家康公に本多百助正廣いくち武田信玄に山縣三郎兵衛昌景又福島左衛門大夫家老長尾隼人

佐一勝缺唇なりいつれも大剛の士なり長尾隼人は本は山路久の丞と云伊勢神戸下總守友盛の旗下にて高岡の城主也父は山路玄蕃と云北伊勢にて隠れなき勇兵なり隼人後

には福島家にて一萬石を領し安藝の本條の城主と成古人曰隼人ハ佐々木四郎高綱の後胤也大兵大力にて十幅一丈の四目結の白母衣一間半宛出したる銀の如意半月を出し

に致したるとそ大坂御陣の時家康公此隼人を士の中の人參と御譽成されける

又云板倉伊賀守勝重の物語に紀伊大納言頼宣公の御母儀お萬殿塙圍右衛門事を聞及れ御子達に寶物太刀を進するは常の事也大將乃寶といふは名有勇士也能侍を一人にてもいとをしき子には進度ものなれば圍右衛門は常陸介

殿御家人に成さるへきとして御鏡登金とて五百兩つ、毎年御拜領の内を二百兩つ、團右衛門に合力これありたるとなり

○壯士

吾妻鏡云元久元年八月四日甲午將軍家御嫁聚事日來者可爲上總前司息女之由雖有_二其沙汰不_レ及_二御許容_一被_レ申_二京都_一已訖仍彼御迎以下用意事今日有_二内談_一於_二供奉人_一者爲_二直御計_一彼是人數以_二容儀花麗之壯士_一可_レ被_二遣撰_一之由云々

○健士

吾妻鏡云治承四年九月五日甲寅有_レ御_二參州崎明神寶前_一疑_二丹祈_一給所遣召之健士悉令_二歸往_一者可_レ奉_レ寄_二功田_一貴_二神威_一由被_レ奉_二御願書_一云々

又云文治五年八月七日甲午泰衡日來聞_二二品發向給事_一於_二河津賀志山_一築_二城壁_一固_二要害_一國見宿與_二彼山_一之中間俄構_二口五丈堀_一堰_二入逢隈河

流柵_一以_二異母兄西木戸太郎國衡_一爲_二大將軍_一著_二金剛別當秀綱_一其子下須房太郎秀方已下_二二萬騎軍兵_一凡山内二里之間健士充滿云々

又云建保六年九月廿九日丁酉京都飛脚參著申云去廿一日山川衆徒頂_二戴日吉祇園北野等神輿_一入洛奉_レ振_二開院殿陣

○大力者

太平記云_二矢野坂手_一義貞ハ兼テヨリ馬廻ニ勝レタル兵ヲ七千餘騎圍マセテ粟生篠塚名張八郎トテ天下ニ名ヲ得タル大力ヲ眞先ニ進マセ八尺餘ノ金棒ニ疊楯ノ廣厚キヲ突双へ縦ヒ敵懸ルトモ諷ニ不_レ可_レ懸引共四度路ニ不_レ可_レ進懸_二寄セテハ切テ落セ中ヲ破レテ双へヨ一足モ敵ニハ進ムトモ退ク心不_レ可_レ有_二諸軍ヲ諫テ被_二下知_一ケル

又云_二官軍引退_一伊賀國ノ住人ニ名張八郎トテ名譽ノ大力ノ有ケルカイテ渡シテ取セントテ鎧武者ノ上卷ヲ取テ中ニ提ケ二十人マテコン投越ケレ云々

又云一條次郎三千餘騎ニテ戦ヒケルカ新田左兵衛督ヲ見テヨキ敵ト思ヒケルニヤ馳双テ組ントシケルヲ篠塚中ニ隔テ打ケル太刀ヲ弓手ノ袖ニ受留大ノ武者ヲカイ摺テ弓杖ニ丈計コソ投タリケル一條モ大力ノ早業成ケレハ抛ラレタレ共倒レス漂フ足ヲ踐直シテ猶義貞ニ走懸ラントシケルヲ篠塚馬ヨリ飛テヨリ兩膝合テ倒ル、ト拘ク一條ヲ起シモ立ス推ヘテ首カキ切テソ指揚ケル云々

難太平記云仁木左馬助義長今の右京大夫也三井寺路めく

頭_二仍遣_一北面衆_二被_レ防_一禦之_二又在京健士光員基清能道廣綱等依_二勅定_一馳_二參宮門_一云々

○功者

別所長治記云梶原冬庵軍ハ半ナルニキタナキ味方ノ有サマ也トテ手ノ者卅人左右ニ隨ヒ打入敵ニコ、カシコニテ寄合戦ケル(中略)此冬庵十三ノ年親ノ敵備前國ノ住人萩原市トテ大力ノ功者ヲ組打ニ打取シヨリ以來度々ノ高名不_レ知_二數無雙ノ勇士ト信忠モ感セラレ

松原自休手録云十六日召_二牧清兵衛稻富宮内中井大和_一撰_二炮之功者_一處々櫓ヲ可_レ打破_一依_レ之備前嶋從_二菅沼織部カ攻口_一以_二大筒百挺_一被_レ打_レ之云々

○大功者

伊達日記云伊達遠江七十三ニ成大功之者眞先ニ乘入敵二人ニ物付仕一人家中ニ頭ヲトラセ山ノ南以下五町計橋爪迄追付候處ニ敵橋ニテ返シ又味方ヤマへ被_レ追上候羽田右馬助敵味方ノ境ヲ乘分馬ヲ立廻シニ靜ニ上サセ候云

又云兼而梅雪モ御見廻候様ニテ城ヲ爲_レ取可_レ申由被_レ爲_二申合候_一ヘトモ刑部少大功ノ者ニ候間入申由申候ハ、即可_レ被_レ打ト被_レ存入間敷トハ申サレ候ト見エ申候刑部少

り地蔵には故殿向給ひしに義長云今日は見ゆすつくの戦なるへしと云ければ故殿勿論と返事有き終日雨所合戦に仁木手退間相坂手より伊勢國あいと云大力の者只一騎うしろより來りけるを前のた、かひの隙なきに是を知給はす故殿乃御あとにひかへられたる安藝入道殿の甲のしころを切落しければ落馬也

御隨身三上記云永正九年八月十五日去年被_レ取落_二候一卷かへる書をした、めなをし進上いたすへき案文相調持參仕候(中略)次秀庵慈照院様御供のき五月十二日まで御物語のきとも拙者まで面目の至なり土岐立たし大力の也然間慈照院様御前にて堅木乃手一束はかりに圓をおらせられ候へ共不_レ打候を秀庵御をり候事被_二仰出_一候

江渡記云新九郎方ニ熊澤ト云大力ノ強兵力ヲ出タレハ道三衆野村越中守馳向ヒテ組テ落ツ熊澤ハ大力ナレハ上ニ成テ野村ハ早業ナレハ下ニ成ナカラニ刀サシテハネ返シテ熊澤カ首ヲカイテ指上タリ

箕輪軍記云藤井此由を聞元より望所なりとつてかへし馬の上にてむつと組兩馬か間にとつとおちにけり上になり下になりしはし争ひけれとも藤井は元より大力なり勝頼は力をとりて押付られ既に危く見える所へ原加賀守

國貞馳來り馬より飛おり藤井を組伏せ勝頼に首とらせけ

武家名目抄稿第六十六册

塙檢校保己一編

稱呼部十七下

○覺者 覺人

伊達日記云十二御成候國王殿ト申子息ヲ譜代衆守立義
繼イトコ新城彈正ト申兼テ覺ノ者主ニ成籠城仕候
甲陽軍鑑云海賊衆岡部忠兵衛船十二艘同右岡部忠兵衛駿河
にて忠節人候故土屋忠兵衛になされ候巳ノ極月駿河治て
より土屋備前になされ候此内覺の者大石四方介澤郷左衛
門ときは萬右衛門入澤五右衛門保科六右衛門
甲陽軍鑑末書云信玄公暫有テ次郎右衛門小身ニテカヤウ
ノ行イカサマタ、モノナラスト思召此者ヲ助置取立テ先
ヲサセ然ヘントテ無事ニ被レ成岡部次郎右衛門ヲ召抱ラレ
本地三百貫ヲ三千貫ニ被レ成侍五十騎預被レ下也サテ又次
郎右衛門弟次部右衛門ヲ如駿府ノ館ニ籠タル覺ノ者共五
六十人スクリ召出サレ信玄公へ御禮申上ル也
又云朝比奈兵衛逆心也ト云ヤ否殘二十頭ノ衆色ヲ立テ別
心也信玄公へ先衆ハ山縣馬場小山田兵衛小幡上總真田源

太左衛門同兵部内藤七頭江尻ヲ越宇八原迄旗先見ユルト
氏眞公ノ旗本ニ随分覺ノ衆アリトイへ共ウチハ替候へハ
則時ニ御館ヲアケラレトキノ山家ヘツホミナサル、
武蔭叢話云上田主水入道宗古ハ關ケ原御陣ノ時次部少方
に着故ニ淺野紀伊守幸長ニ御預一萬石取ケリ是ハ明智逆
心ノ時大阪にて織田七兵衛信澄の首を取たる覺のものな
り

若き時何ほと覺えの者も年寄ては成へからすこゝろこそ
猛くとも若年とは違んと云才藏老人なれば氣にかけて云
年寄も人によるへしといふ若物とも申は何ほと剛の者に
ても足か弱くて叶ふへからすと云才藏聞て夫も人による
ふといふたり誠に老人まで甲冑兵仗帶し馬に乗り下立て
走るに若輩にもこへたりしと也才藏家老に竹内久右衛門
といふ覺の者故云々

又云小田原夜討の時氏郷内結西十郎兵衛と城方奥村桐之
助と鍵を合する由右乃結西十郎兵衛は代々覺の者なり父
十郎兵衛は江戸野良田合戦に淺井久政の兵百々内藏介を
討取此内藏介覺の者にて名譽の刀を持つ云々

續武家閑談云内藤家傳正成は東照宮の御内にて點の掛りし覺
の人也點のかゝりしを是其頃信長公家々の兵士を目録に
被レ成武功あるには自分墨を引給ふ正成も其合點の隨一
なり

又云加賀利常卿の内大音主馬介に若侍共申ケルハ主馬殿
も心は猛く候共今は走る事叶ふまじければ鍵の手筈へは
おくれ給はんと嘲る主馬か曰走りの早きとてさしてたる
事も成らす鍵合の時は十間十貳間なるゆへ人に先を仕る
常に五丁十丁は走る事安し鍵前十間十五間を走り出る
達者は覺の者にてなければ成らすと云若き衆いづれも閉
口すと云々

○早雄者
太平記云六波羅信濃守範資鑑路張左右ヲ願テ誰カアルア
ノ木戸逆木引破テ捨ヨト下知シケレハ宇野相原佐用真島
ノ早リ雄ノ若者共三百餘騎馬ヲ乗捨テ走リ寄
○弓矢程之者
武蔭叢話云天正六年三月より翌年二月迄越後國中貳ツに
成て騒動止事なし阪戸の城は上杉彌五郎陣所愛宕山の麓
なれば景虎よりも大軍にして毎夜館城より北條丹後守忍
んで泊り番に來り夜明には館へ歸る(中略)北條相果候と

又云可兒才藏吉長はかくれなき覺の人笹をさし物にする
故笹の才藏と云藝州廣島にありし時若者共集り語るは年

千三百九十七

聞上杉彌五郎先手にて景勝館城へ寄らる館にては弓矢程の丹後討れし故叶はずして上杉憲政も三郎景虎も信濃堺鮫ヶ尾の城へ落申され候

○名譽者

伊達日記云彼肥前ハ名譽ノ者ニテ惣團扇休雪肥前ニ被ニ仰付候者ニ候窪田ノ城ハ飯坂右近大嶺式部福原ノ城ハ潮上中務高倉ノ城ハ大條尾張被遺候本丸ヲ可ニ請取一由被ニ仰付候云々

○武勇者

蒲生氏郷記云稻葉伊豫守是ヲ見テ蒲生カ子ハタ、者ニテハ有マシアレカ一定勝タル武勇之者ニテナラスンハ成者ハアラントイハレケルト也

○重代者

義貞記云情ニ依テ命ヲ失フコトナレハ重代ノ者ニハ唯常ニ目ヲカケ詞ヲ和スヘシ世ヲ治ムル謀ハ唯禮ト詞ヲ先トス以ニ無益之言一人ノ恨ヲ負事無下ニ無智ナル心ナルヘシ次恩賞事必譜代ノ人ニヨルヘカラス縦ヒ後參ナリトモ當時ノ器用ニ隨テ可ニ計宛云々

慶長年録云慶長十六年十二月二日秀頼より宰相殿御痘瘡御本服の御祝儀駿河に御使者有遊佐新左衛門下向是元來

甲陽軍鑑末書云三増瀬筋ノ様子ヲ生捕ノ郷人ニ問給ヘハ彼時ヲ取キル衆ハ北條陸奥守同弟安房守忍衆深谷江戸川越衆碓氷サクラコカ子岩筑北條上總宗徒ノ侍大將合二萬餘三増瀬時ヲ取切由聞召云々

松原自休手録云今般討取ル首記一萬三千宗徒ノ人々ニハ山縣三郎兵衛馬場美濃小幡備前横田備中具田源左衛門弟兵部下十二等也

備前文明亂記云山名入道同心ノ人々先山名相模守同修理太夫同七郎澁川治部大輔前司大内新介河野伊豫守島山右衛門佐ヲ始トシテ其外宗徒ノ大名一味猛勢ニテ公方ノ御營ヲ圍ミ申ス

○恩願者

太平記云本問自本間山城左衛門ハ多年大佛奥州貞直ノ恩願ノ者ニテ殊更近習シケルカ聊勘氣セラレタル事有テ不_レ被_レ免_ニ出仕_一未己カ宿所ニソ候ケル云々

○強打

奥州後三年記云武衛かもとに龜次并次と云二人の打手ありならひなきつはものなり是をこはうちと名付たり武衛使を將軍の陣へつかはして消息していはくた、かひやめられて徒然かきりなし龜次といふこはうちなん侍るめし

河内重代之侍也云々

○若者

甲陽軍鑑末書云晴信公原美濃小幡山城山本勘助ヲ召テ景虎ハ當年十八歳若者ナレ共人ニ頼_レ出候ヘハ今日必合戰セント存ヘシ晴信モ義清ニ度々勝今度景虎ヲ大形ニ仕リ指置テハ跡ノ勝利ミナ水ニナル程ニ一戰セントキハハテ其方三人物見ニ指越也云々

義光物語云義光公聞召我は知といへとも典膳は文武に達したり若者と云其上に景勝佐々木の家なれば何ともして助置味方になさんため空しらぬ牀にて落しめる也

○宗徒

太平記云千飯破赤坂ノ大將金澤右馬助大佛奥州ニ向テ宣ヒケルハ前日赤坂ノ攻落ツル事全ク士卒ノ高名ニ非ス城中ニ構ヲ推シ出シテ水ヲ留メテ候シニ依テ敵程ナク降參仕候キ是ヲ以テ此城ヲ見候ニ是程纒ナル山ノ巔ニ用水アルヘシトモ覺候ハヌ又アケ水ナントヲヨソノ山ヨリ懸ヘキ便モ候ハヌニ城中ニ水卓散ニ有ケニ見ユルハ如何様東ノ山ノ麓ニ流レタル溪水ヲ夜々ニ汲歎ト覺テ候アハレ宗徒ノ人々一兩人ニ仰付ラレテ此水ヲ汲セヌ様ニ御計候ヘカシト被_レ申ケレハ云々

て御覽すへしそなたよりもしかるへき擊手一人出してあしあはせたかひに徒然をなくさめられ侍るへきかといひをくれり

○槍柱

大友與廢記云伊東三位入道伊東方へ使者を出し一戰ののそみをこふ伊東このむところのさいはひとてたせひを出さるへき用意なりこ、に三位内のさむらひ伊東權守として大剛一の鎧はしら有三位殿を諫ていはく今日御人數を出されん事御無用の義に御座候

○骨切

官地論云久安之陣見勢計殘置潛々忍夜陰紛額口一手成城衆是不知夢去程及ニ七日之早天ニ諸勢各揚ニ合度之野狼ニ狸屎末若闇打立從ニ四方ニ詰寄同時揚ニ時ノ聲ニ大山爲_レ是崩湖水爲_レ彼傾忽疑落輪際城中敵楯鼻調聲合時宛如_レ繫_ニ布_一鼓於雷門_一如_レ案從_ニ城方_一究竟之骨切二千餘人楯三百帖計突撰打出

○究竟之兵 究竟者

伊達日記云御馬二匹御庭へ呼セラレ一匹ハ義隆一匹ハ刑部御乘セ召連ラレ候刑部ハ刑部少カ家中ノ者究竟ノモノ共三十三人御座候刑部少ハ指置義隆御馬ノ口ヲ取御跡先

ニ付御共之衆無用之由申候云々

天正記云秀吉上落山 秀吉人數備中備前にあひおくる、もの
おほければわつかに一萬よきに過す然といへとも皆くつ
きやうの兵なり

又云これと御側の人に我おとらしと火花をちらし相戦ふ
四方へさつと追散す其時明智孫十郎杉生三へもん賀なり
せい次其外くつきやうの兵百人はかり名のりかけくき
つてかゝる

武蔭叢話云大阪冬御陣に蜂須賀阿波守致鎮陣へ塙圍右衛
門夜討を致し阿波守家老中村右近を始屈強の侍二十四人
討取雑兵は數十人討捨なり

○打物兵

播州佐用軍記云十二月十日城 小寺蜂須賀山口梶原ハ東河原
エ打上リケレトモ餘リ無勢成ハトテ見續居タル所ニ後ヨ
リ續ク勢有ト見テアラハ先追カケラレナト勵テ風ノ如ニ
足輕ヲ走ラシメ二陣ニ打物ノ兵ヲ進テ追カケタリ

○城兵

東遷基業云秀元の軍士に山脇作左衛門三の丸へ一番に乗
込れれとも鐘を蒙り後日に死すかくて城兵は三の丸を
捨て二の丸へ引退秀元の軍士等二の丸へ攻込へしと競ひ

挑戦云々

扶桑略記云天喜五年十一月將軍頼義卒兵千三百餘人
欲討貞任等愛貞任等引卒精兵四千餘人拒戦
陸奥話記云同年五月十一月將軍率兵千八百餘人欲討
貞任一宗任等率精兵四千餘人以金爲行之河崎棚爲營
拒戦黃海云々

平家物語云一懸 河原兄弟究竟の弓の上手也ければさしつ
めひきつめ散々に射る今は此者愛し悪し討やといふ程こ
そ有けれ西國に聞えたる強弓精兵備中國住人眞名邊四郎
眞名邊五郎として兄弟有兄の四郎をは一谷に置れたり弟五
郎は生田森にありけるか是をみて能響てひやうとはなつ
河原太郎か鎧の胸板を後へつ、と射抜れて弓杖にすかり
す、む處に云々

又云遠矢 平家は千餘艘を三手につくる先山賀兵庫藤次秀
遠五百餘艘て先陣に漕向ふ松浦黨三百餘艘て二陣に續く
君達二百餘艘て三陣に續き給ひけり中にも山賀兵庫藤次
秀遠は九國一の強弓勢兵なりければ我ほとこそなけれと
も普通さまの勢兵五百人すくつて舟の船袖に立て肩を一
面に双へて五百の矢を一度にはなつ

承久物語云するかの二郎からうとうに小河の太郎と申も

進みけるか深手負者多くして引返す此時城兵取て返し身
命を捨て防ぎければ秀元の兵士追手の橋まで崩れけるを
秀元怒てかけ向ひきたなき奴原かな逐一に切捨にせよと
下知せられければ云々

○精兵

三代實錄云元慶二年夏四月四日己巳出羽國守正五位下藤
原朝臣與世飛騨奏言秋田郡城邑官舎民家爲凶賊一所燒
亡之狀去月十七日上奏厥後差權椽正六位上小野朝臣
春泉文室眞人有房等授以精兵入城合戰夷黨日加彼衆
我寡城北郡南公私宅皆悉燒殘殺虜虜物不可勝計
此國器仗多在彼城舉城燒盡一无所取加之去年不登
百姓飢弊差發軍士曾无勇敢望請隣國援兵勦力襲伐
將門記云平貞盛奉召將門之官符到常陸國仍國司類
牒送將門一件貞盛脫追捕上道者也公家須捕糺其
由而還給得理之官符是尤被矯飾也又右少辨源相職
朝臣引仰旨送書狀詞云依武藏介經基之告狀一定可
推問將門之後符已了者待詔使到來之比常陸介藤原維
幾朝臣息男爲憲偏假公威只好冤枉爰依將門從兵藤
原玄明之懇將門爲聞其事發向彼國而爲憲與貞盛
等同心率三千餘人之精兵恣下兵庫器仗戎具并楯等

のはせい兵のてき、なるかしうと立ならんてかなくりは
なしにひたとはなつむかふのきしへはふつうのやはと、
くへしとも見へさる所にま、のうちへ雨のふることくに
いこみければ大しやうさいしやう中將こらへかねてうへ
のたうの内へひきたまふ

太平記云箱根竹下義貞ノ兵ノ中ニ杉原下總守高田薩摩守義
遠葦垣七郎藤田六郎左衛門川波新左衛門藤田三郎左衛門
下十一トテ黨ヲ結タル精兵ノ射手十六人アリ一様ニ笠符
ヲ付テ進ニモ同ク進ミ又引時モ共ニ引ケル間世ノ人此ヲ
十六騎カ黨ト申ケル彼等カ射手ケル矢ニハ楯モ物具モ
タマラサリケレハ向フ弓ノ敵ヲ射スカサスト云コトナシ
云々

又云本問孫四 佐々木筑前守顯信コソ西國へノ精兵ニテ候ナ
レ彼ヲ被召仰付ラレ候ヘカシト申ケレハケニモトテ佐
々木ヲソ被呼ケル

又云阿保秋山丹ノ黨ニ阿保肥前守忠實ト云ケル兵一騎大勢
ノ中ヨリ懸出テ事珍シテ耳ニ立テモ承ル秋山殿ノ御詞哉
是ハ執事ノ御内ニ阿保肥前守忠實ト申者ニテ候幼稚昔ヨ
リ東國ニ居住シテ明暮ハ山野ノ獸ヲ追ヒ江河ノ鱗ヲ漁テ
業トセシ間張良カ一卷ノ書ヲモ吳氏孫氏カ傳ヘシ所ヲモ

曾テ名ヲタニ不聞サレ共變化時ニ應シテ敵ノ爲ニ氣ヲ發スル處ハ勇士ノ己レト心ニ得ル道ナレハ元弘建武以後三百餘箇度ノ合戦ニ敵ヲ靡ケ御弓ヲ助ケ強キヲ破リ堅キヲ碎ク事其數ヲ不知白引ノ精兵島水練ノ言ニヲツル人非シ忠實カ手柄ノ程試テ後左様ノ廣告ヲハ吐給ヘト高ラカニ呼ハテ閑々ト馬ヲソ歩マセタル

應仁記云義就方ノ遊佐河内守馬ヨリ飛下リ眞先ニ進ミ懸レハ兵トモ馬ヲ乗放々争競テ攻入ル早ヤ馬井ノ脇ノ唱門士村ニ火ヲ懸タリ折節愛宕山ノ山下風ニ降雪烟トモニ寄手ノ目口へ吹入テ進退失度默然トシテ迷惑ス此驍ヲ見テ内ヨリ見スマシ其比無雙精兵ノ手キ、ニ竹田與ニヲ先トシテ指攻引攻矢前ヲソロヘテ射倒云々

江濃記云淺井備前守安養寺三郎左衛門今村掃部助を近付今日は南北のわけめの合戦也(中略)淺井備前守もせい兵をすくり敵の本陣へ切てか、りければ大將義賢忽に打まけ引退き給ふ

寶篋院殿將軍宣下記云延文三戊戌年十二月廿一日自己刻ニ禁裏御門共爲ニ警固ニ參仕侍大將以上十二人也大將一人に隨兵三百騎つ、其外精兵の射手五十騎つ、大將一人に都合三百五十騎にて一門を警固なす侍大將之事

岡本記云つよ弓せひひやうと申事は弓もつよくて物もよくだぬくる事也かやうにかはる儀也

結城戰場物語云城のうちには塚原彌太郎宮田彌助はんはの彌六横田の與三をはしめとしておとらぬほどの精兵を百餘人そろへてさしつめ引つめいるほとによせて十騎廿騎打れる日はなかりけり

笹子おちのさうし云つるみ此よしみるよりもやくらよりもとんでおりさんにはりに十三そくとつてからりとうちへかひおもてにす、む物をさしつめひきつめさんくいたりけるせいひやうにいたてられてせめしらんてそ見えたりける

奥羽永慶軍記云岩崎合戦六 大膳ハ水瀬川ヲ渡シ馬ヨリ飛テ下リ川岸ノ一村立タル柳ノ中ニ入甲ヲ脱捨テ弓押取散々ニ射タリケリ其外精兵ノ手利七八騎指詰引詰散々ニ射掛ル處ニ鍋倉圖書同金藏佐藤權右衛門小野寺ニ心替シテ岩崎ニ蒐來リシカ是ハ鐵砲ノ上手ニテ川向ノ敵三騎打テ落ス
松原自休手録云石カ瀬重テノ合戦去年働小川敵ヲ雖ニ追入ニ在精兵近郷ニ揮威聞テ遂一戰寄ラル小川勢モ石カ瀬へ打出見知越晴ナル戦也云々

上杉輝虎注進狀云十日之旭出テ霧晴上リ見申シ候得者輝虎一万ノ勢ヲ丸備ニ作毗の字の旗を眞先に進め何にも近々與備罷在候(中略)兩方より寄鎧を打合散々入乱黒烟立戦我先にと先登を争信立先手飯富三郎兵衛尉昌景穴山伊豆守精兵七百人弓手妻子打双散々に切合破入追立兩方の兵共玉の汗を流戦疲味方息終不_レ論_二死人_一嘔血息を繼事多信立カ剛兵共捨_二身命_一防戦故に輝虎カ先手柿崎柴田兩備被_二切立輝虎旗本之左右_一へ別_二二町餘致_一敗軍一候

武蔭叢話云布施次郎右衛門安田勘助高力圖書是等は上杉家の精兵也北川に續て返し合火花を散して相戦ひいつれも皆粉骨を盡し討死す

○古兵
保元物語云景重門ヨリ西築地ノ犬走ニ打テ出長刀脇挾テ立タリカタヘノ者トモ是ヲ見テ古兵ナレハヲソシサヨ軍モセテ休トコソ申ケレ

平家物語云_{宮御殿} 圓滿院太輔源覺は今宮もはるかに延させたまひぬらんとやおもひけん大太刀大長刀左右にもつて敵の中をわつて出宇治河へ飛て入物具一も捨す水の底をく、つて向ひの岸にそ着にける高き所にはしりあ

かり大音聲をあけていかに平家の君達是迄は御大事かよ

うといひすて、三井寺へこそかへりけれ飛驒守景家は古つはものにて有ければ此まきれに宮は定て南都へやおちさせ給らんとてひた甲四五百騎鞭笠を合ておいかけたまつる

又云_{嗣信故} 後藤兵衛實基は古兵にて有ければ礮の軍をはせず先内裏へ乱入手々に火を放て片時の煙とやきはらふ

○軍兵
平家物語云_{鹿谷} 新大納言成親卿の宣ひけるは徳大寺花山院に越られたらんはいか、せん平家の次男宗盛卿に越られぬること遺恨の次第なれいかにもして平家を亡して本望を遂んと宣けるこそおそろしけれ父卿は此齡てはわつかに中納言までこそ至られしか其末子にて從_三正二位_一官

大納言にあかり大國あまた給て子息侍從朝恩にはこれり何の不足有てかか、る心つかれけん偏に天魔の所爲とそみえし平家にも越後中將とて信賴卿に同心のあひた既に誅せらるへかりしを小松殿やうく_一に申て頭をつき給へり然に其恩を忘れて外人もなき前に兵具をと、のへ軍兵をかたらひをき朝夕はた、いくさ合戦のいとなみの外は又他なしとそみえたりける

後愚昧記云永和五年後四月十四日朝間小雨即屬晴未初
剋武士等多上邊江馳上之由路人稱之仍開富小路西門
見之自河原方軍兵數萬騎一條西行万里小路北行大樹
上亭今出川邊事出來之間馳參之由稱之云々

松原自休手錄云從江州飛脚到來シテ淺井カ告返逆信
長大ニ驚キ閣當手ノ退治淺井ヲ可追討木下藤吉郎ヲ
金カ崎ノ押ヘニ殘シ洛下ヘ被入軍兵諸大將不取敢引
退云々

豆相記云永祿十一年十二月伐甲駿今川氏眞出奔于遠
州矣故相氏政張旅豆州三島(中略)甲武田信玄使武田
典厩一萬軍卒屯薩埵小崎矣

○馬強

東亂記云小弓義明義明ノ御馬ハ奥州ノ葛西殿ヨリ六郡一ノ
名馬トテ去年進ラセラレタリケル三月夕チノ早馬カケ馬
ノ逸物ナレハ主ハ本ヨリクツキヤウノ乗手ニテ人ヨリ一
タン計先立テ敵陣ヘ馳入アフミノハナヘサハルヲ幸ト踏
タラシ切リ落ス是ソ大將ト見テケレハ前後ヨリ取籠吾討
トラント責ケレトモ本ヨリ馬強ナル打物ノ達者ナレハ自
武勇ノ人ニ勝レタルヲ憑テ軍立大早リニテ逃ル敵ヲ追立
テ切テ落シ味方ノ兵モツカサルニ大勢ノ中ニ懸入ケ

邊ノ城ニ指置ク處ノ河田平井手等ノ家人ヲ招テ番兵トナ
シ軍ヲ下妻ヘ歸セリ

伊達日記云有時風雨ニテ人モ不見分一時分内ヨリ七八十
人ハタカニ成弓鎗計ニテ打出番ノ者ヲ追散五人討候大和
殿ヘ陣所ヨリ不助以前引籠候惣別城中ヨリ夜々方々ヘ
突テ出一人二人宛被仰付候前代未聞ニ候云々

○當番衆

吾妻鏡云建長四年四月三日丙辰御格子上下事被定ニ人
數ニ云々御格子番事次第一番陸奥四郎時茂越後五郎時員
(中略)下格子者可爲乘燭之刻限於翌朝者當番衆
參上之後可退出當番若悉有故障之時者雖何個日先
番衆可令參勤云々

又云元久元年九月十三日戊寅法華堂御佛事訖乘燭程盜人
入別當大學坊盜取先考御遺物重寶等即馳申之間仰
當番衆等雖被明尋犯人晦跡不知行方云々

○結番

吾妻鏡云寬元元年七月十七日壬辰臨時御出供奉人事依
レ不知其參否每度相催之條且遲引基也且奉行人煩也兼
令存知之間御出期者不論晝夜爲令應御要可結
番之旨被仰陸奥掃部助之間以下當時不祗候人數令

○馬上射手
太平記云山徒寄山門已ニ來二十八日六波羅ヘ可寄ト定
ケレハ末寺末社ノ輩ハ不及申所縁ニ隨テ近國ノ兵馳集
事雲霞ノ如ク也廿七日大宮ノ前ニテ着到ヲ付ケルニ十萬
六千餘騎ト注セリ大衆ノ習大早無極所存ナレハ此勢京ヘ
寄タランニ六波羅ヨモ一タマリモタマラン開落ニソセン
スラント思悔テ八幡山崎ノ御方ニモ不三腰合シテ二十八
日ノ卯剋ニ法勝寺ニテ勢揃ヘ可有ト觸タリケレハ物具
ヲモセス兵糧ヲモ未ツカハテ或ハ今路ヨリ向ヒ或ハ西坂
ヨリソヲリ下ル兩六波羅是ヲ聞テ思ニ山徒縱雖大勢騎
馬ノ兵一人モ不可有此方ニハ馬上ノ射手ヲ撰ヘテ三條

河原待受サセテ懸開懸合セ弓手妻手ニ着テ追物射ニ射タ
ランスルニ山徒心ハ雖武歩立ニ力疲レ重鎧ニ肩ヲ被引
片時カ間ニツカルヘシ云々

○步兵

源平盛衰記云矢間ヲ開テ馬ノ腹ヲ射ル乘人馬ヨリ落ル時
ハ步兵ノ輩ヲ數百人船ヨリ下降テ打取ル

○番兵

關八州古戰錄云多賀谷重經攻落多賀谷ハ小手裏ニ入テ谷田

結番之前大藏少輔行方於小侍加清書所押臺所之
上也又就在國等雖不知此人數於時隨令參上可
被召具之雖爲此衆若有數輩同時故障者可催
加佗番人之由被仰出云々

○雜兵

明德記云上總介モ小林モ本ヨリ思定テ打死センスル合戰
ニ驚クヘキニハアラサレト雜兵ノ手ニ懸リ若犬死モヤセ
ンスラント退縮シケル氣色コソ見エタリケレ
二水記云永正十七年五月六日高國今度乍催諸國之群
勢不決勝負可謂無念事歟落人之在所尋出雜兵等
煎頭云々

深谷記云皆々岡部の大林に草をふせ被申處に本道を通
不申脇道を雜兵四十人餘りて通り候處を中村拾右衛門
言葉をあはせ馬より突落候を家來市左衛門則押首をとり
申候

羽尾記云能登守曰吾等ハ年老ヌレハ不惜身ノ無罪孫トモ
ヲ始メ下人トモニウキ目ヲ見センモ口惜イタマシ、只ワ
レニ任セヨトテ馬ニ打乘僕從ニ下知シテ曰敵ヲ打ヘカラ
ス但テキ打テカ、ラハ只擊拂テ蒐通ヘシ上田沼田ノ士ト
モ多シトイヘトモ我ト太刀組スヘキモノナシ若シ木ノ内

八右衛門ナランカトヲ雜兵百五十餘ニテ突トヲシ出ス
大友與廢記云^{梓口}佐伯勢は案内者なれば左右の尾崎物か
けよりむかふもしりそくも討伏隙なくせり合た、かひ引
て軍のやうをみる處に又七八十騎拔刀の雜兵先にさし立
大音聲を擧て坂をしのほる

伊達日記云翌日石川大和守ヲ頼城中ノ者命被ニ相助候ハ
、明渡可申由ニテ廿五日七ツ時分出城候伊達へハ被ニ相
返ニ間敷由ニテ表立候衆ハイツレモ御旗本ニ罷有候雜兵
ハ夜ニ紛伊達へ逃歸候

甲陽軍鑑末書云天文廿三年八月廿六日信玄公木曾口へ御
馬ヲ出サレシニ瀬場ト云侍降參イタシ九月末ニ甲府へ召
ツレラレ次ノ年典厩甘利ニ被ニ仰付一連寺ト云時宗
寺ニテ御成敗也雜兵共ニ二百十三人瀬場ト一度ニ切死ニ
スル典厩甘利衆ニ手負死人アル也

柴田退治記云天守高聳以ニ多勢ニ欲ニ攀之^以弓鐵炮ニ打
之以ニ長道具ニ貫之懸共具足被ニ疵者多故秀吉下知而雜兵
除之選出六具差固勇士數百人手鎚打物許攻ニ入天守内
續撰清正記云清正庄林森本は敗軍の者ともりかへさん
と敵の中へわりこみ鎧を入あひ戦ふ(中略)敵の數四百六
十二討取清正終に勝利をえ給ふみかた討死の侍九十一人

雜兵二百七十九人天正十七年霜月五日辰の刻より午の下
刻までの合戦也

松原自休手録云遠州森ト云處ニテ逍遙軒家來ノ本多作左
衛門本多平八郎榊原小平太ト及ニ一戰ニ打負穴山一條ニ手
ニテ押返ス山縣ハ小屋落シニ遣ニ雜兵一騎懸ニ森へ懸付
去トモ家康方備ヲ立ル故山縣モ引取云々

天正記云^{江北御}敵あひ十町十五町にすぎず人數をたて、
置ふへんをまつといへ共敵のそなへそつしにゆくへから
すふしんをなし秀吉馬六七きはかり雜兵にうちまされち
んちかくに打よせ敵のたむろより林けんをたるとかた
に人馬のていしやうことく見きはめ本の陣所にうち
かへりまはらく工夫なし云々

○從兵

吾妻鏡云治承四年八月廿三日癸卯今日寅剋武衛相ニ率北
條殿父子盛長茂光實平以下三百騎陣ニ相模國石橋山給
此間以ニ件令旨被ニ付御旗上横山四郎惟重持之父親隆
付白幣於上箭候御後爰同國住人大庭二郎景親侯野五郎
景久河村三郎義秀(中略)并熊谷二郎直實以下平家被官之
輩率ニ三千餘騎精兵同在三石橋山邊ニ兩陣之際隔ニ一谷也
(中略)今日已雖臨黃昏可遂合戰期明日者三浦衆馳

加定難ニ喪敗ニ歎之由群議事訖數千強兵襲ニ攻武衛之陣ニ而
計源家從兵難比被大軍皆依重奮好只輕命效死云々
又云文治五年四月卅日癸未今日於陸奥國秦衡襲ニ源豫
州(中略)豫州在民部少輔基成朝臣衣河館秦衡從兵數
百騎馳至其所合戰豫州家人等雖ニ相防ニ悉以敗績云々

○先手之兵

武蔭叢話云小田原陣の初蒲生氏郷のあるは井細田口にて
岩槻の城主太田十郎氏房持になり五月三日の夜空曇り晴
きにより氏房は夜討致すへき旨下知せらる氏房その宵に
刀丸藤左衛門を遣し宵込の鐵炮掛申されけるゆへ氏郷方
にも先手の兵氣遣に存し蒲生源左衛門寺村半左衛門小倉
小作以下二千斗にて心掛居たり

○兵士

吾妻鏡云建久三年十一月二日辛未御堂供養來月可被ニ遂
行之導師下向之雜事以下爲行政盛時等奉行今日有沙
汰海道驛家事國々被ニ差ニ定奉行一足柄山越兵士沼田太郎
波多野五郎河村三郎豐田太郎工藤介等可沙汰云々

○士卒

又云建久四年七月廿八日壬辰梶原刑部丞朝景自京都歸
參文覺上人狀到着以東大寺料所分與俗人由事殊陳申
云當時再興事其志太甚深而國民近日巧奸濫之間依不

拘惜身小僧成敗以下有親族寄之輩爲兵士入部國領
等若此事爲讒訴之基歎猶入此讒之族者永斷今生願
望後世墮無間地獄無淨期之趣載之凡以惡口爲
事頗不叶將軍御意云々

又云建仁三年九月二日丁卯能員云如然之行粧敢非警固
之備一謬可成人疑之因也當時能員猶召具甲冑兵士
者鎌倉中諸人皆可遣驅云々

又云承元三年十月十七日丁丑權僧正歸洛(中略)餞送物
及數百種一剩可獻宿繼兵士之由觸仰相模國以西守護
人等云々

又云承久元年正月廿七日戊子被遣使者彌源太兵衛尉^{阿闍梨}
母於義村今有將軍之關吾專當東關之長早可廻計
議之由被示合是義村息男駒若丸依列門弟云特其
好之故歎義村聞此事不忘先君恩化之間落淚數行更不
及三言語小撰先可有光臨于蓬屋且可獻御迎兵士
之由申之使者退去之後發使者一伴趣告於右京兆云々

吾妻鏡云建保二年八月十三日丁巳大夫判官惟信使者參著
申云去四日南都衆徒稱有鬱訴奉移春日神木於木津
邊欲入洛之由有聞之間在京士卒悉以奉勅定爲

防之向于宇治勢多之兩途畢云々

太平記云赤橋相模南條之ヲ見テ大將已ニ御自害アル上ハ士卒誰カ爲ニ命ヲ可レ惜イテサラハ御伴申サントテ續テ腹切ケレハ同志之侍九十餘人上カ上ニ重リ伏テ服ヲソ切タリケル

又云宣吹時道々ニ關ヲ居ヨトテ裁田山ヨリ信濃路ニ稠ク關ヲ居ラレタリ夫士卒將ヲ疑フ時ハ戰不利云事アリ前ニハ大敵勝ニ乗テ後ニ御方ノ國々ナレハ今夜一定越後信濃へ引返サンスラント我ヲ疑ハメ軍勢不可有云々

又云足利殿東國下向條諸卿議奏有テ急足利宰相高氏卿ヲ討手ニ可レ被下定リケリ則勅使ヲ以テ此由ヲ被仰下ケレハ相公勅使ニ對シテ被申ケルハ去ヌル元弘ノ亂ノ始高氏御方ニ參セシニ依テ天下ノ士卒皆官軍ニ屬シテ勝軍ヲ一時ニ決候キ然ハ今一統ノ御代偏ニ高氏カ武功ト可云云々

豆相記云每歲六七月自三浦攻入于小田原而退去時必風乎馬生河邊而士卒泳游焉而水于汗馬歸及數度早雲橫梁隱兵而不出三浦士卒益懈矣

又云氏盛住駿州及三二年而與葛山結婚矣葛山者天智天皇末孫竹下孫八左衛門之後昆也氏盛假今川葛山士卒而攻取於豆擊殺狩野伴東等門族移豆薙山城改伊勢歸北條

○輕卒
松原自休手錄云利長弟孫四郎率大軍勸大聖寺從小松出輕卒後軍ノ後ハ發鐵砲輕卒ノ頭敵ノ先手御幸塚へ廻兵時ハ被取籠可及難儀兼テ計之云々

○荒手
梅松論云建武二年十二月八日鎌倉を御立ありければ諸人箱根ノ御陣へ加テ御合力有へきと思ふ處に將軍謀に仰られけるは我水のみに到其敵をつかふる斗にて利を得る事有へからず此あら手もつて箱根山を越テ發向せしめ合戰をいたしなは敵おとろきさはかむ所をせむ事案のうちなりとて同十日の夜竹の下道夜をこめて天の明るをまつ程に辰の一天に一宮新田脇屋の大將として戀せはやせしと咏せし足柄の明神の南なる野にひかへたり

太平記云六波羅源平互ニ入亂テ黒烟ヲ立テ實戰フ官軍多討レテ内野へハツト引源氏荒手ヲ入替テ戰フニ六波羅勢若干討レテ河原へサツト引ハ平氏荒手ヲ入替テ此ヲ先途ト戰フ一條二條ヲ東西へ追ツ返ツ七八度カ程ソ操合ヒタル

又云三浦大多和懸シ程ニ義貞モ無爲方思召ケル處へ三浦合戰異見條

武家名目抄稿第六十七册

埜檢校保己一編

稱呼部 十八

○在國衆國之衆

吾妻鏡云建久元年正月廿九日甲申被遣御使色雜於奥州是凶賊雖融所領内御家人等爲立一身之勳功以無勢於所々無左右企合戰不可失其利假令相待客人不可似儲賦餉於所領之儀令發遣之士令在國之輩各々無偏執令同心相逢于一所疑會議可遂合戰之旨以御書今日所被觸仰御家人等之中也云々

鎌倉大雙紙云新御堂殿の御内書に禪秀副狀にて回文をつかはし京都より仰にて持氏公并憲基を可被追討由頼被仰ければ御請申人々には千葉介兼胤岩船治部大輔入道天用兩人は禪秀のむこなれば不及申(中略)海東四郡の者とも同心す鎌倉在國衆には木戸内匠助伯父甥二階堂佐々木一類を初として百餘人同心す

蟻川親元記云寛正六年九月六日辛亥山名殿御使タキミ同

大多和平六左衛門義勝ハ兼テヨリ義貞ニ志有シカハ(中略)所詮明日ノ御合戰ニハ義勝荒手ニテ候ヘハ一方ノ前ヲ承テ敵ヲ一當テ見候ハント申ケレハ義貞誠ニ心ニ服シ宜ニ隨ヒ則今度ノ軍ノ成敗ヲハ三浦平六左衛門ニソ被許ケル

箕輪軍記云安中の城主左近大夫忠成爰を先途と拒きしか敵は多數にして新手を入替責にけり味方小勢なればつかれ旗を巻降參せり

愚耳舊聽記云田舎細掃しかはあれとも寄手大勢なれば荒手を入かへ責ければ次第々々打死し三百餘の兵共一足も不退皆々戰死を致ける

名在國之衆若君御誕生御禮事自國申上之可預御披露云々

宗五大雙紙云文明十一年のころ御相伴衆御供衆以下の事在國衆治部大輔殿義山左衛門佐殿義京極殿義大内殿義永享以來御番帳云文明十二三年頃在國衆治部大輔殿義山左衛門佐殿義京極殿義

甲陽軍鑑末書云信州在國人爲謀略一國中通用者無是非次第也若境目之人日頃通書狀來者不及禁之歟

○國衆

常徳院殿御乘馬始記云東の御七間にて御對面有之先御所様御對面也管領御馬太刀進上そのま、御前に伺候其外國の衆進物同公家御供の衆外様奉公方奉行山法師少々醫師陰陽家の者御太刀進上外様奉公方奉行衆すわう小袴の衆もまじるなり

沙彌洞然長狀云重而牛山知行之事三ヶ國又相破題目嶋津薩州豊州以同心相隔鹿兒島國衆儀少々一味候彼兩所へ爲續多年御智音候歟是茂無餘儀以御同意文明八年丙申三月牛屎院江被取懸數日被相賜候之間同九月彼城落去候云々

細川兩家記云丹後國へ赤澤宗益を御免あつて此外軍兵を

又云秀吉公御上洛の時尾州熱田にて國衆御目見に出る其内兼松又四郎も罷出候

○國家衆 國衆

應仁記云角テ山名是豊ハ備後國へ宮田備後守山内新左衛門カ館へ入蜂起ノ由急告ケレハ下向スヘキ由京都へ頻リニ申出レハ今又山崎ヲ寄セラレテハ惡シカリナント評定有テ赤松次郎政則三ヶ國衆ヲ番替ニ可申付由上意ナリシカトモ云々

蟻川親元記云文明十五年六月十七日戊寅御山莊御移催(中略)先例花御所御移催之時御禮御相伴衆御太刀白金萬疋御供衆御太刀金千疋一ヶ國衆御太刀三千疋於此度は可レ有勸略云々

江北記云文明十七年慶増親子公事義付て環山寺殿山上へ御遁世候國衆悉參種々申より敏満寺迄被成御歸候事多聞院日記云永正三年正月廿三日就河内合戦之儀尾州より筒井十市箸尾可出陣之由被成御書之間爲談合自今日於法貴寺國衆會合有之

又云永正三年八月朔日此間京陵事成身院種々調法筒井身躰京都無爲云々雖一國令逐電は一身安堵無其甲斐トテ筒井國衆へ一味す

相添つかはされける河内國へは攝州上下國衆立られて切取る

赤松記云然る處に御屋形様内々河波衆より内通あり此時親の敵浦上を御うちあるへき調略にて堺へ人質を被出事相濟後卷可被成に定まり面むきは浦上に御見つきのために御上りと披露し明石修理亮先陣にて御出張あり浦上陣には國衆も浦上も屋形の御上りに力をえ満足無計候

親井日記云桂川合 此度ハ國ノ大事ヲ屋形ヘモ申上ラレテ繁々ハヤ使者ヲヤラレテタヘト云ヒ拾テ急キ氷上ヘカヘル仍テ大將軍ヨリ國中ヘ早速ノ御下知アリテ如此ニテ候惣別當國衆ノ大軍ヲモ押出申コトハ餘國ト違ヒ手早キコト物ニタトヘ難ク候大將軍ノ常々御軍法ノ御作法ユエニテ候

武蔭叢話云中村伯耆守一忠の咄に幾度軍有ても鎧の有事は稀なりと聞亡父式部少輔一氏根來雜賀の押に泉州岸和田の城に差置かる天正十二年正月十六日小木川にて一戦の時式部手前にては成合平左衛門神谷平右衛門林門大夫三人鎧を合候國衆にては山上半大夫松浦安大(二人略之)此三人鎧を合る

二水記云大永七年十月六日風説云今日越前國衆朝倉太郎左衛門尉以下二十餘頭着坂本云々

蟻川親俊記云天文八年十月二十八日壬辰於備中國阿波衆對尼子軍損之
大友興廢記云肥後國甲斐宗 運方ヘ内通條されは義鎮公政道すなほにして英雄の心をとり御慈悲を下し給ふ事國衆老中をはしめとして下万民にいたるまでもる、ものはなかりき

又云矢文ある時中國勢より後詰の豊後勢の陣へいろはをかしたら字におきて矢文をおくるそのことはいく千万騎をひきうけて(中略)むりむたひなる事ともはうへのおためにもならずいまいより先の用しんはのちのおためとばかりにておくそこまでも残さすくに衆老中一同にやかたをおもくあふけた、まつ代までのせいひつはけにたのもしうおほへける云々

親井日記云丹波家七 頭七組條雲林院西方衆ト同心ノ者カト國衆ノ疑ヒヲウケ候ヘトモ最後ノ合戦ニテ二心ナキ道ヲ立比類ナキ次第サスカノ士ト先ツ迄感入

又云宗高判於越 前國權死條國家ノ衆ハ一人モ召連ナク御手廻ハリハカリニテ候
又云桂川合 戦條此度ハ俄ノコトノ合戦ナレハ氷上殿ノ御馬ヲ

出サレ候トモ此軍ノ節ニハアヒカタク國衆旗頭衆ノ駈付ケラレテモ此點ニハアハヌコト也只今マテノ合戦ハミナ大將軍ノ御指南アレハノコトナリ此度ハ大將軍ナク候テノ合戦ナレハ日頃當家國衆弓矢ノ器量ノ程ヲモ大將軍ヘ御目ニカケ申又ハ末代マテモ當國ノ弓矢ノチレタル趣ヲ末孫ニモ傳ヘ申モ本望云々

又云桂川合戦 靱井申ス今度信長味方ヲ出シ拔ヒテ五六万ノ大軍ニテ打拂ヒ押寄セテ候トノ注進ハ國中ニ及ヒ申ニ國衆若者トモ願フ處ノ幸ヒトテ信長ニ對面シテ恨ミテ散セント勇ミ候

家忠日記抄云天正五年十月廿一日掛川より濱松迄國衆歸陣候信康様者岡崎迄御越被成候

増補家忠日記云天正十三年十月二十八日家忠濱松ノ城ニ登ル大神君諸將ヲ召テ命有テ曰京都ニ人質ヲ差上セラレ宜シカルヘキヤ否群議ヲ問ハセ給フ諸大名ト同ク質ヲ京都ニ登セ置給フ事宜シカルマシキ旨各異口同音ニ言上ス大神君モ兼テ此御賢慮タルニ依テ京都ニ質ヲ上セ給フノ儀ヲ止メラル然ルニ北條氏直カ家臣二十人各起請文ヲ大神君ニ獻ス是ニ依テ大神君老臣等及國衆ニ命シテ起請文ヲ書シメ北條カ家臣等ニ賜ル

板坂ト齋慶長記云惣而秀吉公小身なる侍はもたせられず姫路衆と申千石より内の侍三四百石の衆二百餘騎程もあるへきか云々

○國備衆
靱井日記云攝州野合戦 是ヨリ直ニ攝津ハ段々ニ御入退治アルヘキ用意ニテ國備衆大分ニ募リ狀ヲ待居候ヘトモ手筈ノサシツカヘノコト出來候

○國人
後愚昧記云延文四年九月廿六日甲戌今日若州守護仁木三郎 國其勢百騎許云々於國人ニ者出立可レ向ニ若州云々

又云永和三年七月十三日傳聞伊勢守護妻佐々木大膳 依ニ産生事ニ死去云々又聞去月於越中國ニ人與ニ守護代ニ合戦國人等多被ニ討取ニ了

室町殿日記云管領上杉の條 かの道灌といふきり者一人におそれておもふやうにもはたらかす今は誰をかは、かるへきとそれより以後のいくさには敵軍さほひをふくむによつて定正毎度利をうしなひたまひ城ともあまたとられたまふか、るによりて屬せし國人にもいつとなく手返しせしと也

江濃記云淺井休外齋入道橋高政は朝倉教景の吹擧により

京極殿の一跡を給はりけれとも國人おほく背きければ伊勢の國司并長野若狹守關刑部大輔美濃土岐殿并齋藤其外朝倉より加勢を請ひ北近江五郡をやうく治めける

羽尾記云攝津守藤原 此ノ今野ヲ見テアハテヲトロキケレトモ能ク心ヲシツメ答テ曰天晴キサンノラン打物カナタレタレモ見物セヨヤトテサアラヌテイニモテナシ酒杯ヲ進メ肴マイラセントテ内處ヘ入ト見ヘシカ裏門ヨリ退出シ越後ヲサシテ落行ケリ此故ニ吾妻忽無主ノ地トナル爰ニオイテ海野能登守城主トナラント欲スレトモ國人敢テ不隨能州其氣ヲ察シ獨難シ立思ヒ眞田安房守方ヘハヤ打ヲモツテ某今度不慮ニコノ城地ヲ得タリ云々

○國野郎
氏郷記云筑紫薩摩嶋津義久豊前秋月私ニ弓矢ヲ取テ万民ヲツイヤス由聞ヘシカハ(中略) 豊前國ニ岩石ノ城トテ名ヲ得タル取出アリ熊井越中ト云者楯籠リテ國ヤロウヲ勝クリ三千許籠セケレハ誠ニ西國ノ要メトモ可レ成城也

○籠城衆
新撰長祿寛正記云寛正二年正月二日嶽山籠城衆齋田道明寺ノ邊ヘ下リ兵糧ヲ取り神物トモ不レ謂亂ホウシケル

○殿原

太平記云六波羅 佐用兵庫助得平源太別所六郎左衛門五郎左衛門相懸リニ懸テ面モフラス戰フタリアレ討スナ殿原トテ赤松入道圓心嫡子信濃守範資次男筑前守貞範三男律師則祐眞嶋上月菅家衣笠ノ兵三千餘騎拔連テ懸リケル

又云建武二年正月十六日合戦條 細川卿律師定禪四國ノ勢トモニ向ツテ宣ヒケルハ(中略) 赤松筑前守僅ノ勢ニテ下松ニ引ヘテ有ツルヲ無代ニ討タセタランモ可ニ口惜ニイサヤ殿原遠臺野ヨリ北白河ヘ打廻ツテ赤松カ勢ト成合新田カ勢ヲ一アテニシテ見ント宣マヘハ藤橋伴ノ者トモ子細候可シトソ同シケル

又云岡山小見山夜討條 日本國ノ武士共カ集ツテ數日攻レトモ落シ得ス此城ヲ我等カ勢計ニテ攻落シタランニハ名ハ古今ノ間ニ双ナク忠ハ万人ノ上ニ立ツヘシイサヤ殿原今夜ノ雨風ノ紛レニ城中ニ忍ヒ入テ一夜討シテ天下ノ人ニ目ヲ覺サセント云ケレハ五十餘人ノ一族若黨最可レ然トソ同シケル

○主達

吾妻鏡云承元三年十一月十四日甲辰相州年來郎從皆伊豆國 主達之中以有功之者可レ准レ侍之旨可レ被ニ仰下ニ之由被

望申之内々有其沙汰無御許容於被聽其事者如然之輩及子孫之時定忘以往由緒誤企幕府參昇歎可招後難之因縁也永不可有御免之趣嚴密被仰出云々

又云寶治元年五月廿七日己卯左親衛御輕服之間日來令寄宿若狹前司泰村亭給而今日彼一族雖有群集之形勢更無祇候乎御前之事其上入夜鏡腹卷之粧有響于御耳此程自方々告申之趣強無御信用之處忽符合之間思食合俄退彼館令還本所給主達一人號五郎僅四郎持御太刀御供云々

○若衆

康富記云寶徳元年八月廿八日丙子室町殿將軍宰相中將殿御參内始也(中略)御車之後連歩其外近習若衆數十人常上御車後步行也

蟻川親元記云三月十三日遊佐所へ朝御飯に御出若衆達御同道

齊藤親基記云文正元年二月二十五日飯尾肥前守之種亭御成(中略)傍輩中若衆或銘物或絲卷以惣注文進上

○若殿原

平家物語云寶盛殿後味樋口次郎只一目見てあなむさん長井齋

ると仰らる、ゆる如此の大將の下には大名小名足輕歩若衆小人中間衆迄武邊おほえの者多く出る者也

藤別當にて候ひけりとして涙をばらりと流す(中略)實盛常は兼光にあふて物語りに候ひしは六十に餘りて軍の陣に赴かは髪鬚を黒う染めてわかやかうと思ふなり其故は若殿原にあらそひて先をかけるもおとなけなし又若武者として人のあなつらんも口をしかるへしと申候ひしか誠に染て候けるそや洗はせて御覽候へと申ければ木曾殿さもやあるらんとて洗はせて見給へは白髪にこそなりにけれ

大塔軍記云一族外様の人々都合二百餘騎思ひに乘運眞深義打圍力者少童出立迄云も中々愚なり中にも若殿原者と墓目押取副追出犬懸心有馬掛出風情云々

さ、こおちのさうし云のふたかの御よとなり遊びやのくふうわかしくしてうつろのひやうきとりくなりいへにつとふるらうとうの申すちをばあやしきようにきこしめしきのふやけふのわかとのはらの申せうしやうりにおほしめさる、は御うんのつくところなり云々

○小殿原

甲陽軍鑑云よき大將は軍の時悉皆我さいをもつて勝利を得給ひても主の手柄とはなくして近習小姓小殿原若衆小人中間衆までも譽たて皆あれらか働をもつて合戦に勝た

武家名目抄稿第六十八册

塙檢校保己一編

稱呼部 十九

○下馬衆

諸家紋帳云吉良義氏之次男義繼號東條三男長氏號西條澁河泰氏之次男義顯之孫石橋泰氏之嫡流自五世孫和義一號石橋以上家號下馬衆

○御紋衆

常照愚草云根本は三職是も管領職を被持候ての事也其次に御紋の大名其次御紋せられぬ大名と心得なり宗恕聞書云御供衆御部屋衆申次衆詰衆其身其身のくらゐのことを我も々々と被存候事候間分別無之候御紋衆の事は其内にての様事ふり候宿老をばもつはら賞翫のやうに候事古今のならひなり何の部分にも其分たる者也長祿二年以來申次記云御部屋衆一色治部少輔政照上野刑部少輔政直以上此御部屋衆と申は普賢院殿御代より被定居候其時より人数は兩人なり國此人々の名字中又其家々の流には不定事也時に隨ひて誰にも被仰付之何

も御もんの衆也兩人之内毎夜一人宛御前に宿直被_レ申也
御所様御若年之時惣番中より詰衆として少々別に被_レ召仕
義有_レ之其詰衆には此部屋衆の事は各別之身軀也

江北記云しんち殿た、殿倉知殿是は御一家也山中殿うつ
ろ殿ち殿此等は御紋せらる、也慶増同前也

○同紋衆

大友興廢記云御同紋衆の事古庄黨志賀甘別能直公御下向
の御供の侍一筋は御家の御紋也茗荷の丸也但わりみやう
かきやうようの御紋と是をいふ也御一姓の侍には是をゆ
るさる、

○御朱印衆

水野勝成記云中村又藏は尾張大納言様に罷在御朱印衆之
内にて御座候

○三人衆

久米田軍記云同年七月三好左京大夫義次ハ若輩ナレハ政
道ハ同名下野守同日向守石成主税助是ヲ三人衆ト號シ其
外ニ松永彈正少弼ト相談シケル

賀越園諍記云_{田田}景健同三郎景胤搦手ヨリ指向ケルヲ
中人和談ノ扱ヲナシ三人衆ヲ事ユヘナク出シテ濃州ヘン
送ラレケル

深谷記云上相御普代之目錄四天王岡谷加賀守秋本上總守
井上左衛門上原出羽守

藤葉榮衰記云岩瀬へ御馬ヲ被_レ向候へト一同ニ爲氏ヲ諒
メ奉リ十三ノ御歳御供ノ衆ニハ御一門山城守四天王ニハ
箭部須田遠藤守屋云々

○十六騎

太平記云_{箱根竹下}義貞ノ兵ノ中ニ杉原下總守高田薩广守義
達葦堀七郎藤田六郎左衛門川波新左衛門藤田三郎左衛門
同四郎左衛門粟生左衛門篠塚伊賀守難波備前守河越三河
守長濱六郎左衛門高山遠江守園田四郎左衛門青木五郎左
衛門同七郎左衛門山上六郎左衛門トテ黨ヲ結タル精兵ノ
射手十六人ヨリ一様ニ笠符ヲ付テ進ニモ同ク進ミ又引ク
時モ共ニ引ケル間世ノ人此ヲ十六騎カ黨トソ申ケル

○廿人衆

甲陽軍鑑云_{依春日源五郎}某は高坂彈正と申て信玄公御被官
の内にて一の臆病者也信玄公御年廿二歳我等十六にて御
奉公に罷出御小人かよき仕合にて廿人衆に可_レ罷成_レと存
之外罷出て卅日の内に近習になされ殊更奥へ召よせられ
御膝本にて御奉公仕

○卅六人衆

初井日記云_{丹波家七}御三人衆ト申候ハ當國御家高大將筋ノ
御人ニテ旗頭衆モ殿達ト申テ尊敬致サレ候衆也此御三人
衆國中ノシマリニ御成大事ノ義ハ三人衆ニテシラヘ候テ
其上ニ氷上殿へ言上仕ル事ニテ候

○五人衆

續武家閑談内藤家傳云右京進義清始は甚彌と云又甚太郎
と改む參州上野の城主たり岡崎五人衆の其内なり云々

○八本衆

見聞雜錄云明智方小川土佐は孫市と申せし頃より近江之
八本衆と被_レ云鎧の達者故信長も鎧故受領を被_レ仰付_レ土
佐守成しか中川と鎧を合云々

○十人衆

細川兩家記云松永方の城攝州難太多喜山を三好の三人衆
方淡州十人衆安宅方大將にて被_レ還て合戦有多喜山衆負
討死首十一安宅方へ討取と云々

豐臣家譜云秀吉又下_九條法制于諸人_二其六曰若有_レ持_レ訴
書而來告者_上則先可_レ問_レ十人衆_一
十人衆者大權現利家秀家輝元隆
景徳善院淺野石田増田長束也

十人衆召_レ其甲乙_二而可_レ敬_レ聽_レ之_一若直訴者此五人<sub>此五人者
所_二加判_一
之_五評_レ議_レ之_二而後可_レ達_レ于台聽_一也
奉行評議之而後可_レ達_レ于台聽_一也
○四天王</sub>

大友興廢記云_{小牧の}天正十四年丙戌十月中旬に薩州の大
守島津修理大夫義久公の下知として薩广諸勢豊後の地に

うち入丸田強兵衛尉矢嘯彈正兩大將にて一千八百餘を率
して豊後大野の郡緒方の庄にうち入り爰に緒方三十六人
衆といふあり

○七組ノ家

初井日記云_{丹波家七}七組ノ家ト申ハ第一ニ萩野城主萩野彦
六左衛門朝道是ハ萩野彦六郎定朝カ末孫ナリ

○手脇衆

甲陽軍鑑云歩若黨を上杉家にて身わき衆信玄公家にて廿
人衆氏康にて手わき衆を家康にははしり衆と名付てよふ
けに候

○昵近衆

吾妻鏡云治承四年九月一日庚戌武衛可_レ有_レ渡_レ御于上總
介廣常許_レ之由被_レ仰合_レ北條殿以下各申_レ可_レ然之由_二爰安
房住人安西三郎景益者御幼稚之當初殊奉_レ昵近_一者也仍最
前被_レ遣_レ御書_二旨趣令_レ嚴密_一之上者相_レ催_レ在廳等_二可_レ令_レ
參上_一又於_レ當國中_二京下輩者悉以可_レ攝進_一之由也
又云建保元年二月二日昵近祇候人中撰_レ塾能之輩_二被_レ詰_レ
番之_一詰之_二事_一各當日不_レ去_レ御學問所_二令_レ參候_一面々隨時御

要文和漢古事可語申之由云々

明德記云先年御所様ニ召仕ケル武田下條ト云者アリ一
且昵近申サレケル間上様ノ御覺ヘ吉カリケレハ賞ノ甚キ
ニ驕テ意曲共出來シ間御所様御覽シ限ラセ給ヒ御追放有
ケレハ云々

應仁記云義就モ長會議ニ日ヲ送り正月モ中旬ニ成ニケリ
正月十五日山名家婉飯嘉例ノ如被レ勤事畢テモ退出ナク
一味同心昵近付大名トモヲ招集テ先今出川殿ヘ參上シ急
キ室町ノ御所ヘ御成アレト進メ申云々

應仁略記云親縁近縁の名を裂れて王城の内を出られし者
押へて歸路緩怠也と御科目と聞えし上意たりし夜の間に
事の替りぬ今めかしく御前の昵近と成にけり

○近臣

吾妻鏡云文治五年二月廿八日庚子及寅剋住吉小大夫昌
泰參申云今夜異星見爲彗星歟云々二品則自御寢所
出ニ御于庭上覽之三浦十郎義連小山七郎朝光在ニ御前
梶原源太景季八田太郎朝重候ニ御後ニ帶劔夜中出御之儀常
如レ此是皆近臣也

關八州古戰錄云上杉憲政武州河越城實條左衛門大夫綱成七歳ノ童兒ト
シテ孤々タリシヲ家人等介抱シテ小田原ヘ立越辛キ月日

又云元久二年六月廿二日戊申山次郎重忠參上之由風聞
之間於路次可誅之由有ニ其沙汰ニ相州已下被ニ進發ニ軍
兵悉以從之仍少ニ祇候于御所中之輩ニ于時間注所入道善
信相ニ談于廣元朝臣云朱雀院御時將門起ニ於東國ニ雖隔ニ
數日之行程ニ於洛陽ニ猶有ニ如固關之構ニ上東西兩門元土門也

始被ニ建屏大將軍御時無双近仕也
又云建永元年十一月十八日乙未東平太重胤自ニ下總國ニ參
是無双近仕也而給ニ白地之暇ニ下向之處在國及數月ニ仍
遣ニ御詠歌雖被ニ召之猶以遲參之間蒙ニ御氣色籠居云々

又云承元三年三月廿一日甲寅去二日大柳殿御鞠記一紙
進ニ覽之彼日大輔房源性始參ニ于御鞠云々是左金吾將軍
御時近士也云々

又云建保三年十月一日丙戌相州被ニ進ニ桑系五十疋ニ即於ニ
御前ニ分ニ賜近士等ニ云々

又云建保六年十一月廿七日乙未東平太重胤者無双近仕也
其男胤行又相並又夙夜在ニ君與去頃下ニ向下總國海上庄ニ
云々

○朋勢

江濃記云齋藤方ニハ評定トリノ成リ永井隼人佐トカク
滅亡時至ル先ツ足輕ヲ出シ淺井應答其上ニ無事ヲ繕ヒ備

ヲ過シケルカ漸ニ成長シテ氏綱是ヲ近臣トセラレ寵愛亦
類ナク竟ニ一方ノ部將トシテ駿豆相武ノ國境毎度ノ合戰
ニ手並ヲ顯シ云々

○祇候衆

吾妻鏡云養和元年九月十六日己丑桐生六郎持參俊綱之
首ニ先自ニ武藏大路ニ立ニ使者於梶原平三之許ニ申ニ案内ニ而
不レ被レ入ニ鎌倉中ニ直經ニ深澤ニ可レ向ニ腰越ニ之旨被レ仰レ之
次依レ可レ被レ加ニ實檢ニ見ニ知俊綱面ニ之者有レ之歟由被ニ尋
仰ニ而只今於ニ祇候衆ニ者不ニ合眼ニ之由申レ之爰佐野七郎申
云下河邊四郎政義常逐ニ對面ニ云々

又云建久二年十月廿日乙未廣元朝臣可レ解ニ明法博士ニ之
由申ニ送ニ之祇候關東ニ之輩以ニ顯要ニ之官職ニ恣象帶不レ可
レ然可レ令レ辭ニ之旨被レ仰下ニ云々

又云正治二年十二月廿八日庚戌金吾仰ニ政所ニ被レ召ニ出諸
國田文等ニ令ニ源性ニ算勘之治承養和以後新恩之地毎人
於ニ五百町ニ者召ニ放其餘ニ可レ賜ニ無足近仕等ニ之由日來内
々及ニ御沙汰昨日可レ令ニ施行ニ之旨被レ仰下ニ廣元朝臣珍
事也人之愁世之謗何事如レ之哉之趣彼朝臣以下宿老殊周
章今日如ニ善信ニ類盡ニ諷詞ニ之間慙以被レ聞ニ之明春可レ有ニ
御沙汰ニ云々

前守ヲ同勢ニシテ尾張ヘ發向シテ無二ノ合戰可レ遂ト申
ス

秀頼記云堀丹後守も谷一筋より攻入しか朋勢半は崩しか
とも手勢少しも不レ退是も山を越にける

又云大坂勢は昨日雨所の合戦も利を失ひたりといへとも
南表ヘ張出し面は茶臼山東は岡山のはつれ迄一面に人數
を立ならへたり茶臼山の先陣は真田左衛門尉天王寺表は
毛利豐前守岡山表は大野主馬助なり七組の者とも大野修
理亮その外の諸軍勢は皆朋勢に備て敵の寄來るを相待け
る打出たる軍兵凡十二三萬もあるへうそ見へし

○旗本 旗下一 部下

東亂記云上杉安房守數萬ノ軍勢ヲ引卒同四日永享十一年十月上州
を打立同月十九日ニ分陪川原ニ着玉ヘハ御旗本ノ人々御
内外様ノ侍奉行頭人ニ至ルマテ公方ヲ捨置申憲實ノ勢ヘ
ソ馳加ハル

大友記云大友旗本之大名肥前國龍造寺隆信同國筑紫右馬
頭惟門其子上野介廣門筑前國秋月文種其子種實同國原田
左京大夫此外有ニ小名ニ筑後國蒲池志摩守鑑廣其子兵庫頭
鎮運同國蒲池近江守鑑盛入道宗雪其子鎮運同國溝口草野
三池此外有ニ小名ニ肥後國城親冬合志彈正赤星宮内宇土隈

部鎮氏賀井宗運此外有二小名一豐前國城井長野此外有二小名一

又云御旗本四家之大名田原親定其子親貫戸次伯耆守鑑連入道立花道雪佐伯權守惟定

北條五代記云秀吉關東發向條秀吉公は西の高山に陣城をかまへ小田原の城を見おろしはた本には九州島津同き大友中國に

毛利おなし吉川小早川を始としてうしろは峯をのほり云々

又云氏茂由來條在々所々に有て名をえたる侍いそきはせ來て早雲幕下に付時日移さず御所をほろほさんと大森山へ

甲陽軍鑑云信州平澤大門到下等合戰條板垣へ旗本より加勢足輕大將は多田三八子息飯富へは安滿其外組合旗本にて原美濃守小幡

山城守市川采女子息三九郎原與左衛門與九郎右五頭足輕大將其日はたもとにてはしりめぐりあり

又云其後橋へ十郎兵衛あかり日來ならひえたる鐵炮をもつて輝虎旗本のよせ所を見定能武者を多くうちおとす中

謙信の御座をなす侍をうち殺云々

又云君の御恩を蒙り今高坂彈正と罷成既に同心三百五十騎自分の人數九十騎餘凡四百五十騎に及人數を下され川

ろに流矢にあたりて討清正難義におよひ給ふを旗本勢より見合て横合にとつとついで入云々

播州佐用軍記云天正五年丁丑七月上旬播磨ノ國へハ信長公ノ代官トシテ羽柴秀吉卿其勢一萬八千餘騎ニテ府中ノ

城主小寺カ館ヘイリ給フ小寺ハ赤松ノ氏族ニテ(中略)當國赤松ノ統領近年亡テ其一族等播作ノ間ニ有テ近年越州

毛利輝元ノ旗下タリ

又云秀吉彌子佐用上月使者條宇喜多城ヲ落テ山林ニ身ヲ隠ス于ノ時宇喜多和泉守直家ヨリ和睦ノ使者トテ尋來事及三度(中

略)和睦ニ決シテ輝元ノ幕下ニ與セシヨリ以來當國ハ元ノ如ク一族配分シテ安堵スル所也

房總治亂記云天正十七年四月下旬上總ノ万喜ノ城主土岐右京大夫頼春頼正少子也者小田原ノ北條氏直ノ旗下ナル故ニ

數年房州ノ里見左馬頭義朝下總生實ノ軍士ト合戰止時ナシ

奥羽永慶軍記云片時モ急ケト一族小野寺小五郎ニ旗本三十騎ヲ指添入口内ニソ向ラレケル

又云爰ニ又會津盛重ノ旗本ニ山ノ内刑部大輔定房ハ横田川口伊桑伊方津川ノ領主トシテ三ヶ所ニ城郭ヲ構ヘ度々ノ軍ニ譽ヲ露シタル兵也

中島に在城仕り此邊の諸士悉く我等の旗本にと上意にて越後境へ働の時は七百餘騎の勢にて云々

又云佐藤一甫と云率人鐵炮の師として來り信玄公の御代より旗本に召置る

甲陽軍鑑末書云謙信モ重手ヲ仕ラン今夜川ヲ越夜ヲアカシ日出ハ懸テ合戰ヲ始信玄ノ先衆カケツケサル以前ニ武

田勢ヲ切崩シ旗本ト旗本一戰ヲトケ信玄ト手ヲ取合組フセテ指違フルカ模様ニヨリ無事ニスルカ何レ明日ハ二ツ

一ツノ合戰也トテ謙信物ノ具ヲシテ九月九日ノ亥尅ニ西條山ヲ打立テ雨宮ノ渡ヲ越給フ

安土日記云天正三年五月廿一日信長家康公ノ陣所ニ高松山トテ小高キ山ノ御座候ニ被取上(中略)五番馬場美濃

守推太鼓ニテカ、リ來人數ヲ備右同前ニ勢衆ウタセ引退候也五月廿一日々出ヨリ寅卯ノ方ヘ向テ未剋マテ入替入

替相戰諸卒ヲ打セ次第々々ニ無人ニ成テ何モ武田四郎旗本ハ馳集難叶候歟鳳來寺敗軍致ス

義殘後覺云信長公ノ旗本ニ矢部善七郎ト云士アリ久敷仕テ諸方ノ働ニ其譽ヲ取何レニ劣ヌ名高キ人ニテオハシケル

續撰清正記云島門彈正か首をとり立あからむとせしとこ

又云矢島五郎滿安ハ所詮最上殿ニ云分テ國ニ有ヘシトソ思ヒケル是ソ矢島ノ運ノ盡ヌル處ナリ三漢ニ渡海セハ日

來ノ勇力ハ何ノタメソ万人ニ抽テ高名ヲツクサハ大名程ニコソハ有サラメ凡旗本ノ中ニハ双フ者モ有マシキニ滿

安不敵ナル計ニテ思慮ナキ者ナレハ稱ニ病氣ニ義光ノ方ヘ使者ヲ送リ上洛セサリケリ

又云會津ノ芦名盛氏ノ長臣長沼ノ城主所國上總介大勢ヲ催シ白川近邊マテ押來リ燒ハタラキ土民ノ妻子ヲ濫妨ニ

押捕白川義親是ヲ聞テ安カラス思ヒケレハ有合フ旗本ノ武士ヲ率シ出張ス其先手和田安房守與力二十五騎足輕百

人ニテ走向ヒ一戰ヲ始ム

又云山北ヨリハ兼テ和賀押ヘトシテ小田島大黒澤長門守南郷雄口口ヲ切廻シ藤倉カ城ニ楯籠リシカ横手ヲ以飛

檄乞ニ加勢ニ遠江守景道之ヲ聞テ旗本ノ武者大將足輕大將ヲ始急ニ催シ指向ラル

又云最上義光ハ山北小野寺義道ヲ討ント幾廻カ勢ヲ催云云義道大ニ驚キ一族小野寺小五郎ニ旗本二十騎ヲ指添入口内ニソ向ラレケル

太閤記云佐々内藏介多勢を以幾重共なく取巻我旗本の勢は金澤よりの助之勢を防かんとて末森より一里計罷出金

澤の方に向けて陣を固め待居たり

義光物語云直江山城守は畑屋の城を攻落し勝に乗て軍兵を二手に分長谷堂上山の兩城へ取掛たり其頃長谷堂には志村伊豆守在城しける間加勢として旗本組百騎に筒の足輕二百餘人籠置れける

又云取て返し責戦ふて敵をまくり立終に城へ引籠れれども始終か、はりかたければ種々御謝言を申其夜に城を開渡し降人に成て出にける然間小關加左衛門を始城中にて働つよかりし者共四五人召出御旗本におかれ候也

東遷基業云神君關東八州を有し給ひて城郭を定らるゝに江戸を居城となし給ひけり其時は東の方平地の分は何方も沙入芦原にて町屋土屋敷と十町と割付へき様もなく西南は渺々としたる菅原武藏野へつゝ、しまり處もなし然るに段々に普請仰付られ御旗本の小身衆は手間をとらぬ様にとて御城より北西に當て大番町を初て屋敷割を被仰付けり御積りの如く岡の土を引ならし谷を埋みける故手間も不入して成就しけり

愚耳舊聽記云波岡三番に御旗本御勢千三百餘本道をご出させ給ひける
見聞雜錄云信長ヨリの金子一萬五千兩ニテ兵米ヲ買納御

藏ニ入旗本ノ面々へモ相應ニ被下三州一國への御カシ米種カント有テ被下之シ故殊外御手廻シ能々榊原殿之諫言故也

又云内藤修理カ子上州山家ニ引込居シヲ漸聞出シ御旗本へ被召出シカ流石父修理ニ不劣理窟物ニテ關東御打入之節江戸町御奉行南北兩所被仰付候

又云岡崎ニ於テ御番組之初ハ大番頭菅沼越後守新八松平善四郎渡邊山城守此三家御當家諸番頭之初ニテ其後段々諸組出來シタリ併御譜代之上廣忠様已來御樞機有菅沼殿御當家に至テモ不類尋常ノ御旗本ニ交代之御寄合ニテ

今世管沼織部七千石三州新城之知行ハ御當家三州御時代ヨリ知行不替ト云々右大番頭之儀ハ慶長年中迄ハ一旗ニテ家康公様御直ノ方事被仰渡ニテ年寄衆之支配ヲ

不_レ受慶長年中段々御手廣カリ御大家天下脇之御人數持ニ被_レ爲成候故御書院番頭御小姓組番頭一度ニ出來此節大番頭ヲ始トシテ年寄衆向後支配ト被_レ仰出之所野見ノ

松平大隅守重勝今世ノ松平市正先願大番頭タリシカ被_レ申出ハ外ハ不_レ知此大隅守ハ年寄共ヘ手ヲ束事ヲ窺候儀不_レ罷成只今迄モ直ニ萬事承届申候惣テ大番頭ハ士大將ノ上座ニテ

組中迄モ名指物也家々ノ年寄家老ト申ハ時々ノ權威ヲ振

内證役ニシテ武役ニ非ヌ公家ナレハ格別武家ニテ士大將之最上タル番頭年寄ヨリ上トコソ存スレト家康公様へ御直ノ言上成シカハ難_レ默止_レ被_レ思召尤也乍_レ去家康モ年

多ケレハ只今迄トハ萬事格別也然ハ年寄共モ向後ハ老中ト可_レ號又大番頭モ不_レ可_レ類_レ旗本ノ諸奉行ニ大名格タル

ヘシ併聞合ハ老中へ可_レ仕書院組小姓組頭共ニ旗本武者奉行之支配タルヘシ兩番之義ハ家康一族タリ共大名分ニ

テハナキソ大番頭之儀急度向後大名分ト被_レ仰渡候故大隅守ハ悦喜之色ニテ退出被_レ成シト也於_レ愛御當家之諸番ノ格萬石已下ニテモ大番頭ハ大名格タリ御老中支配御書院御小姓ハ兩番ト此節ヨリ號シテ若年寄御支配ト云々

武蔭叢話云永井善左衛門は元來家康公御譜代也小田原陣の後出奔し蒲生氏郷へ奉公氏郷死去の後上杉家へ出る元

より大兵大力の剛者なり云々後は永井道存と云御旗本へ召かへされ御鍵奉行に仰付らる此道存越前を暇乞ひ半人して上州深谷に閑居す其御旗本衆より瀬戸の茶入を貰ひ秘藏せしを召仕の取落し打破る云々

又云政宗秀康卿へ申され候は上杉家中今度奥州にて骨折候内能ものを召抱られ候云々秀康卿聞し召れ扱御歸宅の

砌永井善左衛門黒母衣にて働候を鬼にもまさると譽られ候と仰られ何れも御挨拶申上候處に落合主膳一萬石元御旗本後越前へ御

附成進み出云々
松原自休手録云永祿七年ノ夏家康率三千餘騎出_レ岡崎

ヲ長澤ヲ打通リ働_レ牛久保ヘ歸ル時若從長澤山城打テ出ルナラハ險難一騎打ニテ通ランコト可_レ爲_レ難義勢ヲ二ツニ分旗本ハ城南ニ押シ諸勢ハ本道ヨリ可_レ押通宣ケレハ旗本城南ノ門ヲ過ル時依_レ俄失火一櫓一ツ燒失ス道筋ノ兵士從_レ山下見_レ之

松隣夜話云謙信伊豆ヲ御前へ召_レ信長ヘノ御返答ニ武田ノ口代軍法違ヒ近年ノ内致_レ大負_レ家ヲ失_レコト目前ニ候飛彈國モ近年ノ内ニ手ニ入_レ可_レ申_レ内々存入候其故ハ江

馬常陸ト云武功ノ侍此方ノ旗下白屋監物ヲ仕詰勝頼ヲモ引出シ取合ニ及_レ候アナタヨリ少モ手出シ被_レ申ニ於テハ此方モ人數ヲ掛ケ申ス所存ニ候

江城年錄云元和元年十二月廿六日七日江戸於_レ御城今度大坂表之強弱之吟味被_レ仰付_レ御旗本衆之中證據之御座候高名同鍵又手負其外數首之衆ハ各々不_レ及_レ御吟味其外

何も御吟味にて御改易御追放も多數有_レ之廿七日大坂衆之證人御成敗切腹其外御旗本衆同日に切腹番頭成瀬豊後

守御小性小山長門守

又云元和二年大坂より御下向之姫君様本多美濃守惣領本
多中務大輔に御縁邊被_レ仰付此ころ已に桑名へ御輿可
被_レ入御用意有_レ之處に何者か風説に申出し候哉坂崎出
羽守御輿可_レ奉_レ取用意すと風聞之間御旗本之若侍共未何
とも不_レ被_レ仰出候得共出羽守罷出候は、討取候は、高
名にも罷成可_レ申かと忍ひくに出羽守屋敷之近所へ詰
寄日夜集事不_レ知_レ敷

又云寛永十年當春御旗本衆八百人千石以下之衆二百石つ
つ御加増拜領何も御藏前之衆知行に御なほし被_レ下其外
組頭番頭御加増之知行不_レ知_レ敷

元寛日記云元和元年五月二日越後少將忠輝卿は兼日より
道明寺表惣大將として相從ふ輩には伊達陸奥守正宗本多
美濃守忠政水野日向守勝成堀丹後守直寄松倉豊後守重政
并に忠輝卿の旗本には村上周防守義明溝口伯耆守宜勝此
兩人は隔日に先陣を勤る

又云元和三年正月朔日去冬關東と秀頼と御和睦相調前の
將軍家康公は二條に御越年あり新將軍秀忠公大坂茶臼山
に御越年あり諸國の大名旗本の健士裝束にて出仕七月十
九日秀忠公伏見に出御有江戸に赴しめ給ふ晦日途中に於

御旗本爲_二御目付_一榊原飛騨子息左衛門十七歳父に従ひ可
伺云々二月廿七日有_二城攻_一(中畧)立花父子松倉兄弟寺
澤兩有馬兩小笠原水野并に御旗本大名には松平伊豆守父
子戸田左門板倉主水石谷十藏牧野傳藏林丹後守皆一同に
攻入て盡_二粉骨_一四月廿四日御旗本より爲_二上使_一太田備中
守資宗至_二小倉_一則伊豆守佐門に對し上意仰_レ之

て御旗本の士長坂茶利悄然として御駕の前に蹲踞す秀忠
公恠しく思し召れ子細を御尋ある長坂謹んで今般上總介
忠輝卿御上洛の砌守山の驛に於て故なく某弟を誅せらる
ると云々八月十六日秀忠公去る十日忠輝卿の老臣等を召
す陪臣とおもひ言上に及さるの處に御旗本の士なればお
とろき當惑して陳防の詞なし慮外仕るの間誅せらる、と
云々十二月朔日諸大名旗本諸士御禮あり云々
又云寛永九年二月七日諸大名ニ金銀賜_レ之云々右之外諸
旗本へ被_レ下金銀不_レ記_レ之十二月十四日松平伊豆守信綱
阿部豊後守忠秋若老中仰付ラル御旗本ノ執事職トナル十
年八月三日將軍家品川ニ御成是兼テヨリ老中御近習并に
御旗本諸番頭組中物頭其外御使番御目付以下馬揃照覽有
ヘキノ旨仰出サル、ニ依テ今日馬揃有

又云寛永十八年二月十一日太田備中守資宗ヲ召テ諸大名
并ニ旗本諸家ノ悉ク系圖ヲ記サシメ可_レ献_レ之可_レ被_レ日光
山御寶藏ニ納_レ依テ汝奉行スヘキノ旨仰付ラル
元寛日記別本云寛永十五年正月十六日赴_二鎮西_一面々ニハ
細川越中守忠利黒田右衛門佐忠之鍋島信濃守勝茂有馬玄
蕃頭豊氏立花飛騨守宗茂息左近將監忠茂小笠原信濃守長
政同左近大夫忠直有馬左衛門佐康繩水野日向守勝成其外

武家名目抄稿第六十九册

塙檢校保己一編

稱呼部 二十

○御形代

文祿清談云_{細川勝元}細川右京兆勝元ハ庖厨ニ風流ヲツク
サレ常ニ珍膳ヲ嗜マレケルトカヤ其嘗職ノ管領ナレハ公
方御譜代ノ侍近習外様ノ大名此人ヲ崇敬シテ音物ヲ運ヒ
送ルコト櫛ノ齒ヲ引カ如シ誠ニ天下ノ御形代ノ人ナレハ
奔走スルモ理也

○矢代

國府臺戰記云古へ義經やしまのうらの合戦に佐藤次信御
矢代に立ければ大夫くろを給ひける此馬次信かしかひを
三度めぐり給ひて終にむなしくなりはて、めいとに行と
そうけたまはる

○代官

明德記云抑播磨守滿幸ト申ハ山名ノ左京大夫時氏ニハ孫
右衛門佐師義ノ末子也舍兄讃岐守義幸病氣ノ後ハ彼代官
トノ在京シ一方ノ家督ニテ有ケルカ今度宮内少輔時昭以

下退治ノ後ハ四ヶ國ノ守護職ヲ持テ權勢氏族ニ越ヘタリ
季瓊日録云永享十一年五月廿七日喜隠軒御成於昭堂御
燒香爲御代官而詣清水八幡宮云々

又云永享十一年十一月十日普光院御成管領御相伴太子堂
本尊入寺持又參謝口當寮即披露之自來十八日至廿
四日爲御代官可謂清和院之由蒙命

賀越園諍記云公方機越州御下向條越前國へ御越有テ朝倉左衛門督義
景ヲ御頼有テ敦賀郡へ御座シケレハ則義景代官トシテ同
名孫八郎景鏡御禮ニシテ參シケル御威有テ式部大輔ニナ
ル

會津四家合考云白河義親義親一族ナリシ中島上野餘議モナ
ク義親ニ異見スルハ秀吉卿鎮西南海北陸ニ威ヲ振レシヨ
ト此五六年以來世上ノ風聞ハ聞召シタル御事ニテ候(中
畧)乍恐某御代官ニ罷上リ能キ様ニ申叶候ハント心底ニ
實ヲ合ンテ言外ニ理ヲ盡シ異見シタリケレトモ云々

播州佐用軍記云羽柴秀吉細柳下給條天正五年丁丑七月上旬播磨ノ
國へハ信長公ノ代官トシテ羽柴秀吉卿其勢一萬八千餘騎
ニテ府中ノ城主小寺カ館ヘイリ給フ

○一老
親房卿被贈結城狀云何況武家之故實邊鄙之成敗萬而不

夷將軍ノ院宣ヲ蒙レリ卯ハ是東方三支ノ中ノ正方トシテ
仲春ヲツカサトル柳ハ卯ノ木也春ノ陽氣ヲ得テ天道惠ノ
眉ヲ開キ營繁ク榮レハ柳營ノ職ニハ卯年ノ人ハ實ニ便有
ケル者哉

甲陽軍鑑云過錢高坂彈正存生の時定置候諸奉公人科穿鑿
なされ御ゆるしの時過錢其分領によつて出す事あり法職
人あかり御中間御小人或新衆などの所分て双方亦御陣
中の過錢をは目付横目衆取取て御武者奉行御旗奉行へ上
る是も御中間御小人御道具衆も給るさて又侍衆我所領の
百姓年貢諸役等に付て惡儀あるは過錢をもつて地頭へ佗
言可仕候但御國法おかすは大形の科にてゆるし過錢出
し候は、是も御職へさしあへく候

又云大身小身善惡分別條或時馬場美濃守申す信玄公の人召つかひ給
ふ事何共分別に及申さす子細は職を持公事さたのさきはき
は物をよみ物をしりていかにも慈悲やはらかなる人のわ
さかとおもへは一年原美濃守と云ふ大剛強のあら人に職
を仰付らる、是は不思議と申事我等はかりにかきらす各
取さたなるに結局此原美濃殿何ともならぬよき仕置也然
といへとも此人公事にかゝりてはもろくの境目武士道
の御用かくるとして奉行を上らる、に其後暫二三ヶ月も職

得レ一理諸人不受皆所ニ自願一也殺ニ此身ニ不可塞ニ其
謗ニ矣但爲先朝之一老一具蒙恩敷之願命

甲陽軍鑑末書云天正九年二月伊豆表へ勝頼公御馬ヲ出サ
ルニ氏政三萬餘ノ人數ニ而出向勝頼公典厩ニ仰ラレ氏政
へ合戦ヲシカケヨトアリ典厩長閑分別ニ而一戰ナシ其時
御一戰候ハ、勝頼公御勝利ニ而有ヘク一家老ノ松田尾張
守子勝頼公方ニナルユヘ松田カ勢出マシク候然共氏政衆
三島ノ小川ヲ前ニ當弓鐵砲ヲ際限ナク五重計ニ備然モ總
勢下敷合戦ヲ待テ居タルヲ見テ止ラル、也

武林雜話云筑紫平均の後豊前にて十二萬石拜領仕たる時
六千石とらせ四郎右衛門と名付一老に相定公儀内儀共壹
人に打任せ石田治部少輔亂の砌筑前の國拜領仕候而一萬
五千石とらせ家康公御目見仕らせ備後守に任す

武蔭叢話云彌平次宅後は明智日向守一老臣と成明智左馬
介秀俊と號二千の大將に成り光秀先手を勤度々の高名類
ひなし

○職
平治物語云頼朝平家ヲ亡シ天下ヲ治テ文治ノ始諸國ニ守
護ヲ居テアラユル所ノ莊園郷保ニ地頭ヲ補シテ武士ノ輩
ヲ勇メ廢タル家ヲ起シ絶タル跡ヲ繼テ武家棟梁トナリ征

定まり候はぬ事美濃殿程公事の理篇批判致す人なきとの
義は信玄公御工夫不淺候へはこそ如此

大園記云秀吉を識しけるを信長公用ひ不給條斯て仰けるはかやうなる高職を
は同は舊功之輩に附與有度思ふ事尤不淺也去其舊臣に
無ニ其才智則豈論ニ新舊ニ乎

○嘗職
臥雲日件録云享德癸酉二月十七日寶瀆雲章來話(中畧)慶
雲莊今在建仁長慶院仲芳眞子也又記雲章話泉州太守臣
有、曰ニ久枝一者先是爲泉州副守一力辭之刺、髮爲僧
渡唐去今泉守嗣位之初諫主令不受三州中寺社之賀
錢一者四百錢貫也予曰吁今亦有如此賢者乎傳聞今月
七日當職射狗會自丹波一貫狗无狗者出、錢三百五十家
臣若有下如久枝一者豈可、不諫哉雲章亦不勝慨歎、
也

又云長祿三年二月四日喚智瑞行者來(中畧)瑞又曰當職
多我出雲守先是督公府役歸時街頭聞呼聲問之則
男子好衣裳佩金粧刀一者三人奪、俄人衣服一者即捉三人、
誅之以奪、俄人衣服云々

年中恒例記云二月一日一御對面次第ハ御出座之砌則御供
衆申次懸御目而管領令申入候テ當職一人御前へ參候

テ着座也云々

○前職

豊記抄云三職は上に當職次に前職其次御着座候三管領斗此分候當職は御判初評定始等時一人御着座引付衆奉行もうらうちにて着座

○職衆

甲陽軍鑑云右の増城源八其ま、置給へ候三年目河中島合戦に殊外に氣て己か事をは指置剩傍輩のふるや惣次郎と申者臆病を仕たると又對決有て終に實否究まらず鐵火をとれとの事なれとも信玄公仰出しに旗本の侍に直に鐵火をとらすれば下輩なる仕置なれば兩方代を出してとらせよと上意にて双方より被官をいたし職衆と横目二十人衆頭四人を指そへ八幡宮の庭にて鐵火をと増城被官取まくる

○下知司

和井日記云丹波家所々去月廿二日別所長治荒木村重等ニ御下知アリテ攝州播州ニテ三手合セノ御武畧ヲ立ラレ平林右馬助秀家伏谷美濃守氏信三田肥後守綱氏ヲ御目代下知司トシテ宗徒ノ旗頭衆ヲ副ラレテ將軍池ノ上ノ陣ヲ夜討シ云々

進上候役人御太刀被下則進上云々

○沙汰人

庭訓往來云厨院飯無相違者早課沙汰人等地下目錄取帳以下文書濟例納法注文悉可被召進也又云地下文書事或紛失或失墜錯亂之由沙汰人等依構申延引之條恐入候

季瓊日録云寛正四年八月五日等持院領宮津庄三沙汰人緩怠仍可被成敗罪過之御奉書之事即命于飯尾左衛門大夫也

○甲乙人

保元物語云其折節平兵衛尉家貞兵衛尉本中井本左衛門鎮西ヨリ大勢ニテ上洛シケルカ郎等共淀川尻ニ充滿シケレハ時分惡カリナン暫其程ヲ過サントタメラヒケル程ニ重病ヲ受テ萬死一生也兎角シテ助リケレ共自萬死一生ニ至此録本不載起居モ合期セサレハ或浴室ニ下リ療治ヲ加ヘケルニオリ合タル甲乙人等穴佈シ人間トハ見ヘスト怖オノ、キ怪ヲナセリ

松平記云永祿五年の秋の末三河の住人菅沼藤十郎取手をいたし兵糧の爲に佐々木の上宮等へ行てもみをほして置たるを取て城へ歸る此等は三河國の三ヶ寺の院家の其一なり殘の二ヶ寺の御坊達寄合て談合しけるは此等は當國

○役者

走衆故實云御成在所にて御供衆走衆座敷替事普廣院殿様御代鎌田殿故也大御酒ありて還御をも不知御えんにあふのきてねられ候ひけるを公方様らつそくを被取やかせられ候つる其より一大事の役者にて候にかやうに候ては曲事に候由に候

甲陽軍鑑云山本勘介工夫井堅尻合戦條晴信公金言を仰らる、は上方の諸人無穿鑿なるは諸人のあやまりにてはなし大將のあやまりなり大將あやまれば家老あやまり家老あやまれば諸役者過諸役者過は諸侍過諸侍過は下々過と仰られ又とひ給ふ

東遷基業云勝頼はまた夜の内より軍勢をくり出して明れは五月廿一日の曙に近々と備を立其中何も馬は大將と役者と計七八人乗て殘る士は馬は後に牽せ皆下り立て槍をとり一備きりに懸來る合戦を始る氣色を見て信長公の陳所より大筒二ツ三ツ放しかくる

○役人

花營三代記云應永廿九年正月十七日於殿中寢殿南向一有目的始二三番三弓也注別紙一厥後御所様御方ノ御所様被遊也管領諸大名兩御所江御太刀進上御方衆御方へ太刀

の本寺にて開山上人より此方久敷不入之地也加様の甲乙人のろうせきすへき所にあらず以來の爲尤いましむへしとて菅沼か所へ行土民を催し菅沼か内の者共を打ふせ難くくあまた取返して歸る菅沼大にいかり喧嘩を起しけれども不叶此由酒井雅樂介に申候酒井聞て使を以申ければ其使をきりける間家康是をきこしめし酒井雅樂介をけんたんに被仰付寺共の狼藉ともいませたまふ云々

○訴人

吾妻鏡云弘長元年三月五日引付沙汰不事行之由訴人等愁訴之趣達上聞之間今日有評議向後無懈緩之儀早速可申沙汰也於徒拘持奉行人等者頭人就注申可被處重科之旨被觸仰引付云々

太平記云公家一統政道條或ハ自内奏訴人蒙勅許ヲ決斷所ニテ論人ニ理ヲ被付又決斷所ニテ本主給安堵内奏ヨリ其他ヲ別人ノ恩賞ニ被行

○證人

平家物語云行綱なましひなる事申出て證人にやひかれんつらんとおそろしさに人もをはぬに取袴し大野に火を放たる心ちして忽門外へを逃出ける

事於殿中異見有之既殺害之段證人分明之上者於張本人者爲社家尋披之加討討到社司給者可被改之旨各御返事申之

伊達日記云修理存候ハ米澤へ御奉公申候ハ彼人質共相捨可申儀難儀ニ候間證人替可申ト存備前家老ノ子中澤九郎四郎大内新八郎大河内九郎吉三人ハ狀ヲ越唯今追鳥時分ニテ候間罷越候ヘト申ニ付何モ若者共ニテ以後ノ分別モナク八月五日之晚新松田へ罷越云々

蒲生氏郷記云永祿十一年氏郷十三歳鶴千代ト申時信長公得父蒲生兵衛大夫爲證人岐阜被相越於御前每度武籍雜談有之云々

新田由良家傳記云成繁公御嫡子由良六郎國繁公後雅樂頭又信濃守此御代天正十三年に小田原北條氏政計策を以於厩橋證人に被仕國繁公の御代より御小身に成せられ候

○論人

太平記云公家一統或ハ自内奏訴人蒙勅許ヲ決斷所ニテ論人ニ理ヲ被付又決斷所ニテ本主給安堵内奏ヨリ其地ヲ別人ノ恩賞ニ被行

○方人

新田ノ庄世良田ニハ有徳ノ者多シトテ出雲ノ介親連黒沼彦四郎入道ヲ使ニテ六萬貫ヲ五日中ニ可沙汰ト堅ク下知セラレケレハ使先彼所ニ莅テ大勢ヲ庄家ニ放シ入テ譴責スル事法ニ過タリ新田義貞是ヲ聞給テ我館ノ邊ヲ雜人ノ馬ノ蹄メニ懸サセツル事コソ返々モ無念ナレ争カ乍見可レ泳トテ數多ノ人勢ヲ差向ラレテ兩使ヲ忽生取テ出雲ノ介ヲハ誠メ置キ黒沼入道彦四郎ヲ切テ同日ノ暮程ニ世良田ノ里ノ中ニ被懸ケル

又云公家一統文觀上人ハ硫黄カ島ヨリ上洛シ忠圓僧正ハ越後國ヨリ被歸洛摠シテ此君笠置へ落サセ玉シ刻解官停任セラレシ人々死罪流刑ニ逢シ其子孫此彼ヨリ被召出一時ニ整懷ヲ開ケリサレハ日來誇武威無本所ヲ權門高家ノ武士共イツシカ成諸庭奉公人ハ或ハ走輕軒香車後或跪青侍格勸前世ノ盛衰時ノ轉變歎ニ叶ハヌ習トハ知ナカラ今ノ如ニテ公家一統ノ天下ナラハ諸國ノ地頭御家人ハ皆奴婢雜人ノ如ニテ有ヘシ哀何ナル不思議モ出來テ武家執四海權世中ニ又成カシト思フ人ノミ多カリケリ

庭訓往來云問注所者永代御券安堵年記放券奴婢雜人券契負累證文等謀實糺明之

吾妻鏡云治承四年九月七日丙辰安平家方人有笠原平五頼直者今日相具軍士擬襲木曾木曾方人村山七郎義直并栗田寺別當大法師範覺等聞此事相逢于當國市原決勝負云々

又云文治三年二月九日辛巳有大夫屬定康關東之武士也彼近江國領所平家在世之時者稱源家方人被收公滅亡今又守護定綱爲兵糧米一點定之依之企參上募申有勞之間停止旁狼藉如元可領掌之趣今日被仰下云々

又云文治三年十二月十日丁丑橘次爲茂蒙免許爲北條殿計賜富士郡田所職是父遠茂者爲平家方人治承四年奉射三品仍日來爲囚人云々

又云承元三年十二月十一日辛未美作藏人朝親與小鹿島橋左衛門尉公業欲致楚忽合戰相互緣者競馳三浦一族稱方人來加公業之許云々

○雜人

太平記云新田義貞相模入道舍弟ノ四郎左近大夫入道二十萬餘騎ヲ差副テ京都へ上セ畿内西國ノ亂ヲ可靜トテ武藏上野安房上總常陸下野六箇國ノ勢ヲソ被催ケル其兵糧ノ爲ニトテ近國ノ庄園ニ臨時ノ夫役ヲ被懸ケル中ニモ

鹿島治亂記云捨鹿島府中へ可有歸城ト内々ノ用意宿老共難奉諫無御承引依之島崎へ告來左衛門尉返事ニ今如何共難計可任城主之心使者ヲ歸シ竊招部下之人々義幹之亂放難制止所今通幹歸十府中内外ノ沙汰嘯バ東ヨリ附置忍若共早刻可告義幹願所ト卒ニ手勢夜中可寄來外ニ疎遠會釋待此時節鹿島ヨリ雜人小荷駄可運舟津其紛ニ我卒手勢可籠鹿島要害

松原自休手録云向若州丹羽明智人質ハ取ヌレトモ與朝倉一揆トモ差塞道危ク見エケレハ分遣家康ノ勢追拂敵是モ口入杉木今津船木ノ山々ニ一揆取上テ上関聲雖發矢石爲差事モ不出來所々險難ノツマリツマリニテ雜人モ不取落上洛セラル

○人質

室町殿物語云今度筑前守京都にて一戰に打まけしよりも屬せし人々相談して心替りせしかは幽澤の入道も中たかはんと思へとも母親を人質に出しければ何とも黙止かたくていかにもして盗いたさん事を案しめくらしける

江濃記云日根野備中同彌吉二人屏風ノ影ヨリ跳リ出テ兼常ノ二尺三寸ヌケハ玉チル計ナルヲヌキ孫四郎ヲ一太刀ニ切臥ケレハ準人ト彌吉ハ一色右兵衛佐ヲ切タラス此由

父道三聞テ大ニ驚キ馳カヘリ貝ヲ吹テ人数ヲ集メ四方ノ町ノ末ヨリ火ヲカケ放火シテ稻葉山ノ城ヲハタカ城ニナシ川ヲ打越シ山方ト云山中ニ引籠リ父子ノ合戦初マリケル國中ノ人質ハ新九郎方ニ有レハ皆新九郎方ニ馳集ル中國治亂記云石見ノ吉見正頼ハ此合戦ニ義長ニ打負テ和談ニナリ降参シテ息男龜王丸ヲ人質ニ出シケルヲ山口ノ福井ト申處ニ置

高國記云大永八年正月朝倉太郎左衛門ト三好筑前守和談ノ暖アリ細川双方合點アリ正月廿八日互ニ人質トリカハシケルニ三好神五郎政長ト柳本一味シテ和談ヲ破リ筑前守ヲ背テ堺ヘ下リ筑前守事ヲ色々讒言申シケル

大友記云龍造寺山城謀叛之條隆信モサナカラ心元ナクヤ思ヒ給ヒケン降参ヲコヒテ質人ニ龍造寺豊前守ヲ出ス宗觀シテ人召レ永祿十二年三月廿日ニ豊州ヘ歸陣也
三好家成立記云久米安藝守云先軍ノ手初ニ一ノ宮長門守ヲ打取渠カ妻子ヲ生捕人質ニシテ實休ニ談合シテ其夜々討ンシタリケル一ノ宮カ臣ニ木村肥前守ト云者一人供シテ一ノ宮ハ落タリ妻子ハ則安藝守生捕タリ

赤松記云かくて浦上三ヶ國の勢を催し享祿三年常桓の御供申既に攝津國多藝山をばしめ伊丹の城其外攻落して悉

くしたかへ直にみやこへはのほらす候て阿波衆へ取伺天王寺へ陣を取然る所に御屋形様内々阿波衆より内通あり此時親の敵浦上を御うちあるへき調署にて堺へ人質を被出相濟後卷可被成に定まり面むきは浦上には見つきのために御上りと披露し明石修理亮先陣にて御出張有り

赤松再興記云享祿四年三月廿五日細河讃岐守政之率八千人一著堺津一矣公方ト晴元ト八千餘ヲ將給テ御陣ヲ召ル三好一萬五千人ニテ天王寺へ取掛矢軍ヲ始ム此時赤松政村晴元三好ニ内通シテ被渡人質畢

阿州將寄記云信長三好山城守入道笑岩に阿波國を被仰付により笑岩數千騎にて阿州へ下りければさきに元親に隨し阿州の古侍とも又笑岩に屬しけり元親分の兵とも不叶して池内肥前守野中三郎左衛門は成功を人質にとる夷山の吳田五郎左衛門東川庄左衛門は庄野和泉守か子を入質にとる云々

永祿記云信長佐和山に七ヶ日逗留有之御入洛路次之儀人質を被出馳走可被申趣公方様御使に信長使節を添申され御本意においては御恩賞に可被行之旨有之といへとも御請なく此上は御斷に及はるへき御造意にて九

月七日に公方様へ御暇を被申江州を討果御迎を可遣上之旨被申入尾濃の軍兵を卒し九月七日に平尾に被陣取者也

勢州軍記云木造家既及叛心國司家大憤欲攻伐木造先以柘植三郎左衛門之人質害之九歳息女母子俱兼捕之木田方使其家士中西甚太夫殺之下人往彼宿所誑連行之時早悟此計其容兒美麗如玉殊利根發明也向母流泪告別曰於泉下必有相見云々見聞諸人爲之酸鼻下人負之到木造近邊雲出川端甚太夫捕之以細繩殺刺大木串向木造城掛磔不知東西之幼女其殘酷誠堪憐其後澤秋山以下南方諸將圍木造伐之城兵海津喜三爲鐵炮名人爲渠寄手多蒙傷秋山家士坂甚四郎以下數多戰死矣當時鐵炮用不多世上

播州佐用軍記云羽柴秀吉細播磨へ下給條小寺一身之才覺ニヤ有ケン高孝父子其外之家老ヲ聚メ相談ヲ以テ當時信長公ノ武威ヲ聞キ傳へ歸服仕ラント決定シテ(中畧)御公達ノ御中一人大將トシ播磨へ下シ給へ此方ヨリモ人質トシテ一子ヲ可奉ト申テ潛ニ岐阜へ遣ケル

安土日記云明智十兵衛丹羽五郎左衛門兩人若州へ被差遣武藤上野人質取候テ可參之旨御詮候則武藤上野母ヲ

人質トシテ召置

惟任征伐記云從毛利家船登有條分國之中備中備後伯耆出雲石見以上五ヶ國渡進添誓詞出三人質可續御旗之由再三申來甲陽軍鑑末書云懸川ノ城御願見遊シソレヨリ久野ノ城御巡見被成信州伊奈へ御馬ヲヨセラレ高遠ニ逍遙軒留主ニ被仰付氏政ヨリノ人質兄弟ノ番ヲウヘノ原加藤ニ堅仕候ヘト有テ北條方ヘノ境目ニ指置ル也

末森記云成政娘二人有之一人ハ秀吉公へ人質ニ出シオカレ上方ニアリ
太閤記云蜂須賀小六賀治田隼人佐請手之勢百騎斗其勢五六百人此内弓鐵炮なかはせり此大將は大炊助也看車ひし手楯等其役人を相定め案内者三人之内人質の爲にとやおはしけん一人を止り候へもし敵つよくしたふ事あらは其方を案内者にして助候はんと藤吉殿被申しかは何心もなう止りにけり

柴田退治記云池田紀伊守之助蜂屋伯耆守頼隆其外引卒諸國之軍兵都合三萬餘騎凌大風分深雪到岐阜押寄國中之凶徒或加追討或任降参不經日而成一國一城一信孝慘之偏嘆慕和與之儀而信忠御若君添信孝老母息女爲人質出之

聚樂物語云毛利家より城中の大將清水兄弟又藝州より加勢に入たる三人以上五人に腹きらせ諸卒をたすけられ候は、毛利分國の中備中備後伯耆出雲石見五ヶ國を渡し申へきに人しちを出し御はたしたに付したかふへきとのせいしにて大將五人の首實檢あり

新田由良家傳記云足利の長尾但馬守息女はかり有之家を續申候男子無之に依て成繁公へ申入(中畧)長尾景長是非とも三九郎を養子に仕度よし様々申に付て左候は、新田家中次男三男多く有之間三九郎に附候て可進候條其方の知行宛行可被申と堅く契約被成被遣候自然三九郎殿を人質に取候て新田へ手切致し候て手廻の侍共一所に罷成三九郎共に討捕切死に可致旨御家中侍共に被仰付候

東遷基業云織田信秀城を築て岡崎に通り其子信廣安祥に據りて岡崎に對す四面に敵を受て危かりし故廣忠公今川義元へ援兵を乞給ふ義元許諾して駿遠の兵を發し救へしとの意にて人質を出さるへきよしを申越れければ廣忠公已事を得給はすして神君を質として義元へ送り給ふ愚耳舊聽記云^{大光寺賢}尾崎新屋淺瀬石此三人も大光寺の淺瀬石大和方より小笠原伊勢方へ申遣しけるは其元の息女

質せいし請取まつもりけの陣をはらはせ秀吉は心静にもてなし六月六日巳刻に備中おもてをひきて備前國ぬまの城に至るまで大雨大風數ヶ所の大河こうすいを凌ぎ姫路にいたり廿里斗口口着陣す

家忠日記抄云天正十年十月廿九日氏直と無事相濟鶴ノ郡此方渡申候人質酒井小五郎此方ヨリ遣ス敵ヨリ大道寺山角越候

奥羽永慶軍記云^{和賀山北條}和賀諸頭是ヲ聞テ此境ヲ爭フコト數箇年ナリトイヘトモ遂ニ不破不^被破上ハ和賀山北ノ讎憤モ有ヘカラス是ヲ幸ニシテ和睦セハヤト内議一決シテ其趣ヲ云遣ス山北モ願フ所ナレハ互ノ生捕ヲ人質ト定メソノ翌日兩方ノ大將五人宛半途ニシテ出逢對面式代シテソ歸リケル

又云^{青木捕人質}刈松田領城主青木修理ト云者米澤ニ降シ候ハソト内通スサレトモ大内備前守武畧ニ長シタル兵ニテ米澤ヲ背キシ以來田村境四本松領ノ城主ヨリ人質ヲ取テ置シ事ナレハ青木修理モ舍弟新八郎嫡子掃部人質トシテ備前守ニ捕レヌレハ如何セント案煩ヒケルカ才覺ヲ以人質ノ代リヲ取ント思案ヲ運シケルハ備前守カ家臣ノ子中澤九郎四郎大内新八郎大河内次郎吉トテ三人ノ若者ノ在ケ

倅安藝守方へ申うけたく候也御同心においては可參候といとこまやかに申遣しけるしかれとも伊勢心におもひけるは大和心中無覺束一家をつかせん子の妻に敵方の娘を望む事若人しちにせんとのはかり事にやあるへき其上一身の覺悟にて是非を極めかたき事と了簡し大和方よりそれかし娘をもらひ申度旨申遣し候一圓心得かたき事に如何可仕哉と爲信公へ申上ければ爲信様聞めしよし夫は計策に申越候共我にも思ふ子細ある間娘をつかはし可被下若はかり事に申越候は反問の場爰なるへし又大和心實みかたへ心を通しなは是に上こす事はあらし兎角味方の吉事也とくく返事いたされよとそ仰ける

備前農家河本氏藏永祿十三年下知狀云定福津紀伊守子同名監物子立阿玄蕃弟爲人質其地在城之向後爲代可勤軍役之旨兩三人御訴訟申候之間被爲返候者也云云

伊達日記云今度ハ彌四本松中ノ城主ト人質トリ被申候ニ付青木修理モ新八郎ト申十六ニ成候弟ニ此頃ノ青木掃部其頃ハ五ツニ成子ヲ指添ヘ小濱ヘ人質被相渡申候云云

天正記云^{備中高松}もりけより元はる條にまかせ五ヶ國并人ルヲ人質ニ取テ米澤ノ味方トナランニ殺害スルコトナカケルハカラスト思ヒケレハ先カノ三人カ方へ使ヲ以云送リ來リ狩シテ慰シ給ヘカシト云遣ケリ

當代記云慶長十九年九月廿七日於大坂自秀頼公一片桐市正可有殺害トテ被召ケレトモ號煩不參此密儀ヲ市正へ告知スル族有之カト云々則大野修理織田左門^{有樂}以下以二人數押寄處ニ市正モ令覺悟其上弟主膳相籠間無左右難誅戮依之自修理方取人質市正同主膳下屋敷へ相退

玉露叢云慶長十九年十二月四日吉野ノ與北山熊野山史等年貢ヲ抑留スヘキタメ少々一揆ヲ發シ山中ニ引籠ノ由大御所ノ御耳ニ立ツ依テ其近邊ノ御代官ニ仰セ付ラレ人質ヲ取ヘキ由仰セ付ラル

初井日記云^{丹波家所}先早々使ヲ進上候近日將軍様并ニ羽柴殿へ名代ノ使者ヲ奉ルヘク候并ニ輝元ヲ初メ宗徒ノ旗頭トモノ人質ヲモ一所ニ奉ルヘク候云々

武隆叢話云眞田左衛門佐信賀は夏陣には五月六日譽田口へ張出し伊達正宗とせり合けり政宗先勢を兩度迄譽田へ追込み手柄を振ひ申候殊に子息大助信隆十五歳にて高名

し高股に鎧手を蒙る翌七日の合戦には真田左衛門佐秀頼公御馬の出る事延引するを待兼大助を人質に本丸へ入り其跡にて左衛門佐討死す四十六歳也

松原自休手録云十九日常高院來若狹守陣營右兩人會彼處從城中曰殘本丸埋二三ノ堀有樂修理可出人質母公ノ被出難叶然上ハ從兩公古新侍不可有異儀之可賜誓紙云々依之和睦調畢

○降人

奥州後三年記云爰によし光將軍に申て曰つはもの、道降人をなたむる者古今の例なりしかるを武ひら一人あなかに頭をさるる、事その心いか、といふよし家義光に爪はしきをしかけていふやう降人といふは戦の場をのかれて人の手にかゝらすして後に咎をくひて首をのへてまいるなり所謂宗任等なり武衛はた、かひの場にいけとりせられてみたりかはしく片時のちををしむかれをは降人といふへしや君この禮法をしらすはなはたつたなしといひてつひに斬つ

陸奥話記云献眞任重任經濟首三級京都爲壯觀車擊人摩肩別紙也先是献首使者卒眞任從者降人二也吾妻鏡云治承四年十月廿二日壬寅着于相模國府給始被

行勳功賞(中畧)大庭三郎景親遂以爲降人一參此所即被召預上總權介廣常云々

太平記云大塔宮熊野落條四方ノ山々ニ關ヲ居路ヲ切塞テ用心密シクソ見エタリケル是モ猶大儀ノ計略難叶トテ叔父竹原八郎入道ニ此由ヲ語ケレハ頓テ戸野カ語ヒニ隨テ我館ヘ宮ヲ入進ラセ無二ノ氣色ニ見エケレハ御心安ク思召テ此ニ半年許御座有ケル程ニ人ニ被見知シト被思食ケル御支度ニ御還俗ノ鉢ニ成セ給ケレハ竹原八郎入道カ息女ヲ夜ノヲト、ヘ被召テ御覺異他ナリサテコソ家主ノ入道モ彌志ヲ傾テ近邊ノ郷民共モ次第ニ歸伏申タル由ニテ却テ武家ヲハ褊シケリ去程ニ熊野ノ別當定通此事ヲ十津河ヘ寄センル事ハ縦十萬騎ノ勢アリトモ不可叶其邊ノ郷民共ノ欲心ヲ勸テ宮ヲ他所ヘ帶キ出シ奉ラント相計テ道路ノ辻ニ札ヲ書テ立ケルハ大塔宮ヲ奉討タラン者ニハ非職凡下ヲ不云伊勢ノ車間庄ヲ恩賞ニ可被充行由關東ノ御教書在之其上ニ定通先三日カ中ニ六萬貫ヲ可與御内伺候ノ人御手ノ人ヲ討タラン者ニハ五百貫降人ニ出タラン輩ニハ三百貫何レモ其日ノ中ニ必沙汰シ與ヘシト定テ與ニ起請文ノ詞ヲ載テ嚴密ノ法ヲ出シケル

ル

應永記云平井新介カ刀ヲ押ヘテ申ケルハ入道殿御討死ノ上ハ順義ノ合戦ナラハ不及申是ハ朝敵ノ事也何カハ可被苦内々上意ヲ伺申可有御降參ト申ケレハ新介非本意思ヒ今此際ニ成テ軍難義ニ成ヌレハトテ降參セント云事ハ且ツハ我家ノ瑕且ハ弓矢取ノ耻也トテ討死セントシケル平井類ニ宥メツ、冑ヲ脱カセ降參シケレハ相從ケル者迄モ同ク降人ニソ參ケル

親房卿被贈結城狀云或爲近二日之害或爲全所帶之利一與同于高氏逆節忘名之輩爲數度之降人弓箭之耻何事如之

江濃記云元弘の亂れにも惣領の六角方は六波羅の催促にしたかひ山門の合戦に手をくたき其外戦功粉骨を盡し馬場か時の戦場より京都の降人に參られしかは其身は出仕を止られ子息氏頼幼稚より名代として京都へ差上られける

二水記云永正十七年五月十日三好男兄弟芥川二郎孫四郎今日爲降人及出頭云々

太閤記云安宅河内守か居城由良の城を八重十重に打かこみ弓鐵砲を射入打入凱歌おひたし山海ひ、さ渡り喧しければ城中之女童などはもたへかなしひけり安宅おもう

やう行々とも運を測くへき便もなし唯降人と成て屬信長公之幕下武功を勵み見んと令思惟云々

奥羽永慶軍記云奥州赤坂合戦義重歸陣シ玉ヲ事赤坂カ至剛ノ振回ヲ惜マセ玉ヒテ合戦ヲ止玉フサレハコソ義久カ計ヘニテ赤坂父子遂ニ降ト成テ永ク佐竹ノ臣トソ成ニケル

○預人 吾妻鏡云文治二年三月十六日諸國兵糧米催事漸々被止之由被仰北條殿是及狼藉之旨預所有訴之故也 又云建保元年二月十八日己丑囚人之中園田七郎成朝遁出預人之家逐電今夜先向于祈禱僧號敬坊談日來子細坊主動云今度叛逆衆皆不可破四張之綱只今一旦雖遁出始終難成安堵之思歎須遂出家者成朝答云與力事勿論(中畧)就中年來有受領所望之志不達其前途者不可及除髮云々廿日辛卯成朝逐電之間釋露顯被召出件僧被尋問之處成朝申狀之趣悉以言上將軍家聞食之受領所望之志事還有御感早尋出之可有恩赦云々

又云承久三年七月一日癸未合戦張本衆公卿以下人々可斷罪之由宣下間武州早相具之可下向于關東之旨下知面々預人等云々

稱呼部 二十

太平記云公家一統妙法院宮ハ四國ノ勢ヲ被シ召具ニ讃岐國ヨリ御上洛アリ萬里小路中納言藤房卿ハ預人小田民部大輔相具シテ常陸國ヨリ被シ上洛ニ春宮大進季房ハ配所ニテ身罷ニケレハ父宣房卿悦ノ中ノ悲ミ老後ノ泪滿袖法勝寺圓觀上人ヲハ預人結城上野入道奉具足ニ上洛シタリケレハ云々

武蔭叢話云大久保相模守忠隣ハ小田原の城主也幼少にてハ新十郎と云家康公御寵臣なり殊更大久保七郎右衛門忠世か子なれば一入御心安第一成しかいか成事か有けん慶長十八年の冬家康公關東御鷹狩の初十二月六日中原にて大久保相州預りの人馬場八右衛門一通の訴状を上る是相模隱謀の企あるよしを申上て此段本多佐渡守正信に御相談有云々

○落人

吾妻鏡云建久元年二月五日凡於今度落人等者至三郎等皆可召進之落人相論并就下人等事傍輩互不可有喧嘩

太平記云千鶴破城軍條去程ニ吉野戸津河宇多内郡ノ野伏共大塔宮ノ命ヲ合テ相集ル事七千餘人此ノ峯彼ノ谷ニ立隠テ千御破ノ寄手共ノ往來ノ路ヲ差塞依之諸國ノ兵ノ兵糧忽

増補家忠日記云天正十年七月十四日大神宮酒井左衛門尉忠次ニ信州十二郡ヲ賜ル一信州十二郡棟別四分一其外諸役等不入手出置候事一彼國引付候面々可爲ニ其方計一信州無一篇之間奉公令退屈一缺落候人分國可ニ相拂國元内者上下共同前之事

甲陽軍鑑末書云今度降參ノ三河山家三方衆モ山縣寄騎ニ被ニ仰付也扱十一月月中旬ニ御馬入ラル、家康人質松平源三郎甲州下山ヨリ缺落ニヨリ明ル未ノ年ヨリ家康ト信立公遠州三州アラソイノ弓矢初ル也

○下手人

太平記云御所國條師直イヤ々々是マテノ仰ヲ可承トハ不存只讒臣ノ申處ヲ御承引候テ無故ニ條殿ヨリ師直カ一類亡サントノ御結構ニテ候間其身ノ不誤處ヲ申開キ讒者ノ張本ヲ給テ後人ノ惡習ヲコラサン爲ニ候トテ旗ノ手ヲ一同ニ嵐ト下サセ楯ヲ一面ニ進テ兩殿ヲ圍奉リ御左右遅シトソ資タリケル將軍彌腹ヲ居兼テ累代ノ家人ニ彼レ圍テ下手人被レ乞テ出ス例ヤアルヨシタ々天下ノ嘲ニ身ヲ替テ討死セントテ御小袖ト云鑑取テ被レ召ケレハ堂上堂下ニ集リタル兵甲ノ緒ヲシメ色メキ渡テアハヤ天下ノ安否ヨト肝ヲ冷シケル

ニ盡テ人馬トモニ渡ケレハ轉漕ニ依兼テ百騎二百騎引テ歸ル處ヲ案内者ノ野伏トモ所々ノツマリ々々ニ待受テ討留ケル間日々夜々ニ討ル、者數ヲ知ス希有ニシテ命計ヲ助カル者ハ馬物具ヲ捨衣裳ヲ剝取レテ裸ナレハ或ハ被タル篋ヲ身ニ纏テ肩計ヲ隠シ或ハ草ノ葉ヲ腰ニ巻テ耻ヲアラハセル落人トモ毎日ニ引モ切ラス十方へ逃散前代未聞ノ耻辱也

又云越後守仲時精谷三郎越後守ニ向テ申ケルハ弓矢取ノ可死處ニテ死セサレハ耻ヲ見ト申シ習ハシタルハ理ニテ候ケリ(中畧)此等ヲ敵ニ受テハ退治セン事恐クハ萬騎ノ勢ニテモ難ク叶況我等落人ノ身ト成テ人馬共ニ疲レ矢ノ一筋ヲモハカ々々シク射候ヘキカモナク成テ候ヘハ何ク迄落延候ヘキ云々

伊達日記云彼地ヲ御責可然候宮崎ヲハ御引出御尤之由申上候内々御同心ニ被ニ思召候處ニ其夜城中ニ火事出來城ヲ持ホコシ落城仕候落人トモカラメ取參候何レモ御成敗被レ成候佐沼ヘ御取ウツミ被レ成候

愚耳舊聽記云北島佐近忠弟之遊藝條しかる所に波岡よりの落人共大釋迦山を打越津輕坂新城油川の邊迄逃迷

○缺落人

○川立
謙信家記云輝成公越柿崎ト云侍大將進ミ出申ケルハ(中畧)其勢千計上ノ瀬ヘ被レ遣味方御本陣ノ始メ雲火迄皆消シ上ノ瀬ニ雲火ヲ手ニ手ニタカヒ諸軍上ノ瀬ヘ皆向候體ヲ見セ其後川立ヲ三五人向ヘ越候テ敵ニ横目ヲ付其相圖ヲ以諸兵ヲ御越被レ成尤存候

武家名目抄稿第七十册

塙檢校保己一編

稱呼部廿一上

○北政所

○大政所

康富記云應永八年六月七日乙丑今日祇園祭也大政所參詣拜神輿今日無定梓只最小梓一有之依無室町殿御出也

季瓊日錄云長祿三年十一月八日祇園大政所殿神職之事自細河右馬頭殿任當知行之旨可被仰付之望有之依彼被申可仰付也但子細追可有御究明之由被仰出也

光源院殿御元服記云天文十五丙午歲十二月廿二日彈正少弼定頼旅館江御成有之(中略)於御簾中御臺所有御一献一女御座敷之次第相伴北政所殿并定頼内室也

紀州發向記云高野山金剛峯寺是先經無背上意不忠柔和之姿專真言大事之條尤神妙也殊彼山者誠無比之靈地弘法大師遺跡而諸人所歸依也就中金堂破壞後久

誰人於末世修造此大功哉内府大政所殿爲逆修欲營此堂八木一萬石遣之又金堂爲修理料於隣鄉二千石之寺領末代マテ所新寄進也

秀吉任官記云任内大臣被成勅書其後大坂立勅使以御臺任北政所以母儀任大政所

毛利家記云金吾殿ハ北政所殿ノ甥ニテ彼養之爲子彼若殺其義子則彼之不慈也我何與焉自古雖結婚姻而相爲敵國者多矣我豈報上京哉秀吉聞而慮之乃送其母大廳大廳一曰于岡崎以爲質安其心云々

清正記云主計頭つと參られ候へは太閤は女の御裝束にて政所様松之丸殿高藏主そのほか上臈衆の中にましり御座なされ候しかれとも清正御聲を聞しりはや御いてなされ

はつさんため二百人の足かるにてこをもたせ參り候此通時加藤主計頭これまで参りたり大地震影敷候の條上様を

はしめをしにうたれ御座なさるへきと存たてまつりはね太閤様政所様へ仰上られ候へと申されければその聲を太閤様政所様きこしめされ扱々はやく参りたる者哉氣のき

いたるものかなと太閤様仰らる政所様は主計頭を御懸になさるによりさま御挨拶なり

天正記云其後大坂へちよくしをたて年月をもつて北のまんところににんすおほき大政所ににんす

又云富野白殿御手かけの人の人々しせいの候はく秀次卿のわかまんところ參州へ送り申され其外もよたちさんたち三人これあり

多聞院日記云天正十八年六月七日今度お戒壇院熊野山ノ鰯口以上大小九ツ被鑄之(中略)一は三尺計は主豊臣朝臣親母大政所

慶長見聞記云金吾中納言殿ハ政所様御養子ニテ諸將敬ヒ申候所ニ治部少輔如此ノ無作法ニ候間金吾殿モ家中モ腹ヲ立加様ニ治部少下知ヲ受ル事無念也

東遷基業云秀吉公より使來りて神君來謁し給へとの事なりしかは將佐を集めて此事如何あらんと議せられけり淺野彈正津田隼人正富田知信織田長益羽柴勝雅土方雄久を

使として大政所を岡崎に質として被遣京都に上り給へと請れければ神君聞召て左あらは可上よし御返答ありしかは長政等歸りて其旨を秀吉公へ申ける故秀吉公大に喜ひ給ひて其事既に定りしかは云々

武蔭叢話云小早川隆景は武勇と云ひ才智と云ひ容儀骨柄誠に千萬人に傑出したる英雄なり(中略)筑紫治つて筑紫五十二萬石を隆景に下さる其後隆景考へて申されけるは

天正十年まで御敵にて有し毛利か家人小早川に何の御懸意に大國を下さるへきやは皆西國への懸敵を引付へき

謀に成さるものなり元秀吉公御心より出でたるにあらす左あれば已來六ヶ敷事なりと存し申上られけるは隆景

子を持申さす候間北政所様御子木下金吾秀秋を申請跡目に仕度と願ふ秀吉公御心に叶ひ則金吾殿を隆景子に下さ

る

○御臺所

吾妻鏡云治承四年八月廿八日戊申武衛自土肥眞名鶴崎乘船赴安房國方給質平仰土肥住人貞恒粧小舟云々

々自此所以土肥彌太郎遠平爲御使被進御臺所御方被申別離以後愁緒云々

又云元久元年十月十四日癸卯坊門前大納言信清息女爲將軍家御臺所依可令下向給爲御迎之人々上洛所

謂左馬權助結城七郎千葉平治兵衛尉下十二人

又云建保七年六月七日乙丑御臺所御方祇候人數被定其數今日於御前被結番之被撰容儀云々

承久軍物語云いまおもひあはすればへつたうあさりしやうくんをうち奉らんためにみとせかあひたうかひ給う

といへとも終にはんまふをとけ給はすこのはいりのしせ

つを天のあたへとよろこひおほしたつ處にうきやうの
 大夫は御けんのやくにさたまりけるよしきこしめしけれ
 はまつ一のたちうち給ふ所に引かへなからあきら御けん
 のやくをつとめしゆへにこそあへなくうたれけるとかや
 あくれは廿八日しやうくん家の御さうれいをいとま
 とする所に御くひのありかのしれさりければいか、はせ
 んとまふ處にきのふ御所を御しゆつとききんうち御
 ひんに参りければひんのかみを一すちぬかせ給ひてかた
 見とて給はりつ、いて、いなはぬしなき宿となりぬとも
 のきはの梅よわれをわするなとくちさみ給ふこそいま
 はしけれその御かみを御くしもちいて御くはんに入奉り
 せう長すゐんのかたはらにはむふり奉るこの日みたい所
 も御しゆつけあり

太平記云足利殿 足利殿ハ反逆ノ企テ已ニ心中ニ被ニ思定
 テケレハ中々異儀ニ不レ及不日ニ上洛可仕トソ被ニ返答
 セラル則夜ヲ日ニ繼テ被ニ打立ケルニ御一族郎徒ハ不
 及レ申女性幼稚ノ君達マテモ不レ殘皆可有ニ上洛ト聞ヘ
 ケレハ長崎入道圓喜惟ニ思ヒテ急キ相模入道ノ方ニ集リ
 テ申ケルハ誠ニテ候哉覽足利殿コソ御臺君達マテ皆引具
 シ進ラセテ御上洛候ナレ事ノ跡存候加様ノ時ハ御一

門ノ疎ナラヌ人ニタニ御心被ニ置候ヘシ況乎源家ノ貴族
 トシテ天下ノ權柄ヲ捨給ヘルコト年久シケレハ思召立事
 モヤ候覽云々
 明德記云又殊更タメシモナキ哀ナリシハ和泉ノ堺へ座シ
 ケル奥州ノ御臺ノ有様也云々
 花營三代記云永和四年十二月廿五日將軍家御臺所自御
 産所中御門東洞院伊勢入道亭ニ御還於御所ニ爲ニ御産ニ去
 八月六日入御然而依ニ延引ニ也
 又云應永廿三年正月十四日云御所様御臺様御方御所様伊
 勢守江有ニ御成ニ
 又云應永廿八年正月一日乙丑諸大名御所様御方御所様御
 臺様へ有ニ出仕ニ
 又云應永廿八年正月二日御所様御臺様御方御所様管領へ
 細川右京大御成(中略)御臺御供貞房貞彌御吉書役兵庫助貞
 慶云々
 康富記云應永八年八月廿四日今朝卯終尅室町殿奈良御參
 詣云々御臺同御參云々管領已下諸大名等被ニ參云々
 又云應永廿七年九月十日今朝室町殿醫師高天被ニ禁獄父
 子弟等三人ニ也云々此間仕ノ狐之沙汰風聞然而昨日於御
 臺御方御驗者被ニ加持之處ニ正自御所ニ逃出則被ニ縛ニ

件狐之後被ニ打殺ニ依ニ此事高天カ狐ヲ奉ニ詛付ニ之條露
 顯云々

又云應永廿七年十二月九日今日室町殿御臺御方御參宮也
 御輿十七丁騎馬三十騎云々

又云永享十年八月十五日丁卯今曉公方様御下向八幡
 御臺様同曉天有ニ御下向云々

又云康正元年八月廿七日庚午公方御臺様御治定御祝着儀
 同有ニ之入レ夜御祝儀但人々外様衆別不レ被ニ申ニ御禮ニ歎御
 臺ト申ハ日野大納言勝光妹也

教言卿記云應永十二年六月廿七日御臺御遠例自今日御
 祈禱被ニ始行ニ七月十一日御臺御圓寂云々
 院國師被ニ授申云々

松田長秀記云正長二年三月九日御元服(中略)御祝具足
 要脚同前諸道具自ニ打亂箱三寸御臺御方ニ有ニ之仍申ニ出ニ
 奉行方ニ申ニ付之ニ

建内記云正長二年七月一日丙午諸寺諸門跡等祈雨事
 可ニ觸催ニ之由有ニ御定ニ仍伺首口兩黃門
 御方參會之時ニ仰了口書献也口於御臺御方謁ニ堀川局ニ賜ニ
 御盃了次參ニ大方殿ニ同賜ニ御盃了

又云嘉吉元年十月一日甲午少女九
 向ニ靈雲庵ニ是可
 會ニ普廣院殿御後室御方ニ尼也三條内府息女
 事先日彼庵

有ニ媒介ニ之謂也今日依ニ吉曜ニ先被庵母同輿了
 滿濟准后記云永享五年二月十八日於將軍御臺御方ニ爲ニ
 彼御不例野狐氣御祈ニ五壇法被ニ始ニ行之ニ

又云永享五年二月十六日自ニ申半ニ御臺儀御邪氣與至高吟
 以外併野狐御存候將軍御仰天無ニ申計ニ可ニ參申ニ由承
 候云々

石清水放生會記云永享十年八月十五日今曉公方様八幡御
 下向御臺様同曉天有ニ御下向云々是日石清水八幡放生會
 也(中略)上卿午剋御退出六位外記史以下同午尅斗退出云
 々於ニ善法寺ニ有ニ御逗留ニ入レ夜御歸京也御臺様御棧敷於ニ
 東廻廊被ニ構ニ之有ニ御見物ニ路次又有ニ御棧敷云々

季瓊日錄云永享十年十二月十四日於御所ニ有ニ眞讀大般
 若經ニ御布施五十貫文即下ニ行之ニ蓋依ニ御臺様御不例ニ也
 又云永享十一年八月七日來十日之轉經御臺可ニ有ニ御出ニ
 也又云永享十一年十二月十八日午後御燒香御臺様半齋誦
 經聽聞

東寺供僧評定引付云一御臺様依ニ御違例ニ御祈禱事被ニ仰ニ
 出ニ之寺務奉書有ニ之今日十八日ヨリ御祈始行卅日供僧役
 爲ニ結番ニ可ニ出ニ之寺家支度先七か日分於ニ不動堂ニ三時護
 摩上十八人於ニ金堂ニ藥師供中十八人於ニ鎮守ニ百部仁王經下十

稱呼部 廿一上

千四百四十二

千四百四十二

人一日中二百部也南住供僧斗也七ケ日當退行有之者供僧每日一座可引之於仁王經は毎日一人宛可有參勤也三月七日連署

年中定例記云御打板の立様公方様のは左御臺様のは右中の御末なり

又云八の時分御こはくごとて參候御臺様へも同時に參る御所御方御座候得は同前御手長の女中御中臈紅の御袴金襴のむねのまもりをかけ候をり物いつれもめされ候又縫物をもめされ候云々

御成申入記云上野故刑部少輔殿直被申之は烏丸儀同殿任などは被御役候御供衆など迄は御前にて殿文字をおほくと被申たる段勿論云々ケ様の事は時々によりての御事にや何れに古へに相易事多之乍去御臺様の御酒の時公方様の御前にては申の御詞古へよりの御行儀更以無相違由承る也

宗五大双紙云毎年正月松はやしの時御臺様より觀世大夫にこふく唐織物以下十被下候御給はかさならず勢州取次申され候御廣ふたにすはり候大夫御廣ふたともに取て載て罷出候また御ふくはかりを給はりて載ても退出いたし候し御ふく斗給はりたるかよきよしした候

町殿御對面之後參御臺御方民部卿局出逢如先々當年如資儀珍重々々

又云文明十八年四月十九日今日御臺始渡御東山殿路次見物之先室町殿御次出車次御臺御與也網代與也

蟻川親俊記云天文七年正月十三日戊子大御所様へ若公様御一献の申御供衆已下御美物可有進納之由以上相觸私へ納申御朱下津屋かたへ渡之細川殿如恒例備臺御樽御進上俄依如例無出頭之觀世大夫同四郎同甚六同小四郎召之御臺様御服大夫被下之

又云天文七年十一月卅日御臺様より三荷三種御物領又云天文八年壬午六月十六日壬午若公様御臺様八瀬へ御出の御供衆大館右衛門殿朽木殿貞孝

光源院殿御元服記云天文十五丙午歲御元服當日十二月十九日同廿二日(中略)於御簾中御臺所有御一献

細川兵亂記云永祿八年乙丑當代京の公方様義輝と申候は天下の覺めてく候處に阿洲に御座候御所様より連々三好殿へ被仰上儀とも有之由候て乙丑五月十九日に二條武衛陣の御構へ人數押入御生害以上は御内侍衆討死候や御臺様は近衛殿の御姫君也ければ近衛殿は三好日向守送り被申候由云々

長祿寛正記云寛正六年十一月二十三日午尅御寮所細川和泉守亨ニテ御産平安若君御誕生萬人歡呼天下ノ悦ヒ何事カ是ニシカン誠ニ桑ノ弓蓬ノ矢云々

齊藤親基記云寛正六年八月十四日夜寅刻御出御成善法寺御臺様同前御供衆走衆如常伊勢守貞親依落馬不參應仁記云應仁丁亥ノ歲天下大ニ動亂シソレヨリ永ク五畿七道悉ク亂ル其起ヲ尋ルニ尊氏將軍ノ七代目ノ將軍義政公ノ天下ノ成敗ヲ有道ノ管領ニ不任只御臺所或ハ香樹院或ハ春日局ナト云理非ヲモ不辨公事政道モ不三知給レハ云々

應仁略記云花見の御幸と聞へしは保安第五の衣更着と歌ひ出す一座の興宴公方御氣色其頃の褒美天下の沙汰此事なりき深更にいたつて還御翌日御禮并御臺様御成時に幸壽院殿御今參り大御乳の人以下御雜掌として三日三夜の御會一事違亂なく調り畢

親長卿記云文明六年十月三日室町殿御臺等御出鹿苑寺紅葉御覽云々
又云文明十七年正月十日早旦參賀東山殿申尅許參室

相州兵亂記云氏綱ニ最愛ノ女アリ容顏美麗ニシテ楊貴妃李夫人トモ云ツヘシト沙汰シケレハ古河ノ公方左馬頭高基御家督ノ晴氏ノ御臺所ニ成申サントテ此旨被仰下云

勢州四家記云林與五郎神戸へ發向し小島兵部少輔と戦ふ神戸友盛信雄朝臣の味方となり林與五郎を撃とし神戸五郎と號す信孝の御臺は五郎内室となりぬ
伊達日記云六日之晚輝宗公政宗公之御陣屋へ御出御臺所へ家老衆被召寄義繼御佗言ノ様子御相談被成候云々

又云名生ノ城ハ義隆新田へ御越以來明所ニ成候ヲ義隆ノ御臺ト御子正三郎殿御袋ニ御東ト申御方二人ヲハ人質ニ名生ノ城ニ押込置云々

十河物語云阿波國ニ屋形アリ細川三周公ト申ヲ三好實休生害サセマキラセ實休則阿州ノ惣主トナレリ屋形ニハ御子一人モナカリキ借屋形ノ御臺ヲ實休妻ニナシ此腹ニ若君只一人出來レリ長治ト申此母公ハ屋形三周之御臺タルユヘニヤ長治ヲ實休屋形ト號シ寵置タリ
松原自休手録云若狹羽林ハ公ノ依爲綠者被加伏見城代一敵未幾來以前ニ諸將恨隔心色出奔洛下守政所亭秀吉公後歸若州云々

○大御臺所

東武實錄云寛永三年九月江戸ニ於テ大御臺所ノ御方御達例危急ノ由松平半四郎重則洛ニ馳來テ注進ス是ニヨツテ將軍家急ニ還御アルヘキノ由ニテ淀ノ城ヲ出御云々

○上御臺

建内記云嘉吉元年十月二十三日丙辰室町殿八歳自細川左京大夫持之朝臣宿所今日酉刻御移徙室町御第一也(中略)普廣院殿御後室一位殿即御前御黒衣内府公雅女左衛門督實雅御妹也奉號上御臺又奉號上樓今日午刻御移徙新造御寺也

○新御臺

阿州將奇記云尊氏公より十代京都の公方義植公の長男平島の先祖なり永正六年京都にて生る母は細川讃岐守成元の女天文三年都より阿波國へ下向して那東郡平島庄に居住す天正元年十月八日平島にて卒同所西光寺に葬る年六十五歳法名中山義冬都より阿波國へ下向之趣は將軍よし植公の御臺を清雲院殿と申き阿波國前細川讃岐守成元の息女義冬の母なりしかるにこの清雲院殿ふと狂亂のやうに有之てよりよし植公不和になりたまふそれゆへ子息義冬をすこしも寵愛なく剩公家より御臺をむかへたまふ清雲院殿も義冬もあさましき有さまにておはしましけり

それにより新御臺義冬の事を様々説言し給ふ故父子の間いよく不和になりたまふにつき義植世を義高か義晴へ御讓可有との御内存なりこれ皆新御臺に近き一門なる故なり云々

○尼御臺所

吾妻鏡云正治元年七月六日丙申今日姫君御佛事於墳墓堂被修之尼御臺所渡御導師宰相阿闍梨尊曉云々又云正治元年八月十九日己卯有讒佞之族依妾女事景盛貽怨恨之由訴申之仍召聚小笠原彌太郎和田三郎比企三郎中野五郎細野以下軍士等於石御臺可誅景盛之由有沙汰及晚小笠原揚旗赴藤九郎入道逆西之甘繩宅至此時鎌倉中壯士等爭鋒競集依之尼御臺所俄以渡御于盛長宅以行光爲御使被申羽林云幕下薨御之後不歷幾程姫君又早世悲歎非一人之處今被好闘戰是亂世之源也就中景盛有共寄先人殊令憐愍給今聞罪科給者我早可尋成敗不事問被加誅戮者定令招後悔給歟若猶可被追討者我先可中其箭云々又云建仁二年三月十五日庚申今日御鞠及終日員百廿三百廿百廿二百四十二百五十也其後尼御臺所入御左金

○御所

吾御所召舞女微妙覽其藝是依令感戀父之志給也藝能頗拔群之間爲尋被父存亡被遣使者於奥州云々飛脚歸參程者可候尼御臺所御亭之由被仰仍還御之時爲御共

吾妻鏡云寛喜二年十二月九日丙寅亥尅竹御所御入御于營中是御嫁娶之儀也又云文應元年十二月二十六日己未今夜將軍家御方違于相模太郎殿御亭中御所御同車云々

承久軍物語云かまくらには三代將軍の跡たえしよくをつくへき君たちもましまさねはあまみたい所しはらくせいたうをさこしめしけり

○御臺代

藤葉榮衰記云圖書亮御一門御宿老中へ左近カ申旨具ニ語リケレハ各聞給ヒテ此儀尤可然治部大輔方御一家ナレハ此姫君ヲ爲氏公ノ御臺代ニ奉居テモ俗姓ヲ下ヘキ非仁トテ此殿ニテ御縁邊定マリケレ

○夫人

臥雲日件録云寛正四年五月七日午後清三位來尋(中略)又話數日前就管領宅談貞觀政要先代時頼朝夫人二位尼行天下政

又云文明二年三月廿六日薰一曰鎌倉兵衛佐夫人父法條四

郎時政頼朝三十九起義兵五十八而卒之女也壽百二十歳

豆相記云北條氏盛姉爲今川義忠夫人義元妹爲氏康室

故今川北條世結婚親而久爲親戚

御事始記云正月十一日御所様何も御參三獻參御宮仕は女房衆手長は御供衆伊勢一同伊勢六郎左衛門伊勢又七伊勢又次郎也

年中定例記云御祝はて、朝供御參候赤金にてうちたる鉢に入候て日に三鉢つ、兩御所様へ參候若君様御座候へはそれも同前に參候

又云八の時分御こはくごとて參候御臺様へも同時に參候御所御方御座候へは同前御手長の女中御中臈紅の御袴金襴のむねのまもりを御かけ候をり物いつれもめされ候

走衆故實云御供衆かちにて打こみに被參候時もむかしは走衆の供衆の跡にて候つると存候近年は左様には候はず候これ御こしかきの三郎右衛門も左様に申候事候越中にて島御所様吉見殿へ御成候その時もうちこみよくかちにて候つる由儀申候自殿中彼亭へは十町餘候つる御供衆かちにて候ま、走衆もかへしも、たちをとらすさけ太刀にて候つる由候云々

中原高忠軍陣聞書云安はひ五本の時はこふ五切れ勝くり七たるへしあはひ五本は御本意を達せらると云こ、ろなり又蛇三本のときはこふ三かち栗五たるへし御所様御祝ひにはあはひ二本なり日本を打蛇といふことの心や又大將の御看一人はかりならてはか様にはあるましきなり何時も蛇こふかち栗三色たるへきなり但時として着なき時はかうのものからしかつをなとも出すや着三色の二色二いろなきときは此いろくまさてもくむなり俄事にて此色々なき時は此内一色にてもつくるや

又云御させなく申事御所様の御具足ならては申そえまじきや公方様の御小袖これ御させなかの本や此御させなか毛は糸や此いろ卯花おとしと申や卯花おとしはかつ色の事なりかつ色とは田原の事なりいろいとにていろへた

亭之後雖臨昏黒不退出舍人男怪此事引彼乘馬歸宅告事由於弟五郎六郎等而可奉追討遠州之由將軍家被仰合忠常事令漏脱之間已被罪科之由彼輩加推量忽爲果其憤欲參江間殿々々々折節被候大御所幕下將軍御座時尼御座所御坐仍五郎以下輩奔參發矢江馬殿令御家人等防禦給云々

花營三代記云應永廿八年正月二日大御所様御臺様方御所様管領へ細川右京大夫入道親御成康富記云寶徳元年八月九日下是日大御所瑞春院殿薨給故普廣院殿御嫡妻從二位藤原尹子也嘉吉元年普廣院殿薨去之後有御出家著禪衣給三條帥大納言殿御妹也嚴助僧正往年記云天文十六年七月廿九日細川晴元坂本へ御禮ニ被參御方御所様御對面在之云々六角少弼祇候御能在之云々大御所様無御對面云々

るなり

○守殿

太平記云龜壽殿令盛高モ目クレ心消々ト成シカ共思切ラテ落信濃條ハ叶マシト思ヒテ聲イラ、ケ色ヲ損テ御局ヲ奉ノ院武士ノ家ニ生レンシ人様ノ中ヨリ懸ル事可有ト思召レヌコソウタテケレ大殿ノサコソ待思召候覽早御渡候テ守殿ノ御供申サセ給ヘト云儘走懸リ龜壽殿ヲ抱取テ鏡ノ上ニ昇負テ門ヨリ外へ走出レハ云々

又云鹽飽入道鹽飽新左衛門入道聖遠ハ嫡子三郎左衛門忠頼ヲ呼諸方ノ攻口悉破御一門達大略腹切セ給フト聞ケレハ入道モ守殿ニ先立進ラセテ其忠義ヲ知ラ奉ラント思也云々

又云長時次郎高重最後合戦條懸ル處ニ二郎等共馬ノ前ニ馳塞テ何ナルコトニテ候ソ御一所コソ加様ニ馳廻坐セ敵ハ大勢ニテ早谷々ニ亂入火ヲ懸物ヲ亂妨候急御歸候テ守殿ノ御自害ヲモ申進サセ給ヘト云ヒケレハ高重郎等ニ向テ宜ケルハ云云

○大御所

吾妻鏡云建仁元年九月六日辛未及晩遠州召仁田四郎忠常於名越亭是爲被行能員追討之賞也而忠常參入御

武家名目抄稿第七十一册

塙檢校保己一編

稱呼部 廿一下

○上様

判官物語云五ツにならせ給ふわか君御めのといたさまいらせたる所へふとまいりたりけるにかねふさ何とて御たちには御きやうをはあそはさぬとそ有ければとかく御返事申ためらひて有けるに判官の御そはにいたらせ給ひて御さぬひきのけて御覽しけるか手おひのすかたと御らんして北のかたのきぬひきのけんとし給へはかねふさせいし奉れば御くしのすそすこし出て見えさせ給ひけるにとりつき給ひていかにやとひきうこかしたてまつりまきりに御かほを御覽せんとし給ふをかねふさいたきとりまいらせひさにすへ奉りて御たちもかみさまもしての山と申道をこゑさせ給ひてくはうせんのはるかのさかひにおはしましぬるなりわきみもた、いまいらせ給はんするなりと申ければ云々

花營三代記云應永廿八年辛丑正月十九日御所様上様御方北

野殿江御成有

建内記云永享二年二月一日早旦參室町殿依朔日也

有御對面伊勢備中守申次也女中御叙品事去月廿八日

女叙位之次有其沙汰開書大外記師世朝臣今日持參者

也昨日依室町殿御喪日也左兵衛權佐永豐朝臣於殿上

簀子取次之中門廊今日有松為見物被懸直翠簾之間外

記不臨彼所歟今日之儀新中納言直事由云々聞書

留御所蓋入金一裸被返下云々使祿自女中中被出

之云々上召使宗岡行繼相副外記所參候也小袖一重

賜之云々攝政以見物之次被賀申彼御叙品事新中納

言申入此事次永豐朝臣祇候之面々有御對面(中略)予勸

黃飛亞相等參大方殿御臺御方等賀申入之御叙品并朔

日御慶相兼之也三日參室町殿賀申入上様御叙品珍重

之由則有御對面勸修寺中納言新藤中納言中御門宰相山

科宰相資益等同參之御臺御位記得選今日持參室町殿也

去月廿八日女叙位翌日室町殿御喪日朔日得選出立不周

備昨日例日也仍今日可持參云々左兵衛權佐永豐朝臣

於中門廊(公卿座)取之入(同妻戶)就(公卿座內)東妻戶

簾下進之女房兼座(簾中)取之被持參御前云々

又云嘉吉元年十月廿二日下云普廣院殿御後室(一位殿尼方御前御衣箱內)

府公雅女左衛門督實雅公妹也奉今日午刻御移徙新造御寺(北小路)以四也

後崇光院御記云永享三年六月五日抑室町殿上臈局上様と

可申云々(御座之儀)仍去一日公家武家諸大名群參面々打紙料

定進云々

蟻川親元記云寬正六年七月十七日(壬戌)上様石山寺(本尊自吉)

御參詣女中御衆悉御はり與也

御產所日記云寬正七年十二月廿三日御若君様御袋上様御

產所細川刑部少輔殿御誕生若君様安藝刑部少輔被下御

太刀一文字御馬一疋月毛

長祿二年以來申次記云正月朔日(中略)上様へ御禮事五ヶ

日の内にて三度(朔日七日)申次之事(中略)おんかたへ伺公仕

候得は各被參つると申入也雖小路をへたて、各別に

御座候時は上様の御供衆申次の勤申之也管領一人は上

様御前へ被參て御盃頂戴在之御酌は上らうの御方云々

其外は上の御末にて頂戴の御酌は中臈にて御入候也

又云管領へ年始の御成始在之(中略)先上様渡御成て少

逗留候て頓て御前様御成候や兩御所の御供衆何も裏打也

走衆は素襖也

齋藤親基記云應仁元年三月十一日日野内大臣勝光云(去七)

日拜賀在之御所并上様御臺於土御門室町御見物立車

年中恒例記云御す、はき在之於内儀御祝參也常の御

所御會所御殿以下は御會所の同朋仕之上様御在所は御

末の同朋御末は御末男衆并御末同朋仕也

慈照院殿年中行事云正月四日御所様江今日式日ニテ出仕

ノ面々上様江爲御禮伺公於御對面所拜賀之畢而於

小侍所一人充春日御局ニ參會述慶詞ヲ云々(春日御局ハ御

ナリ上様へノ御禮ニテ候間上様ノ中臈頭可出席處至子今如此云)

澤巽阿彌覺書云此兩案の文書は御文章等可有御讀候こ

の文體在之細川家書札方貞親へ御談合世上の御一卷わ

たくし留所持して候を空齋様の御明かし上申候いかにも

くろさほうごのうらに書申候御らん有へさよし仰候間ま

への大さうしのおくに只今のこく料紙あまり申候間御

筆に寫候事は御なくさみにと申上候しかればほとなく御

死去にて候つるま、その淵底をかみさま御存知の事候間

お妙ゆう尼まで本の事申上候なと哉らん御申候ま、かみ

さま、て御すきなされ候ま、打置申候只今は書札方は不

入事に候得其古法と望候者も候はんか又露命不存候間

若後に御らん候は、さためてうせは申ましく儀御物のう

ちに御座候か

世鏡抄云門跡之徘徊禮儀之事先ッ御院主ハ忝モ王孫之外

ニハ不用之王孫ニテ御座ス故萬事如内裡ノ御院主ハ諸

偏如出家法儀但魚計ヲハ下旬十五日ハ可被召之歟御

心ノ任ナルヘシ上ミ様ハ一向御后ノ如ク御髮ワケヌ袴メ

サス丸帶不結ハ不歩板不踏土不乘馬假ニモ徒ニテ

不行人ニ不見ノ詩歌管絃ヲ心カケ文道ヲ可嗜也

高國記云常桓ハ紺屋ニ忍テオハシケルヲコンカキ奇得ノ

男ニテアイカメヲウフケ其中ニカクシ奉ル三好衆殘ル處

ナクサカシケレトモ不見(中略)カメヲノケテミレハ右

京大夫入道也則六月八日寅刻尼崎大物ノ廣徳寺ニテ生害

シ奉ル其ノ時行水アリテ心靜ニ御經讀誦シテ硯ヲメサレ

短冊四五枚アンハシケル院御所様江無トイヒ又有トイフ

言ノ葉ヤ法ノ眞ノ心ナルラン伊勢國司江犬追物今一度ト

思コシ荒増ハ唯タイタツラニコソ御上様江繪ニ移シ石ヲ

作リシ海山ヲ後世マテモカレソミン(下略)

一柳譜云小川土佐守内稻葉清六ト申者石田治部少廻文ヲ

持木會川ミツヤノ渡リ船留ト申所ヲ忍越候而黒田へ參一

柳三郎左衛門同名九郎兵衛兩人ニ頼治部少口上之趣申上

候(中略)又清六右兩人以申上候ハ御合點不被成候ハ、

御袋様シャウリン様御上様御子孫達三人トモ二人人質ニ

取則敵濃州ミツヤノ渡堤上ニサラン可申相定候付土佐
守左馬介父子共ニ右之段迷惑千萬御笑止ニ存被申候儀ニ
御座候間可然御返事被成下候様ニト達而清六申上候
ヘハ事之外御氣色遠監物様被成御意候ハ母妻子共ニ
ミツヤノ堤ニテ火アフリニ治部少仕候ハ、見物ニ可罷
出候條其旨治部少并土佐守父子ニ申聞候ヘ重而清六參
候ハ、首ヲハネ可申候トテ右之通文ヲハ御請取被成即
時ニ井伊侍從殿迄御上ケ被成候事

○若上様

蜷川親元記云文明十七年十一月十日若上様日野左大臣勝光公御息女御
着帶御帶要脚事政所沙汰なり

○大上様

蜷川親俊記云天文十一年十一月廿四日庚午大上様は里へ
御出之就護法印一周忌

季瓊日録云長祿二年十月廿五日東福寺内大音菴濃州半濟
還附御判之事自大上様被白被付于飯尾左衛門大夫也
十一月廿九日越前國龍澤寺御祈願寺之事自大上様被白
○大方殿

吉口傳云太奏政右衛門權佐入道相語ニハ伊豆國ヲ故大納
言殿令知行給此時北條四郎時政爲在願有奇怪事國

司被召籠仍其時故大納言殿行迹以下時政悉甘心申ケリ
仍右幕下朝に語申之間賢人ユ、シキ人ト相存シテ契申ケ
リ重泰祇候申云先年爲御使下向關東之時大方禪尼申
ケルハ前大將之時舊好皆令存知事なり大將出世之時天
下諸人面々媚承候而此大納言一人一切無承旨仍若平家
一體之仁歎ナト相存之處無其儀之間賢人ト存シ殊契申
ソト承候キト申也

伯耆之卷云基長宜ひけるにはか様に思召切せ給を承候へ
は返々も心安く存知候船上に御登候共何程の事か候へき
只思食切候はん事可然御事にて候と宜ひけり(中略)船
上山へ可馳來事思定たる事なれとも人の心を引見むと
や被思けん早々足弱共おもひくにつちへとも落行
て身を扶り命を續と宜ひければ義高の妻基長の妻を始と
して其外の女房思々の最後の出立仕給て大方殿に集居て
宜ひけるは皆落行と仰候こそ返々もうらめしく候へ大方
殿は自害して火に入せ可給由仰候自共はふかくなるも
のとおもひ給か只兎も角も大方殿と一所にて露と消な
ん命の争惜候へき早々害し給てあらはかなの仰かなと
爲思切氣色也

又云爰に基長嫡子土用松とて生年三歳になる男子あり長

高我館奈和へ使者を立て宜ひけるは我勅定を承て船上山
に楯籠日本國を敵に請て本望を達せん事不定也腹を切
ん事は一定なるへし然し土用松は嫡子なれば館に留置敵
の手に懸ん事口惜かるへし急船上山へ可登自然の事あ
らはさし殺し尋常なる可自害由申遣りたりければ少輔
の局と申ける乳母一人相具して船上山へ登らんとす土用
松の母乳母に宜ひけるは大方殿内何右親長女長高妻女義馬基長母儀なり何にも成
せおはしまさは一所にて兎も角も成むと思切ては候へと
も若一人はなし候て船上山へ登らん事心憂こそ候へとて
涙を流し給ひける

貞治四年祇園三鳥居建立記云五月四日大方殿二品今日他
界十

建内記云應永卅五年五月六日御八講結願下云大方殿院
於南簾中令聽聞畢

又云正長元年五月六日丁巳早旦着束帶參入講堂如昨
結願也(中略)上卿已下面々於御聽聞所前踰居如先例
雖無御聽聞猶有此儀近例也一品禪尼大方殿院
於南簾中令聽聞給

御産所日記云嘉吉元年十月廿五日御姫君御誕生御袋大方
殿様御産所叔井

薩戒記云嘉吉二年七月廿三日辛巳天晴入道右少辨重政
送使者云近日稱大方殿使方々口入事觸耳太不可
然或知給或不不知給事多之祇候女房任雅意相訪侍
等申遣所々或遣奉書云々奇怪事也

觀音寺相公記云嘉吉二年十月廿二日自去十七日大方殿
被參籠嵯峨五大堂之間今日參彼所

康富記云嘉吉四年正月十日是日室町殿有渡御於管領島
山左衛門督入道宿所春日萬里小路當御代渡之初度也自島丸殿
小路御所也至管領宿所春日萬里小路諸大名被致警
固一者也御所様御乘車也(中略)御母堂大方殿同有御出

又云文安四年四月廿九日是日室町殿之大方殿本御堂之御
姉觀智院殿御比逝去給此間舊花御所ノ御北向有御座者
也室町殿之叔母也

又云文安四年六月五日乙亥今曉局務令立寄給被示云
只今宣下事可有之由被相觸兩人之間可構參之由也
可爲關白宣下云々近衛殿會無御上表之沙汰雖然大
相國先度永享不及御拜賀攝政令辭給候間御再任事強
被申之仍無御辭退可有之由就室町殿大方

殿内々被申候故自大方殿室町殿有御執奏云々

稱呼部 廿一下

又云文安六年四月十九日室町殿御元服之參賀也先諸大名近習五番外様進上御太刀懸御目(中略)其後女中大方殿御禮春日局被出座上下稱見參退出了

又云寶德二年五月二日室町殿大方殿自嵯峨五大尊有御出京御本復之故云々

又云寶德三年九月廿七日壬戌管領令談合細川京兆同讚州畠山大夫山名一色京極已上御相伴衆等大方殿御述懐之趣以三寶院准后被申入公方了所詮御新參御局號上鷹大者洛中箱殿親類也之棲不可叶又尾張守護代所望之職由事可被返遣干代德殿之由此兩條也云々

又云享德四年正月十日參賀室町殿直垂大口也御西向衆一條准后當關白近衛右大將殿以下濟々有御參(中略)於御來向大方殿御方御禮申入了如列式女房達御出座也

季瓊日錄云長祿三年五月十二日御大方樣於釋迦堂有御參籠而明日有御歸洛故公方樣有御成也

又云寬正二年九月廿四日奉報等持寺御成南禪寺芝玉軒末寺江州朝妻庄神鄉眞門寺並寺領自去文安四年初井押領事以自大方殿樣之御狀伺之待眞宗禪院主良俊白之命飯尾新左衛門也

中納言能親稱女御著帶也

又云寬元元年正月五日壬午御臺所乙若君各御入御前右馬權頭亭若君并御母儀號二棟御御若狹前司家是皆御行始之儀也

又云建長四年七月八日庚寅申刻將軍家爲御方達入御于右兵衛督教定朝臣泉谷亭御出行列云々次女房與東御方一條局別當局以上昇連之

日吉社室町殿參詣記云應永元年九月十一日中室町殿准三后從一位前左大臣征夷大將軍源義滿公辰上刻出御(中略)女中大方寢殿御方杉生房御座

花營二代記云應永卅年五月三日畠山中務少輔自去月十八日等持寺來七日等持寺被召御方番衆御所北兩小門中宿直スヘキ由被仰下也番帳アリ

御產所日記云永享五年七月廿四日御姬君御袋西御方洞院御息女御產所所和

又云永享六年二月九日寅刻天晴風靜也初夜御祝政所沙汰御引出物沼田調進御袋御方練貫一重引合十帖上薦練貫一重引合十帖御乳人練貫一

季瓊日錄云長享三年四月廿六日上様可有御成御方御所樣者廿七日可有御燒香云々御方御禮衆細川彦九郎殿

嵯川親元記云文明五年七月廿五日乙卯大方殿より被仰三代集返遣云々

下總國本土寺過去帳云妙勝善尼彌富大方明應人已未六月又云妙一尼長祿二十月常州山田殿大方

又云理田尼岩淵三戸殿大方

又云壽永尼市河大方二月

又云妙張比丘戸張大方殿

家忠日記抄云天正十七年二月廿六日御大方樣御煩ニ付御上洛延申候

增補家忠日記云慶長四年十月五日去ル申年松平三郎四郎定勝カ三男三郎四郎定綱ヲ以テ荒川カ養子トス然リト雖モ荒川カ家臣等志ヲ一ニシテ荒川カ氏族ヲシテ其家ヲ嗣シメント

認ル于時母公御大方去年ヨリ家督ヲ堅ク約スル之間三郎四郎ヲシテ荒川カ遺跡ヲ繼カシムヘキノ旨頻リニ憤リ給フ

○御方
吾妻鏡云建保元年五月三日癸卯義盛重擬被御所(中略)御方兵由利中八郎維久於若宮大路射三浦之輩其箭註姓名古郡左衛門尉保忠郎從兩三輩中此箭云々

又云延應元年八月八日乙巳午刻二棟御方將軍家御禮衆大宮殿大納言定能稱孫

同淡路次郎殿東山殿衆十人計同參

○東御方
吾妻鏡云文應元年二月廿一日戊子戌尅御息所入御先寄御輿於東御亭相模大檜皮寢殿妻戸東御方被參(中略)扈從相州雜色二人著直垂武州同相武藏前司朝直雜色二人著直垂尾張前司時章左近大夫將監義政同已上相模太郎殿雜色二人著直垂相模四郎同云々

又云建長四年七月八日庚寅將軍家爲御方達入御于右兵衛督教定朝臣泉谷亭日來御出行列(中略)次女房與東御方一條局別當局以上昇連之各侍二人直垂立鳥帽子扈從云々

○北方
太平記云醫師足利左兵衛督ノ北方相勞ル事有テ和氣丹波ノ兩流ノ博士本道外科一代ノ名醫數十人被招請テ脈ヲ取ラセ

結城戰場物語云殊にあはれをとめしは御臺所にそとめたり永安寺の大塔にふかくしのひてましますをいかなるものか申けん火をかけむなしくなり給ふ諸大名のきたの方女房たちけふりにむせひて死もあり其外海底のみくつと成も有にけり

室町殿日記云大内義隆九州遠發の條義隆いづれも人質をとりかため國

の制法た、しくして防州に歸陣し給ひをのく休息あつて不起貨時として今度戦功の證にそれく被行勳賞にける(中略)角て義隆に北方もいまたましまさされはやかて持明院入道殿一忍軒の姫君十五にならせ給ひけるをむかへ給ひて御ひとま申て歸國し給ひける

毛利家記云輝元卿北ノ御方ハ穴戸安藝守隆家ノ息女也此御舎兄穴戸元家ニ男六人在レ之五番目ノ子吉内トテ愛ラシキ少人有是ハ北ノ御方ノ甥ナリシ故常々呼サセ給ヒ御傍ニヲカサセ玉ヒテサナカラ實子ノ如ク御ソタテ有云々

賀越園諍記云越前國朝倉義景志學ノ頃ヨリ越前ヲ所持シ玉ヘルカ文武ニ意ヲイレテ其頃名ヲ得タル里瑞軒ト云文者ヲ持助シテ螢雪ノ學ヲ專ニナサレケル(中略)北ノ御方ハ細川右京兆ノ息女ニテヲワシマセシカ女子一人生レ玉ヒテ早世アリ

義殘後覺云於和州在代和州上總郡ニ伊勢福殿トテ世舉テ詣スルコトアリ(中略)爰ニ備前ノ中納言殿ノ北ノ御方例ナラスナヤミ給フ程ニ御局聞及ヒ給ヒテ騎馬乗物ヲ續ケテ伊美敷シテ参リ給云々

播州佐用軍記云十二月十八日太政館屋形ニ至リ簾中ニ入北ノ方約束ノ如ク今ハ是マテ候ト云モ不果幼稚ノ姫二人

又云鹽治御サノミ度重ナラハコソ安濃カ浦ニ引網ノ人目ニ餘ル憚リモ候ハメ篠ノ小サ、ノ一節モ露カ、ル事有トモ誰カ思寄リ候ヘキト様々書クトキ聞ユレトモ北ノ臺ハ事外ナル事哉ト計リ打ワヒテ少モ寄ヘキ言ノ葉モナシ

○御北向
花營三代記云應安七年六月十五日北向殿御出清水御母比爲被着御母大衣云々同夜北向殿御歸御所云々

時房公記云嘉吉元年七月六日庚子卯剋普廣院殿御葬禮也於等持院殿先例有此事若公皆無御出御少年之故云々

北向方若君御母儀依御懷妊無御出此事懷妊相憚之由有世説如何之由一昨日中山參會之時相尋之誠有其謂之趣也

建内記云嘉吉元年十月廿三日丙辰今夜北向御方普廣院殿御品重是卿二女御産也御移徙以後御義分也御産所初并許姫君平安御誕生珍重々々

御産所日記云永享十二年庚申八月十七日若君御誕生御袋御北向様御産所御南向様
又云五夜御祝自管領御引出物以安富紀四郎御進上一重被下練貫上様御引物練貫五貫引合十帖御袋御方様

乳人抱テ在ケルヲ通計寄リ奪取テ頓テ刺殺タリ北ノ方ハ少モ臆セス不便ニモ今ハ心安モ侍ト守刀ヲ拔心許ニ刺立内伏給フ政範通計寄留ヲ整三人ノ死骸ニ袖引被眞嶋廣澤ヲ召サル于時件ノ乳人ノ女房モ自害セシ程ニ眞嶋廣澤ヲ整其ヨリ三人ノ死骸ヲハ眞嶋廣澤ヲ仰テ朱ノ唐櫃ニ納タリ

伊達日記云相馬義胤築山ニ御座候間其内彌田村衆被申合御北様へ御内談ト相見ニ候云々

又云天正十四年霜月清顯公御遠行以來三春ノ城ニ御北様被成御座候萬事ノ差引田村月齋同梅雪同右衛門大夫橋本刑部少此四人ニ候

初井日記云御上米上ノ御弟二階堂伊豆守秀香公ト申ハ手荒キ御大將ニテ武道第一ノ御吟味ノミナサレ候ハ諸人恐レヲナシ申候御女子二人ノ内一人ハ同國穗壺ノ城主赤井惡左衛門尉景遠カ室ニテ候一人ハ播州ノ大將別所小三郎長治ノ北ノ方也

○北臺
太平記云安東入道安東左衛門入道聖秀ト申セシハ新田義貞ノ北臺ノ伯父成シカハ彼女房義貞ノ狀ニ我文ノ書副ヲ偷ニ聖秀カ方ヘソ被遺ケル

練貫二重引合十帖其時御袋ハ御北向御コトナリ

姥川親元記云文明十七年九月三日辛亥御北向御方左兵衛佐母より貴殿へ折五合柳五荷被進之

惟任征伐記云惟任者鎮洛中勝龍寺殘置明智勝兵衛其日午時至坂本城安土山開此由始宿直番衆至前夫人後夫人北向西對東南局ニ妾古後達奴婢雜人歩跳而散々北走

武家名目抄稿第七十二册

塙檢校保己一編

稱呼部 廿二上

○御簾中

快元僧都記云天文九年十月廿一日己酉天晴風靜寅一點雨御殿司社務代等出仕奉移已刻赤橋際迄行幸於下宮神樂相撲神馬太刀以下從太守進獻未刻經供養行之三光出現天花降云々簾中方東棧敷也

大友記云義鑑公御左馬頭從三位義鑑入道宗玄公ソノカミ左近將監能直公ヨリ十七代目ニテワタラセ給フシカルニ義鑑公御子三人マシマシ候ニ惣領ノ義鎮公ニハ御代ヲユツラセタマハス後ノ御簾中ノ御腹ニ到明子殿トテ御末子ノ御曹司ニ御代ヲユツラント思メシ義鎮公ニハ常ノ御對面モナク到明子殿御本意不淺高キモ賤キモ繼子繼母ノ中程ウタテシキ事ノナキ義鎮公ヲウシナイマイラセ到明子殿ヲ代ニ立テマツラン御簾中日夜ニ御胸ヲクルシメ給ヒ家老ノ入田丹後守親誠ヲ頼タマフ

大友興廢記云蒲池人質蒲池か娘は紹雲受取筑後の柳川にお

きて後に宗麟公の御孫義乘公の御簾中の一の臺に成て豊後にあり

安土日記云十二月廿四日ニ右府ヨリ新府今城へ四郎勝頼之簾中一門移徙之砌ハ鍔ニ金銀ニ與車馬鞍美々敷云々

○大御簾中

大友義統教訓之書云大御簾中休庵様へ御隔心之事勿論なからねたみ事は女のいふ法なれば苦しからず乍去ぬたとの御料人にておはしませ眞に社人の子や然を休庵情深くて御寵愛と有利御子歴々の御中なれば會者定離の理により二世の御契やさりともしわか進退を願みて心にかげ給はぬこそ賢女たるへけれ結句せは々々しく怪氣なとらて御等閑ハさもあれ下臈のわさなるへしか、りければ休庵様の二妻狂ひも世に珍敷様にある事是偏に大御簾中の御心底せはき故也

○御上

滿濟准后記云應永卅五年二月十五日於三條御所ニ爲上御方御祈如意寺准后進大法勤仕

簾中記云くわんれいの御うへは御所へ御參候へは御なかかしらこし御よせ候

○御前

室町殿日記云御前様御召料おしてゆり飯尾家御成記云日野殿光聚院殿各御前御伺候云々諸大名御成申入記云寢殿へ御座候間は御相伴衆の方々面

向のかけの座敷に御入候て伊勢守案内申とき於御會所御前へ伺候也

清須分限帳云千石御前様千七百五十一石岡崎殿三百四十三石おかめ殿二百二十七石勝原後室二百石小笠原古和泉守女房

又云三千五百三十一石御前方

里見九代記云正木は一門の事なれば替心はなければとも萬喜はるん者の一へんにて義美公の御前も死去被成問たかひに心をうたかひてよしみうとく成にけり

又云或は二番座の御前も有へければ異本にあるも實成へし

三好亭御成記云御能始申儀貞孝舞臺を通樂屋へ入罷出よと被申則はしまり申候也此時御能あかり申紙につ、みたるおもしろしを御供衆御取あり御能あけ被申引合をた、みてかねてより置て御妻戸と六間北一間を御能あけ不申也庭上には日吉大夫嵐太夫元阿彌冬阿彌甫阿彌御能以前には御前へ向申御能始て舞臺へ向申候也

稱呼部 廿二上

千四百五十九

赤松記云才松との御元服有赤松次郎義時と申後には兵部丞殿と申くわうのん殿とは此御事也(中略)扱次郎殿御若年により御國の御成敗は御前様めし様御はからひにて何事も御印判にて被仰付候云々

荒木略記云多田に鹽川伯耆守是は滿仲の子孫と申傳へ候それ故伊丹兵庫頭妹の腹に娘二人御座候一人は信長公嫡子城之助殿の御前一人は池田三左衛門殿の兄池田庄九郎室にて御座候池田出羽守繼母にて御座候後に城之助殿御前は一條殿北の政所庄九郎後家は一條殿の政所に被成申候

甲陽軍鑑云義信公も三十五の御歳永祿十丁卯年御自害候病死とも申也又駿河氏眞公へ其年の暮に義信の御前方送給ふ此御前は今川義元公の御息女氏眞公の御妹也

家忠日記抄云天正十六年六月廿二日大坂大政所御煩以の外由にて家康様御上洛の由申來御前様は夜通御上被成候

當代記云慶長十三年十月十日此淺野彈正妻子江戸へ被引越江戸内藤修理霍亂相煩即十日ニ滅ス是ハ將軍家幼少ノ時奉付此間ハ將軍ノ御前方被付之ケルカ俄ニ如此

松平記云氏眞之御前は氏政の姉にて御座候大に腹をたち小田原に有合候普代衆をあつめ早川より舟を出し白晝に小田原を除き遠江國へのほり家康をさのみ給ふ

○若君御前

吾妻鏡云延應元年十二月十三日戊申若君御前御行始之間事被_レ經_レ御沙汰_レ被_レ問_レ吉方_レ東若坤方吉之由維範朝臣申_レ之

又云仁治三年十一月廿一日甲辰今日將軍家若君御前御着袴魚味也未剋於_二棟御所南面簾中_一有_レ儀先魚味次御着袴任_レ承久佳例_レ前武州令_レ奉_レ結_レ御腰_レ給

又云仁治三年十二月廿一日甲戌將軍家若君御前御乘馬始也及_レ晚於_二小侍小庭_一有_レ此儀_レ前武州被_レ奉_レ扶_レ持_レ之_レ遠江守前右馬權頭以下數輩群_レ居庭上_二近江四郎左衛門尉氏信引_一立御馬_レ若狹前司泰村奉_レ抱_レ之_二小山五郎左衛門尉村抑_一御燈_二云々

又云寶治元年正月三日丁巳將軍家御行始入_二御于左親衛御亭_一若君御前渡_二御于毛利藏人大夫入道西阿家_一云々

又云建長三年正月一日壬戌今日將軍家并若君御前等有_二御行始之儀_一相州御第入御云々

○奥方

義光物語云照宗公も已に危見え給ふ所に譜第の郎等共返し合て防戦討死しければ其間に漸上の山惣堀迄引取給ひけるか、る所に照宗公の御奥方より輿にめされ上の山迄來り云々

矢島十二頭記云慶長九年辰三月矢島四十人之者之取斗にてお藤殿をは押岡長門守殿奥方様に差上候

○奥様

矢島十二頭記云五郎殿御男子二人御座候を與兵衛殿手討に被_レ成候五郎殿奥様は西馬音内殿息女にて御座候か女子のお鶴殿と二人一間に押入番を付置被_レ成播州口惜事におもひ奥様とお鶴殿を夜之間に盗みとり西馬音内へ落る

○内方
沙汰未練書云御内方トハ相模守殿御内奉公人事也
蜷川親元記云文明五年七月十二日壬寅生御玉御祝御内方悉一種一瓶進上の御一家少々め、武田殿女中様御出終夜一献あり奉公方衆少々同前

又云文明五年七月十四日甲辰今朝貴殿へ僧達請待園徳院殿_一廻御廻善也貴殿へ御内方衆燈呂進_レ之
下總國本土寺過去帳云妙契尼文明七年十一月三角殿内方

上り内室ニ可_レ申様ハ一男小法師九ハ屋形御供ニ殘置然ハ義就ノ御先途ヲ見申テ兎ニモ角ニモ可_レ成ナレハ頼ナシ云々
光源院殿御元服記云天文十五丙午歲御元服當日十二月十九日同廿二日(中略)於_二御簾中御臺所_一有_二御一獻_一如_二御座敷之次第_一御相伴北政所殿并定頼内室也
阿州將寄記云細川讃岐守持隆の内室は周防大内介の息女なり此内室の妹を持隆よひ越よし冬の御臺になすよし冬の行末の儀をもちたかおもひてかゆうに調たると也
勢州軍記云_{神戶名}此時神戶藏人友信者住_{澤城}謝曰我多病也全對_{信雄}無_{叛心}云々秀吉受_{納其降}而_有之後以_{林爲}神戶名跡_號神戶與五郎_以信孝後室_{改嫁}與五郎嫡子_{此内室者}彼藏人友信息女也
義光物語云むさんなるかな内藏之助内室は女房一人めし具して有在所へ深く忍て二歳に成ける忘かたみを膝に置明暮敷居たる

クリハシ
大友與廢記云能直の母はとねの大友四郎大夫經家の娘頼朝公の御つほねなりとね經家の内方親能の内方は兄弟也
甲陽軍鑑云織田信長より織田掃部助を便に被_レ成信玄公御料人御とし七歳に成給ふを承及信長嫡子城介内方に申請度むね被_レ仰越_二也

○内證
伊達日記云家康公政宗公御入魂ノ故カ政宗娘ヲ上總殿へ御取合被_レ成度由思召宗薫ヲ以御内證ニ候四人ノ大名衆被_レ聞召_二秀吉公御他界ノ砌五人ノ大名衆申合仕置可_レ仕由被_レ仰置_一候處各無_レ相談_レ縁初之儀覺悟ノ外由仰ラレ宗薫ヲ死罪ニ可_レ申付_一由_二候家康公政宗公左候ハ、御相手ニ可_レ罷成_一由仰ラレ候

○内室
吾妻鏡云承元四年三月廿二日庚戌相州室依_レ可_レ有_二熊野詣_一路次雜事等被_レ充_二地頭等_一云々
又云承元四年七月八日甲午金吾將軍室_號辻殿_號令_レ落傍_一給戒師莊殿房阿園梨云々

長祿寛正記云河内守國助八郎等ヲ近付テ汝ハ急而都へ落

松原自休手録云大坂西ノ丸内府ノ留主居佐野肥後ヲ追出シ輝元居_レ之佐野ハ無_レ爲方_二加_一伏見_二内府一味ノ諸大將ノ内室ヲ欲_レ入_二大坂本丸_一羽田越中守屋敷依_レ近_二城邊_一先攻_レ之_二盡_一言雖_レ理不_レ許_レ之_二已_一ニ發兵ヲ欲_レ捕_レ之_二依_一之内室

明智秀女 七月十七日自害云々

武蔭叢話云小田原北條氏直御内室は家康公御息女也小田原落城の時氏直肌の守を取出し此守は我等まで相傳高祖の守と稱せし也我既に流人となれり一家の中に浮世に殘り候輩へ渡し給り候へといひ置わかれ給ふ

又云北條丹後守相果候と聞上杉彌五郎先手にて景勝の館へ寄らる天正七年三月十八日鉸ヶ尾の城を攻落し三郎景虎切腹也景虎内室と子息道萬丸とて九歳に成けるを同道し此女は景勝姉也此子は景勝甥也かく言は謙信養父也命を助よと宣ひしかは上杉彌五郎是を景勝へ伺ひけれ共景勝承引なく霧澤と云ふ侍に申付憲政を打景虎内室道萬丸も生害し越後は景勝手に入る

増補家忠日記云廣忠君ハ元ヨリ今川家ノ助成ヲ受給ノ間義元ニ交親深シ故ニ信元ト中絶シ給フ廣忠君ノ室ハ信元カ妹也是ニ依テ廣忠君止ム事ヲ得スシテ御内室ヲ離別シ給フ

○室家

吾妻鏡云壽永元年十一月十日丁丑此間御寵女住于伏見冠者廣綱飯島家也而此事露顯御臺所殊令憤給是北條殿室家收御方密々令申之給故也

○内儀

義殘後覺云或人因問曰誠ニ原美濃殿ハ武篇ノ將トシテ近國他國迄モ聞ヘサセ給フカ内儀ニ付テハ萬ニ恐サセ給善事モ惡事モヒソヒソト恐給フコト心得カタシ誠ニ貴殿ハ昔ナラハ渡邊綱中古ナラハ鎮西八郎爲朝ト云トモ貴方ニハ勝ラシト申ニ何トテ女房ニ逢テハ心ノ疏クマシマヌト云々

松平記云天文十一年十二月廿六日家康をもうけて其後家康三歳の時御前をは廣忠さり給ふ其後廣忠米原と申者の女に目をかけ女子二人生成しける一人は荒川甲斐守との御内儀市場殿と申は是也

當代記云慶長十九年二月二日大久保相模守罪科已ニ定テ今日江州へ自京都下領ノ地也 是自駿府依ニ下知也 (中略)相模守養女ヲ三ヶ年以前山口但馬守男へ嫁此女ハ石川日向守孫女石川長門守息女也兩御所へ不奉得内儀事不届ノ由ノ給ヒ不快云々

○妻女

吾妻鏡云治承四年九月三日壬子可調進綿衣之由被仰豐島右馬允朝經之妻女云々

○女房

又云文治元年十月廿四日癸酉今日南御堂被遂三供養堂左右橋假屋左方二品御座右方御臺所并左典厩室家等御聽聞所也山本又有北條殿室并可然御家人等妻聽聞所

又云文治二年二月六日甲寅左典厩保歸洛相三伴室家姫君二人等去夜二品被遣御馬十疋以下餞物御臺所令進長絹三百疋於室家并姫君給又左典厩昇進事及同室家可爲禁裏御乳母一敷事二品所下令執申給也次爲御共被差進當參在國御家人等所謂岩原平三中村次郎比企藤次土肥彌太郎小揚土藤三横地太郎勝間三郎等也此外宿次兵士事兼日被定下云々

又云承久元年閏二月十九日壬子今日午朔入鎌倉著于右京權大夫義時朝臣大倉亭郭内南方此間 櫛新造屋其行列先女房各乘 爲難仕一人乳母二人御局右衛門督局一條局此外相別室又云寛元三年九月三日丙申寅武州室家卒去十五是宇都宮下野前司泰綱息女也

太平記云佐介貞 後條形見ノ刀ト貞俊カ最期ノ時著タリケル小袖トヲ持テ急鎌倉へ下彼女房ヲ尋出シ是ヲ與へケレハ妻室聞モアヘス只涙ノ床ニ臥沈テ悲ミ堪兼タル氣色ニ見ケル

吾妻鏡云文治五年八月十日丁酉今日於鎌倉御臺所以御所中女房數輩有鶴岡百度詣是奥州追討御祈精也又云建仁元年九月十日乙亥吹舉千幡君被奉立將軍之間有沙汰若君今日自尼御臺所渡御遠州御亭被用御與女房阿波局參同與江馬太郎殿三浦兵衛尉義村等候御與寄云々

又云正嘉元年十月一日壬午今日守其式西廊内儲御聽聞所三枚近習女房少々兼參候然而御息所未御座之間不及被出几帳帷東廊内構執權御聽聞所所々太平記云大塔宮條 野藤條内ヨリ恠シケナル下女一人出合ヒ是コソ可然佛神ノ御計ヒト覺テ是主ノ女房物怪ヲ病セ給ヒ候祈テタハセ給ランヤト申セハ云々

又云安東入道安東洞ヲ押ヘテ惘然タル處ニ新田殿ノ北ノ臺ノ御使トシテ薄様ニ書タル文ヲ捧タリ何事ソトテ披見レハ鎌倉ノ有様今ハサテトコソ承候へ何ニモシテ此方へ御出候へ此程ノ式ヲハ身ニ替テモ可申宥候ナント様々ニ書シタリ是ヲ見テ安東大ニ色ヲ損シテ申ケルハ梅檀ノ林ニ入者ハ不染衣自ラ香シトイヘリ武士ノ女房タル者ハケナケナル心ヲ一ツ持テコソ其家ヲモ繼子孫ノ名ヲモ露ス事ナレ云々

又云鹽治列傳不慮ノ事出来テ高貞忽ニ武藏守ノ師直カ爲ニ討レニケリ其宿意何事ソト尋レハ高貞多年相馴タリケル女房ヲ師直ニ思懸ラレテ無レ謂討レケルトソ聞エシ伯耆之卷云基長宜ひけるは加様に思食切せ給ひ承り候へは返々も心やすく存知候船上に御登候共何程の事か候へき只思食被レ切候はん事可レ然御事にて候と宜ひけり(中略)船上山へ可レ馳參事思定たる事なれとも人の心を引き見むとや被レ思けん早々足弱共おもひおもひにいつちへなりとも落行て身を扶り命を續と宜ひければ義高の妻女基長の妻を始として其外の女房思々の最後の出立仕給ひて大方殿に集居て宜ひけるは皆落行と仰候こそ返々もうらめしく候へ大方殿は自害して火に入せ可レ給由仰候自共はふかくなるものと思給は只とも角も大方殿と一所にて露と消なん命の争惜候へき早々害し給へあらはかなの仰かなと爲ニ思切ニ氣色也

明德記云山名ノ宮内少輔ノ兵共家喜九郎ヲ取籠テ終ニ討レケルコソムザンナレ(中略)九郎カ女房ノ方ヘ文ヲ遣シケル其中ニ鬢ノ髪一房卷籠テコソ遣シカト語ル時コソ女房ノ方ヘ鬢ノ髪ヲ形見ニ切テ遣シケルト思入タル討死トハ世ノ人申沙汰シケル云々

康富記云嘉吉四年正月十日是日室町殿有レ渡ニ御於管領島山左衛門督入道宿所春日萬里小路中略御所様御乗車也御母堂大方殿同有御出綱代御輿也御力者昇之女房達出車二兩云々

早雲寺殿廿一箇條云ゆふへには臺所中居の火の廻り我とみまはりかたかく申付其外類火の用心をくせになして毎夜申付へし女房は高きも賤も左様の心持なく家財衣裳を取ちらし由斷多きこと也人を召仕候共萬事を人に斗申付へきとおもはず我と手つからして様躰をしり後にはさするもよきことこゝろへきなり

室町殿日記云後長京都へ横目を遣條殿中に火かゝりてみやう火さかなればはちからなくはしり出て東おもての花園にかけ入て岩井の中へわか君いたき入にけり小きひしやう小侍従にしむき春日のつほねみなみのつほね丹後のまへ上らう女房十三人中居はしたにいたるまで八十はかりの女はうたちおのくうちへ飛いりてひとりものこらすうせにけり

御産所日記云自管領ニ御引出物以ニ安富紀四郎ニ御進上一重被下練貫上様御引出物練貫五重引合十帖(中略)御女房達三人各練貫一重檀紙十帖云々

又云御服衣ヌイ初申サル人ハ二親持タル女房七人ニテ御

服ヲヌイ初申サル、也其御針御服衣ニ副テ參也

宗吾大雙紙云人の女むかへの事色々申候へとも家々または人の程らいにもよる事なれば時宜不定たるへし先初日より二日まで男女ともに白色を着すへし三日めには色なをしとして色あるものを着候三日にあたる日男の方へ女房のかたより引出物候男方よりはなし女房達ひちやうなどには引出物あるへし又こしよせたる役人の女房には必女中方より引出物あるへし

又云公方様御劔の役人も御妻戸の左に祇候也また私さまにては與そへの役人兩人あり妻戸のうはき折たる方與の左あかり右はしたて女房衆はめして後こしをそと御た、き候其時えんより兩人かきおろし候へはこしかき請取候

伊勢貞久武雜記云女房衆御泊之事腰まきをめされ候やう成時は左にて盃の臺と腰巻を取添また右にてうしを御取いさり寄物よはく召候也

又云貴人之御女房衆御酌御加なとにて上様より御服など被下候時は盃の二盃目下され候を取申頂き三盃吞申てまつ盃をすへ持て罷立戸の際に置扱て參候て兩の手にて御服をか、へ持て罷出扱前之盃を右之手にて取御服を

は左のうてにかけて持て可レ罷出ニ若廣蓋ながら取て罷出たくは御服をは殿原に持せ廣蓋斗を持て罷出御女房達に渡申て御禮被下へき也

風呂記云女房を迎る時の事(中略)女房達美女の引出物は或かすきふ或小袖にて候多分人によるへし美女の引出物は上童の引出物も同事にて候かいしやくめのとの引出物は女房達よりは一倍たるへし又下女は美女の三分一の引出物たるへしさて又女房の御方よりは殿の御かたへ大口ひた、れ小袖にて候數は不定三日め色なをしの時つかはすなり

應仁別記云カクテ四方ヨリ時ノ聲天地モ動計ナルニ餘煙八方ヨリ御殿へ覆ケレハ御臺ヲ始トシ上臈中臈局町女房與ヲ醒先鞍馬貴布禰北丹波邊マテモト内々御臺様被レ仰ケルトモ御所様ハチトモ御騒ナク常ノ御氣色ニテ御酒宴ニテ有ケル

嵯川親俊記云天文七年二月十六日庚申於四條道場六十萬決定往生札賦之降花院御談儀結願之女房衆各竹田夕食アリ

光源院殿御元服記云天文十五丙午歲十二月十八日辛丑公方家并若君從ニ東山慈照寺ニ到ニ坂本ニ御成(中略)御臺所并

姫君兩御所其外女房衆御與都合十二丁皆被掛下簾御跡御下向

三好亭江御成記云筑州女房衆既を失禮して見物簾の事は其憚又は先例に無之之間よしのすを面手かけて竹ふちを打て見物有之

柴田退治記云始小谷御方十二人妾三千餘人之女房達期唯今之最後念佛稱名聲裡亦泪欄干云々

賀越關諍記云朝倉放後賀州進發條夜半ハカリニ大手ノ簾所へ女房一人來テ文ヲ撃テ云ケルハ是ハ河原四郎左衛門尉女房ノ許

ヨリ參テ候此文急キ四郎左衛門尉ニ參ラセラレ候ヘトテカキケスヤウニ失ニケリ則番衆不思議ノ事也トテ急キ大將ニソ參セケル

永祿記云近習こゝろさし有ほととの族は御先に進て悉討死す残れるは女房衆幼稚の類迄なり御一所と成て幾千萬の軍兵に戦せ給ふ事項羽十萬騎兵僅に廿八騎に討漏されて漢陣百萬餘騎を掛破て大將三人の首取て鋒に貫し類とも可申候

伊達日記云高玉太郎左衛門玉ノ井合戦ヲ見切(中略)二三ノ樞輪ハ破本丸計ニ成引込女房子共二人迄害シ其身ハ表へ出云々

又云宮内大輔ノ狀紀伊守懷中申サレ此中ニテ落被申候女房衆見付舍弟大越甲斐守へ爲見被申候手替ノ狀ニ候

間此狀可預由申候テ返シ不申其狀ヲ常隆公へ上ケ申候其節ニ大越ヲ甲斐守ニ被下彼甲斐守ハ紀伊守小舅ニテ親類被官ニ候ヘトモ筋目ヲ違身上ヲ存常隆公へ忠節仕候

時慶卿記云文祿二年八月二日女房大坂へ賀茂殿不例見舞

ニ下向候河田ヨリ人足一人雇候日養二人雇候紫竹ハ雖

呼不來候同道ノ女房衆二人アリ細川ノ局ノ衆也文祿三年卯月八日加賀之中納言殿江御成記云御女房衆五十八人前のたい此うち廿人金銀のすなこ御湯漬しほ引ふくめやき物云々

松原自休手録云井伊兵部從水ノ手攻上放火城兵難叶十七日木工頭妻子女房共ヲ指殺天主ニ放火自害ス先陣正則陣高宮越知川云々

武家名目抄稿第七十三册

塙檢校保己一編

稱呼部廿二下

○手懸

簾中舊記云御産所の事(中略)御てかけのた、もなきは御所さまの大上臈おひまいらせ候歟

里見九代記云御前方の御事は御手かけの御前になほりたるも有へし

○腰打

世鏡抄云世界ノ男子ノ數ハ十億多キ故ニ世間ニ寡女多キ也依之男子ハ腰打莖ヨセ御間ノ局御手懸者ナントニテ一人シテ五人六人持也

又云五十歳ノ内ハ定ル妻ナクテハ如何五十餘ニナラハ只腰打計ニテ定ル女アルヘカラス

○御袋

鎌倉年中行事云正月朔日御臺様御袋様上臈中臈下臈ミナミナ御所へ御參アリ上臈様ハ九間其以下ハ皆々四間六間ノ御座ニシコウアリ此三御座ハ何モ御家中也

康富記云享徳四年正月九日乙卯今曉室町殿姫君誕生也御袋大館兵庫頭妹也云々

御産所日記云永享十二年庚申八月十七日若君御誕生御袋御北向様御産所南向様又云五夜御祝自管領御引出物以ニ安富紀四郎御進上一重被下練貫上様御引出物練貫五重引合十帖御袋御方様練貫二重引合十帖其時御袋ハ御北向御トナリ又云寛正三年七月四日御姫君様御袋御體様御産所一也左京大夫殿

蟻川親元記云寛正六年七月廿日乙丑若君様御誕生子類女歟御袋茶阿武庫御出仕也云々

又云文明十年四月五日丁酉冷泉殿七郎殿御袋御名祝あり各御樽持參一獻

小島景憲家譜云三ヶ條之返答景憲(中略)第五に大和に壹萬餘り一擡之書立是ハ賣損于米之限百姓迷惑ニ而如此

近江北郡に五千之書立是ハ秀頼御袋父之國成を以如此細川兩家記云二條武御陣の御構へ人數押入御生害候上は

御内侍衆討死也御臺様は近衛殿の御姫君也ければ近衛殿へ三好日向守送り被申由候又御寵愛小侍從殿は害被申候御袋様慶壽院様は此世になからへてせんなしとして御自害の由候也云々

伊達日記云名生ノ城ハ義隆新田へ御越以來明所ニ成候ヲ
義隆ノ御臺ト御子正三郎殿御袋ニ御東ト申御方二人ヲハ
人質ニ名生ノ城ニ押置御守ニハ彈正親三河守伊場惣八郎
ヲ指添差置申候

秀頼事記云兩御所ハ秀頼未存命ノヨシ開召井伊掃部頭ヲ
召シ仰有テ城ノ四方ヲ嚴ク取マカセ玉ヒ秀頼公ノ供ノ者
共ノ姓名ヲ記二位ノ局ハ尋給ヘキ事有呼出ヘシト片桐市
正ニ仰ケレハ市正カ郎等梅戸忠助ト云者御矢倉へ參此由
ヲ申ケレハ御袋様御供大藏卿鑿場局宮内卿御アヌノ御方
右京大夫御玉云々

大坂軍記云今の御領分程被_レ進候様にと被_レ仰候故此三ヶ
條の外市正は別に無_レ之よし申候へは尤のよし被_レ申候て
其儘夜通しに大藏卿正榮大坂へ被_レ罷歸候其時市正申候
は兎角いかやうにも御入魂の儀に被_レ遊候へは太閤様御
遺言にも立申事に候よく思案仕候に三國一の名城に
被_レ成_レ御座に付て大御所様御氣遣にも被_レ思召_レ如_レ斯被_レ
仰かと存候間所詮諸大名衆并に秀頼公御在江戸被_レ成候
歎御袋様を御證人に江戸へ御下し被_レ成歎不_レ然は大坂の
御城を差上られ他國にて云々

當代記云家康公近習輩昨日モ五人今日モ十人一揆令_レ同

意_レ如此ノ間岡崎ノ體安否不定此時刈屋水野下野守_{是ハ}
ノ弟家康公岡崎如_レ手衆<sub>被_レ相持_レ家康公素勇將也竟_レ被_レ
ノ伯父也</sub>

又云文祿二年正月五日去年冬少將九州迄歸朝スル間此春
重高麗へ遣_レ人數赤國ヲ被_レ責傾_レ去年八月御袋依_レ莫給_レ
秀吉公自_レ名護屋_{上給_レ葬禮ノ儀式夥事也}

又云文祿四年三月廿八日太閤秀吉公家康公ニ於_レ聚樂_御
成(中略)家康公御袋進上物小袖十黃金十枚同御息三河守
ヨリ小袖卅其外十萬貫以上ノ衆小袖廿三萬貫二萬貫トヲ
リノ衆小袖五充五千貫二千貫トヲリ迄小袖或ハ三或二進
上也即還御也

又云慶長十三年五月廿四日伊勢大神宮有_レ大神樂是ハ大
坂秀頼公乳母局有_レ參詣_レ秀頼公并御袋爲_レ祈禱_{ニ可_レ被_レ}
行_レ大神樂也

○母堂
康富記云嘉吉四年正月十日庚申室町殿有_レ渡_レ御於管領畠
山左衛門督入道宿所<sub>當御代渡御之初度也自_レ鳥丸殿_{至_レ}
管領宿所<sub>有_レ路次辻固_{諸大名被_レ致_レ警固_{一者也(中略)御}}
母堂大方殿同有_レ御出_{御代御與也女房達出車二兩云々}</sub></sub>

又云永和三年三月九日參_詣吉田社_{并祇園社_{了後聞今}}
曉武藏守頼之朝臣母儀他界了自_レ去年_{一老病中風云々今日}
以後天下觸穢之儀也

又云享德三年七月廿三日癸酉昨日三條帥殿之御妹慶珠院
殿御圓寂也邪氣久御病惱也普廣院御妾御喝食御所之御母
堂也御年三十九歲云々

增補家忠日記云天正十六年六月廿三日大政所_{秀吉ノ母疾病}
ノ告アルニ依テ大神君洛ニ赴カント催シ給_{テ大神君ノ御}
臺_{秀吉夜ニ入駿府ヲ出テ洛ニ赴給_テ}

○母儀
吾妻鏡云養和元年三月一日丁丑今日武衛依_レ爲_レ御母儀御
忌月<sub>於_レ土屋次郎義清龜谷堂_{被_レ修_{佛事_{導師箱根山別}}}
當行實請僧五人專光房良運大夫公承榮河内公良容專性房
全淵淨如房本月等</sub>

又云建長四年四月三日丙辰今日前將軍并若君御所御母儀
二位殿等御上洛云々

後愚昧記云貞治二年五月廿五日癸亥晚頃新中納言忠光卿
來臨<sub>直明日可_レ遂<sub>着陣<sub>其作法爲_レ相尋_{也委_{示_{了覽_申}}}
文<sub>儀有<sub>習禮_{語云大樹母儀并室家可_レ有_{叙位_{事彼上卿}}}
可_レ勤_{仕之_{云々}}</sub></sub></sub></sub></sub>

又云貞治二年五月廿九日丁卯今夜鎌倉大納言母儀_{元三}
品并室家三品事宣下上卿忠光卿有_レ位記請印_{其儀又黃門}
可_レ注送_{之旨示_{之如_{位記_{少内記康隆作_{之云々}}}}}

○繼母
吾妻鏡云元文二年六月廿一日丁未遠州重不_レ出_{詞分被_レ}
起<sub>座相州又退出給備前守時親爲_レ牧御方之使_{追_{參相}}
州御亭<sub>申云重忠謀叛事令<sub>發覺_{仍爲_{君爲_{世漏_{申由}}}}
於<sub>遠州之處<sub>今貴殿被_レ申之趣偏相_{代重忠_{欲_{被_レ宥_彼}}}
奸曲_{是存_{繼母阿蘇爲_{被_レ處_{吾於_{讒者_{歎云々}}}}}}</sub></sub></sub></sub></sub>

康富記云寶徳元年八月十日戊午局務令語給云昨日瑞春院殿御逝去就之室町殿御服暇并御禁忌事如何様可有御沙汰哉可被計申之由自室町殿以御使布薩民部大夫飯尾左衛門大被仰出中略鹿苑院殿御代明德三年六月廿五日御繼母香殿院殿從一位薨給鹿苑院殿五十日令着輕服給云云

○養母

○嫡母

康富記云寶徳元年八月九日丁巳大御所瑞春院殿薨給故普廣院殿御嫡妻從二位藤原尹子也嘉吉元年普廣院殿薨御之後有御出家着禪衣給三條帥大納言殿御妹也御年卅八自此夏比御長病也室町殿御嫡母也無御養母儀云々

○後室

吾妻鏡云承久三年八月一日壬子坊門大納言忠信自遠江國舞澤歸京是依爲今度合戰大將軍千葉介胤綱預之下向而妹西八條禪尼者右府將軍後室也彼舊好申二品禪尼之間所宥也云々

太平記云五大院右衛門宗今ハ浮世ノ望ヲ捨テ僧法師ニ成タル平氏ノ一族達ヲモ寺々ヨリ引出シテ法衣ノ上ニ血ヲ淋キ二度ハ人ニ契ラシト髪ヲオロシ貌ヲ替ントスル亡夫ノ

云

當代記云天正十一年四月廿一日於江北兩陣相向柴田志津嶽ヲ攻落シ所籠ノ人數打果于時可企合戰ノ處丹羽五郎左衛門前田又左衛門屬秀吉柴田備へ出テ手ノ間則敗北秀吉追之越前へ打入柴田居城へ押懸ラレ敗北ノ士卒城へ不取入ノ間柴田城ニ懸火同廿四日自害ノ間越前則平均柴田妻女不出城燒死給是信長ノ妹淺井備前守後室也此腹ニ淺井息女二人有之乳母才覺故無異儀令出城給大坂秀頼ノ御袋并江戸將軍ノ御臺所是也

又云慶長十九甲寅年三月廿六日播磨國古三左衛門後室自備前國駿府へ下玉ノ息男今爲備前主岡山ニ在城兄ノ武藏守播磨國ニ有自然ノ折節備前ヲ可被奪歟ノ疑心ニテ國替所望ノ依訴訟一如斯ト云々

○後家

吾妻鏡云建久四年九月廿六日己丑御外舅憲實法眼後家此間參候故季範朝臣芳好依難默止殊賞給加之可令領掌故上綱遺跡之旨被仰付云々

又云建久六年七月十三日乙未土肥後家尼參上相具下若等召御前及御賞翫云々

又云承元四年五月十四日辛丑故島山二郎重忠後家所領等

後室共ヲモ所々ヨリ搜出シテ貞女ノ心ヲ令失悲哉東寺供僧評定引付云應安六年八月十二日赤松故律師後室方酒肴軍役免除并事依爲内者談合宇留賀入道之處近日機嫌不可然之由被申之間先延引之旨披露了

親長卿記云明應五年二月廿四日今日御翰事大概如先日今日御臺慈照院殿可御見物云々

拾芥記云永正九年六月十八日細川下向攝州與赤松二郎和睦之義於尼崎與赤松故左京大夫後室申合云々

勢州軍記云其頃柴田勝家與羽柴秀吉互爭權威及確執其亂觸發信孝之叛心當時淺井長政後室號小谷御前無雙國色也在信孝之館柴田羽柴俱所望之云々

聚藥物語云三十餘人の女十四番には左衛門のかうとの、三十に成給ふ岡本といふ人の後室なり

武蔭叢話云天文二十一年八月十九日に三好實休逆心し坂本郡阿見性寺にて細川持隆生害也御子直幸幼少ゆへ萬事三好か儘にして剩へ主君持隆の後室を實休妻女とし惡逆頗甚し

松原自休手録云翌日破三三ノ九城兵防戰寄手死人手負及三百餘人城兵二百餘輩戰死ス豊前カ後室仕女ヲ引左右切テ出十八人一處ニシテ死シ依之濱松閣家康云

日來有子細内々雖及改易御沙汰不可有殊事之由今日仰出云々

又云寛元三年十一月六日丁卯寮末入道後家改嫁事爲出羽前司行義明石左近將監兼綱等奉行有沙汰今日以彼後家分所領被付本主子息次郎國朝也云々

和泉久米田寺古文書云寶治二年下知狀云和泉國久米多寺別當僧祐圓與同國山直郷四箇里地頭代沙彌西生相論當寺免田四町三段餘事中略且木島新庄當寺免田三町餘被倒畢人用者非本免之故也加之當箇里内左近領地頭

遠江前司盛連後家被顛倒畢加守寺免田泰寺免田等如此云々

赤松記云天文九年正月廿八日に播磨の英賀へ御下向其頃しゆくゆふと申人とのへにて源太か子の源五郎を英賀にて被召出候是を後に左馬助と申候しゆくゆふ源五郎を馳走のころは根本は細川殿衆に河合八郎と申人めし様

を頼申て下り御馬廻りに御奉公致し候彼八郎死去の後に後家加茂の人にて候とて加茂殿と申てめし様御扶持ありしゆくゆふ加茂の人にて別てなほさりなく候其時はしゆくゆふ馳走にて候

○尼君

賀越圖詳記云同十年三月八日義景ノ母儀二位ノ尼ニ被
任是ハ武田中務少輔息女也彼尼公宅へ御成有テ終日終
夜御遊宴アリ

○大姫君

吾妻鏡云文治二年五月十七日甲午大姫君令參籠南御
堂給自今日可爲三七箇日云々

○姫君

平治物語云義朝後藤兵衛其基ヲ召テ汝ニ預置シ姫ハ如何
ト宣ヘハ私ノ女ニ能々申合テ候ヘハ別ノ御事候マシト申
ケリサテハ心安ケレトモ汝是ヨリ都へ歸リ上リ姫ヲ育テ
尼ニモナシ義朝カ後世菩提ヲ吊ハセヨト宣ヘハ先何ク迄
モ御供仕免モ角モ成セ給ハン御有様ヲ見届進ラセテコソ
歸上候ハンスト申セハ存スル旨アリ疾々ト宣ヘハ力及
ハス都へ歸リ姫君ニ附奉リ是彼ニ隠シ置進ラセテ源氏ノ
御代ニ成シカハ一條二位中將能保卿北方ニナシ奉リケル
ナリ

平家物語云

備後守
源氏

北方は年來日來かくなさけなき人とこ
そかけては思はさりしかとして引かついてそ臥給ふ若君姫
君女房達は御簾の外迄轉ひ出て人の聞をも憚からず聲を
はかりにそおめき叫ひ給ひける

吾妻鏡云治承五年五月廿三日戊戌御亭之傍可被建姫
君御方并御殿且土用以前爲被始作事不論庄公別
納之地今明日内可召進工匠之旨被仰遣安房國在廳
等之中云々昌寛奉行之

又云建長六年十月六日乙亥寅尅相州室平産姫公加持若
宮僧正隆驗者清尊僧都

又云寛元三年七月廿六日戊午今夜武州御妹誠爲
將軍家御臺所云々

花營三代記云應永廿九年八月廿四日戊申御所様自公文
所北野社一七箇日有御參籠御臺様兩御喝食姫公御參
宮御立云々

御産所日記云嘉吉元年十月廿五日御姫君誕生御袋大方殿
様御産所初井云々

又云御産之御氣分自然ノ驗者兩人參勤有云々傳聞去夜大
樹君出生云々母儀山名一族女云々可
爲重名ナヤナ

又云陰陽守兩人在方有私候御被申之也如此役人等次第
者若君姫君御出生之於御産所可爲同事

又云寛正三年七月四日御姫君様御袋様御躰様御産所一色
左京大夫殿

東寺供僧詳定引付云一官領御坐姫君様夜陀羅尼事爲公

方様自今月十一日至廿日自寺家參勤可申被仰
出之來年中可爲此分之由供僧仰出之仍參勤事可
爲三十口供僧之由評議了但籠衆三人可除之旨衆議治
定畢十一月七日

康富記云享德四年正月元日今曉室町殿姫君誕生也御袋大
館兵庫頭妹也云々

光源院殿御元服記云天文十五丙午歲十二月十八日辛丑公
方家并若君從東山慈照寺到坂本御成(中略)御臺所并
姫君兩御所其外女房衆御與都合十二丁皆被掛下簾御
下向

三好記云日吉御
成條同日已刻東山慈照寺ヨリ御成アリ(中略)
御走衆十人其次ニカヘノ御與ヲ通ス御臺所姫君其外御供
女中皆御與也

○御料人
教言卿記云應永十九年四月九日北畠殿御料人御樂ノタメ
御入アリ

應仁記云爰ニ山名ノ被官ニ垣屋大田垣等十三人以運署
ノ狀諫テ(中略)此家ヨリ上臈ノ方ヨリ一人公方へ參ラ
セラル、事ニテ候ヘハ彼ノ武衛へ約束ノ御料人ヲ哀レ公
方へ參臈へ入レ參セヲキ玉ヘカシ若此旨無御承引テ御

合戦アラハ吾等一同出家入道シ今日ヨリ高野山小川ノ様
ヲ可仕ニテ候ト誠振心底諫メケルコソ奇特ナレ

沙彌洞然長狀云御不快之人々御赦免之御佗言或寺家或老
中御申之儀度々致披露候於其時其彼分別之旨深重
被仰聞候其料人能翻心底後悔錯於可遂奉公之
志候強而何條可有隔心候哉只其身之悲儘思案不届
佗者不可有曲候と御意候つる錯改莫憚候之條此儀
を被思食候哉

蟪川親俊記云天文七年二月四日戊申眞木島里子方より人
來り御料人明日爲百日之間イロナラシノ小袖爲代二
十疋鯛二海老廿此方使滞留

又云天文七年四月廿一日甲子ニ若公様御色直貴殿御出仕
之御方御料人坂本へ被下之

又云天文七年五月十八日庚寅御靈社へ參詣御屋形御料人
可治泄瀉候由に問御藥まゐらす

赤松記云得平の源太則近と申はおほち先に申但馬口にて
討死の時まで保田の庄五十郷少しもましりなく一圓知行
致しつる(中略)則近死去の後兄の源次郎あゝと相續し候屋
形に女子壹人御座候御名をは松御りやう人と申政則御煩
ひあり御慰に御應野に御出坂田のくと寺と申を御宿にて

彼寺に御逗留候所におもひの外御煩取詰候へて寺にて御
他界御年四十二明應三年正月二十五日也されともおもひの外に御家督
の事御病中に御讓狀認めおかれ候當家嫡流筋七條藏人元
久の御曹子才松殿と御料人様と申合せ御家督にすへきよ
し御ゆつり状した、め置き候其ごとく才松殿を入申候

賀越圖諍記云於大野義景傳角テ廣徳院義景ノ御自害ヲ御覽シテ
ワラハモイツ迄流經ヘキトテ裕ヲカタヌカセ玉ヒ守リ刀
ヲヌキテ既ニ腹ニツキタレントシ玉ヒケル御乳人女房達
袖ヤ御手ニスカリ付テ申ケル御屋形様コソ空ク成玉フト
モ御曹司御料人達ノ行末ヲモ御覽シハテヨカシ餘リニ御
心ヨハク御入候ト申サレケレハ袖ヲ顔ニ押當テ其マニタ
ヲレ臥テ消入玉フ

甲陽軍鑑末書云公方畠山義秋公ノ御所ヲハ大坂御坊門跡
へ頼大坂ニ御作事有ヘシト也大坂門跡ハ油川腹ノ御娘御
菊御料人ヲ遣ハサル、御約束ナレハ如ス

又云天正七年秋甲州ヨリ越後へ御輿入景勝ハ勝頼公御妹
聲ニ成給也此御料人ハ甲州油川腹ニ而仁科五郎殿ト一腹
也

朝日物語云太閤ト柴田修理ト取合ハ其頃威勢アラソヒモ
云又ハ信長公ノ御妹オ市料人ノイハレナリトモ申也淀殿

又云文和四年十一月四日抑去年早世鎌倉前大納言息女可
レ被贈ニ一品位記候云々内親王などの外當座不ニ覺悟候
無位人直今叙レ之條稀ニ先規候歟

○官女

吾妻鏡云文治四年正月廿二日戊午比企藤内朝宗妻御養所官女號ニ越
后今曉男子平産云々

○妾女

吾妻鏡云壽永元年六月一日庚子武衛以ニ御寵愛妾女號ニ
招請于小中太光家小窪宅ニ給御中通之際依レ有ニ外聞之
憚ニ被レ構ニ居於遠境ニ云々

康富記云享徳三年七月廿三日癸酉昨日三條帥殿之御妹慶
珠院殿御圓寂也邪氣御病惱也普廣院殿御妾御喝食御所之
御母堂也御年三十九歳云々

○女中

花營三代記云應永廿八年六月七日有ニ祇園會ニ舞車御所へ
參ル七番ウタウ自ニ女中ニ五重色々被レ下レ之

又云應永廿九年十一月三日御登高山寺成則御影御拜見了
春日御影住 於ニ御伽坊有ニ一獻其外南向已下女中成ニ南向
吉御影也 發願云々

建内記云永享二年二月一日早旦參ニ室町殿ニ云々女中御叙

ノ御母儀ナリ近江ノ國淺井カ妻也ケル淺井ニ離レサセ玉
ヒテ御袋ト一所ニオハシケルカ天下ノ美人ノ聞ヘ有ケ
レハ太閤御望ミヲ被レ掛シニ柴田岐阜ヘマイリ三七殿ヘ
心ヲ合セオ市御料ヲムカヘ取己カ妻トス

○養女

増補家忠日記云慶長五年六月六日保科彈正カ女ヲ以テ大
神君御養女トシテ黒田筑前守長政ニ嫁セシメ玉フ
又云慶長七年七月下云大神君松平源七郎カ娘ヲ養女ト
メ豊氏ニ嫁シセシメ給フ本多中務大輔忠勝及ヒ一位局ヲ
相副ラレ婚禮ノ儀式ヲ調シメ給フ

○息女

吾妻鏡云文應元年五月五日癸卯西剋岡屋禪定殿下兼經
公御息女御年二十爲ニ最明寺禪家御猶子ニ御下着則入ニ御山内
亭ニ是可レ令レ備ニ御息所ニ給ニ云々

國太曆云貞和元年八月十一日文殿沙汰於レ今者可ニ申沙
汰之由被レ仰下ニ開闢師顯被レ依ニ相州禪門息女事五箇日
被レ止奏事

又云文和四年十一月四日今日忠光送狀有ニ相尋事ニ鎌倉前
大納言息女去年卒云々仁可有贈ニ一品ニ事ニ云々人臣直
一品未會有歟且又御神事中贈位事旁不審

品ニ事去月廿八日女叙位之次有ニ其沙汰ニ開書大外記師世
朝臣今日持參者也三日參ニ室町殿ニ賀申入上様御叙品珍重
之由則有ニ御對面

○下女

季瓊日錄云永享十一年十二月十二日御臺并女中様折紙并
御經御衣等被レ送ニ勝定院

康富記云文安六年四月十九日室町殿御元服之參賀也先諸
大名近習五外様進ニ上御太刀ニ懸ニ御目ニ中略其後女中大
方殿御禮春日局被レ出座ニ云々

諸大名御成申入記云女中衆の物を披露被レ申候も畠山播
磨守殿御禮など、それは體殿文字を直に被レ申入候也此
段は於ニ于今も無ニ相違ニ云々

大坂軍記云慶長十九年七月廿一日に大佛供養有ヘキ處此
段板倉伊賀守勝重より片桐市正且元へ申達す秀頼公被レ
聞召大に驚きたまひ大佛供養をやめ片桐市正且元并大
藏卿局尼正榮を七月廿九日大坂を立させ駿河へ下し給ひ
右之段全く不ニ存寄ニ段さまく陳したまふ片桐をは鞠子
の一晚ふを志留二人の女中をは駿府の市正屋敷に宿置傳
長老本多上野介正純を以て數度御問答あり

奥州後三年記云城をまきて秋より冬におよひぬ又さむく

武家名目抄稿第七十四册

稿檢校保己一編

稱呼部附錄一

つめたくなりてみなこゝえておのゝかなしみていふやう(中略)おのゝいかてか京へのほるへきといひて泣々文とも書てわれらは一ちゆう雪におはれて死なんとす是をうりて糧料としていかにもして京へ歸り上るへしと云て我きたるさせなかをぬき乘馬ともを國府へやる城中飢にのそみて先下女小童部など城戸をひらきて出来る云云

吾妻鏡云治承四年八月十七日丁酉戊剋藤九郎盛長僮僕於_ニ釜殿_ニ生_ニ厨兼隆雜色男_ニ但被_レ仰也此男日來嫁_ニ殿内下女_ニ之間夜々參入而今夜勇士等群_ニ集殿中_ニ之儀不_レ相_ニ似先々形勢_ニ定加_ニ推量_ニ歎之由依_レ有_ニ御思慮_ニ如此云々

○一男
○二男

吾妻鏡云治承四年八月廿六日丙午武藏國山次部重忠且爲_レ報_ニ平氏重恩_ニ且爲_レ雪_ニ由井浦會稽_ニ欲_レ襲_ニ三浦之輩_ニ仍相_ニ具當國黨々_ニ可_レ來會_ニ由觸_ニ遣河越太郎重頼_ニ是重頼於_ニ秩父家_ニ雖_レ爲_ニ次男流_ニ相_ニ繼家督_ニ依_レ從_ニ彼黨等_ニ及_ニ此儀_ニ云々

又云建長二年十二月廿三日甲寅相州云_ニ三河局移_ニ他所_ニ聊有_ニ口舌事_ニ奥州依_レ被_レ申_ニ子細_ニ俄有_ニ此儀_ニ是_ニ二男若公母也

勢州四家記云關の一黨とは六波羅太政大臣平清盛公の後胤也先祖小松内大臣重盛公天下を治めたまふころ次男小松新三位中將資盛卿十三歳の時殿下乗合依て勢州鈴鹿郡關谷久我といふ所へ六年之間流さる其時一子あり源氏の世となりて北條家これを預り命を助け盛國と號し關東に

て死去せり

江濃記云道三ハ子息新九郎カ爲ニウタレケルタトヘハ道三ニ子アリ一男新九郎義糺ト云是ハ先腹ナリ二男孫四郎三男喜平次ト云是ハ當腹ナリ

○二棟御方

吾妻鏡云延應元年八月廿二日己未二棟御方始渡_ニ御大倉御産所_ニ

又云同年十月十七日癸丑爲_ニ二棟御方御産平安御所_ニ被_レ行_ニ七座咒詛祭_ニ維範親職資宣晴貞晴平廣資範定等奉_ニ仕之_ニ

○他家

太平記云_{笠置}相模入道大ニ驚テサラハヤカテ討手ヲ差上セヨトテ一門他家宗徒ノ人々六十三人ヲ被_レ催ケル

又云_{足利殿御}相模入道是ニ不審ヲ散シテ喜悅ノ思ヲ成シ高氏ヲ招請有テ様々賞翫共有シニ先祖累代ノ白旌アリ(中略)稀代ノ重寶ト申ナカラ於_ニ他家_ニ無_ニ其詮_ニ歎是ヲ今度

ノ俄送ニ進シ候也此旗ヲサ、セテ凶徒ヲ急キ退治候ヘトテ錦ノ袋ニ入ナカラ自是ヲマイラセラル

又云_{金澤貞時}今ハ冥途ノ思出ニモナレカシト彼御教書ヲ請取テ又戰場ヘ打出給ケルカ其御教書ノ裏ニ棄_ニ我百年命_ニ

報公一日恩ト大文字ニ書テ是ヲ鏡ノ引合ニ入テ大勢ノ中へ懸入終討死シ給ケレハ當家モ他家モ推雙テ感セヌ者モナカリケリ

○名家

太平記云_{新田義貞}上野國住人新田小太郎義貞ト申ハ八幡太郎義家十七代ノ後胤源家嫡流ノ名家ナリ然トモ平氏世ヲ執四海皆威ニ服スル時節ナレハ無力關東ノ催促ニ隨テ金剛山ノ搦手ニ被_レ向ケル

○人夫

吾妻鏡云養和元年三月十三日己丑安田二郎使者武藤五自_ニ遠江國_ニ參_ニ着鎌倉_ニ申云爲_ニ御代官_ニ令_レ守_ニ護當國_ニ相待平氏襲來_ニ就_ニ中請_ニ命向_ニ橋本_ニ欲_レ構_ニ要害_ニ之間召_ニ人夫_ニ之處淺羽庄司宗信相良三郎等於_ニ事成_ニ蔑如_ニ不_レ致_ニ合力_ニ剩義定居_ニ城下_ニ之時件兩人乍_レ乘_レ馬打_ニ通_ニ其前_ニ訖是已存_ニ野心_ニ者也隨而彼等一族當時多屬_ニ平家_ニ速可_レ被_レ加_ニ刑罰_ニ歎云々

又云文治三年三月四日丙午東大寺造營之間爲_レ引_ニ材木_ニ被_レ仰_ニ人夫之事_ニ之處周防國地頭等及_ニ對押_ニ云々

又云建久四年三月十五日壬午近日依_レ可_レ有_ニ那須野御狩_ニ所_ニ被_レ構_ニ籃澤之屋形等_ニ以_レ宿次人夫_ニ壞_ニ渡下野國_ニ云々

又云文應二年二月廿五日丁巳海道驛馬御物送夫事御使上
 下向每度依_レ犯_レ定數_ニ爲_レ士民及旅人愁_レ之由頻達_ニ上聽_レ
 之間今日所_レ被_レ仰_ニ六波羅_也其狀云(中略)京下御物送夫
 事京下御物送夫任_ニ雜掌申請_ニ無_レ左右依_レ令_ニ下知_レ人夫
 多々之間民之煩尤不便自今以後申_ニ請人夫_ニ之時令_レ見_レ知
 御物多少_ニ定_レ人數_ニ可_レ載_レ長帳_也且於_ニ私物送夫_者一向
 可_レ令_ニ停止_也兼又夫役寄_ニ於事左右_於路次_ニ不_レ可_レ致_レ
 狼藉_ニ之由可_レ被_レ加_ニ下知_レ之狀依_レ仰執達如_レ件文應二年
 二月廿五日武藏守相模守陸奥左近大夫將監殿
 又云弘長三年六月廿三日辛未將軍御上洛事有_ニ其沙汰_{被_レ}
 充_ニ課役於諸國_{御教書文章一同也}(中略)御教書云御上
 洛間百姓等所役事段別百文五町別官賦一疋夫二人可_ニ充
 行_ニ可_レ準_ニ田一町_也此外不_レ可_レ成_レ民之煩_{但有}逃散之輩_ニ
 者相_ニ觸_レ在所<sub>可_レ令_レ勤_ニ其役_{之狀依_レ仰執達如_レ件弘長三}
 年六月廿三日陸奥左近大夫將監殿相模守武藏守
 太平記云_{補出_レ天_{王寺條}}楠五百餘騎ヲ卒シテ俄_ニ湯淺カ城へ押寄
 テ息ヲモ<sub>不_レ繼_{實戰_レフ}城中_ニ兵糧ノ用意乏カリケルニヤ
 湯淺カ所領紀伊國ノ阿瀬河ヨリ人夫五百人ニ兵糧ヲ持セ
 テ夜中ニ城へ入ントスル由楠風聞シテ兵ヲ道ノ切處へ差
 遣シ悉是ヲ奪取テ其俵ニ物具ヲ入替テ馬ニ負セ人夫ニ持</sub></sub>

セテ兵ヲ二三百人人夫ノ様ニ出立セテ城中ニ入ントス
 又云_{赤坂合}此城三方ハ谷深クシテ地ニ不_レ繼_{一方ハ平地ニ}
 テ而モ山遠ク隔レリサレハ何クニ水有_{ヘキトモ見エサル}
 ニ火矢ヲ射レハ水彈ニテ打消候近來ハ雨ノ降ル事モ候ハ
 ヌニ是程マテ水ノ卓散ニ候ハ如何様南ノ山ノ與ヨリ地ノ
 底ニ樋ヲ伏城中へ水ヲ懸入ルニ歟ト覺候哀人夫ヲ集テ山
 ノ腰ヲ掘キラセテ御覽候ヘカシト申ケレハ大將ケニモト
 テ人夫ヲ集メ城へ繼キタル山ノ尾ノ一文字ニ掘切テ見レ
 ハ案ノ如ク土ノ底ニ二丈餘ノ下ニ樋ヲ伏セテ側ニ石ヲ
 壘ミ上ニ眞木ノ瓦ヲ覆テ水ヲ十町餘ノ外ヨリ懸タリケ
 ル
 又云_{先帝船上}長重着タル鎧ノ上ニ荒薦ヲ卷テ主上ヲ負進セ
 鳥ノ飛カ如クシテ船上へ入奉ル長年近邊ノ在家二人ヲ廻
 シ思立事有テ船上ニ兵糧ヲ上ル事アリ我倉ノ内ニアル所
 ノ米穀ヲ一荷持テ運タラン者ニハ錢ヲ五百ツ、取スヘシ
 ト觸タリケル間十方ヨリ人夫五六千人出來シテ我劣ラシ
 ト持送ル一日カ中ニ兵糧五千餘石運ヒケリ
 又云_{左近大夫爲}伊達南都二人ハ貌ヲヤツシ夫ニナリ中間ニ
 人ニ物具キセテ馬ニノセ中黒ノ笠符ヲ付サセ四郎入道ヲ
 籠ニ乗テ血ノ付タル帷ヲ上ニ引覆ヒ源氏ノ兵ノ手負テ本

國へ歸ル真似ヲシテ武藏マテソ落タリケル

又云_{島山入道}島山入道々誓舍弟尾張守義深同式部大輔兄

弟三人ハ其勢五百餘騎ニテ伊豆國ニ逃下リ三津金山修禪

寺ノ三ノ城ヲ構テ楯籠リタリト聞ヘケレハ鎌倉ノ左馬頭

基氏先ツ平一揆ノ勢三百餘騎ヲ被_ニ差向_ニ其勢已_ニ伊豆府

ニ付テ近邊ノ庄園ニ兵糧ヲ懸人夫ヲ駈立ケル程ニ葛山備

中守ト平一揆ノ所領ノ事ニ就テ圖譯ヲ引出シ忽_ニ軍ヲセ

ントソヒシメケル

伊達日記云廿七日昨日ハマチマチニテ落居不_レ申候ヘト

モ我等存分惡ハ有_レ之間敷ト存御意ヲモ不_レ請未明竹屋敷

陣ヲ移申候間伊達上野介我等ニ引續陣ヲ移申候ニ付惣

陣ヲ可_ニ相詰_{由被_レ仰付}惣人數ハ備ヲ立夫兵者野陣ヲ懸

候處ニ内ヨリ一人罷出我等陣所へ小旗ヲ振招候間人ヲ越

タツテ候ヘトモ石川勘解由ト申者ニテ候云々

○内縁

江濃記云日根ハ華人正ニ近付此上ニテ無事ヲ繕ヒ淺井殿

ト一處ニ成リ尾張へ出張シ無_レ二ノ軍ヲ遂末々ハ美濃ヲ齋

藤ノ御國ニト申ス華人最也私主ノ内縁ヲ以テ御繕ヒ有_ヘ

シト云ケレハ日根モヨロコヒ淺井カ陣所へ使ヲ立此由ヲ

申ス

○息女

○舍弟

甲陽軍鑑末書云古典厩信繁ノ子息今ノ典厩信元ノ舍弟十

五歳ニ成給ヲ信州望月ト申侍ノ息女ト祝言被_レ成則望月

ノ跡ヲ御取也

○當家

吾妻鏡云正治二年二月六日壬戌小山左衛門尉之弟五郎宗

政者年來當家武勇獨在_ニ宗政_{之由}自讃云々

○惡黨

吾妻鏡云文治四年八月十七日庚辰右兵衛督保能消息到來路

邊群盜蜂起事至_ニ疑貽分者相_{觸所々}畢就中叡山飯室谷

竹林房住侶來光房永實同宿號_ニ千光房七郎僧_{招_ニ卒惡徒}

浪人等_{令_ニ夜打已_下惡行_{之由}風聞之間經_ニ奏聞_{畢仍仰_ニ}}

法印圓良_{被_レ召_之處去四日召_ニ進彼僧_{之由}所_レ捧_ニ請文_也}

也云々

又云承元二年七月十五日壬子武藏國威光寺院主僧圓海參

訴云柏江入道增西去月廿六日率_ニ五十餘人惡黨_{亂_ニ入寺}

領_ニ及_レ刈_レ田狼藉云々

○逆黨

○逆黨

吾妻鏡云養和元年閏二月廿日丙寅武衛伯父志田三郎先生
義廣忘骨肉之好率數萬騎逆黨欲度鎌倉緯已發覺
出常陸國到于下野國云々

又云建久元年正月六日辛酉與州故泰衛郎從大河次郎兼任
以下去年窮冬以來企叛逆(中略)起于同國山北郡各
結逆黨

○黨類

吾妻鏡云元曆元年五月三日庚寅武衛被奉寄附兩村於
二所大神宮去永曆元年二月御出京之刻感靈夢之後當
宮事御信仰異他社然者平家黨類等在伊勢國之由依
令風聞遣軍士之時者縱雖為凶賊之在所不相觸
事之由於祠官無左右不可亂入神明御鎮座砌之旨
度々所被仰舍也

又云文治五年十月廿四日庚戌申刻御歸着鎌倉入御營
中之後未被溫座召因幡前司被遣御消息於帥中納
言并右衛門督等其詞云追討與州泰衛訖召其被黨類
今日廿四令歸鎌倉候也云々

○逆徒

吾妻鏡云養和元年閏二月廿一日丁卯今日以後七ヶ日可
有鶴岡若宮參詣之由立願給是東西逆徒蜂起事為靜

御時白河院御幸于宇治擬有還御餘與不盡之間猶被
申御逗留云々

又云建保元年五月二日壬寅筑後左衛門尉朝重在義盛之
近隣而義盛備軍兵競集見其粧聞其音備戎服發使
者告事之由於前大膳大夫于時伴朝臣賓客在座酒方
酣亭主聞之獨起座奔參御所次三浦平六左衛門尉義村
同弟九郎右衛門尉胤義等始者與義盛成一諾可誓固
北門之由乍書同心起請文後者令改變之兄弟各相議
云靈祖三浦平八郎為繼奉屬八幡殿征與州武衛家衛
以降飽所味其恩祿也云々

又云同三年八月廿二日己酉地震驚性事被行御占之處
重變之由申之仍去御所入御相州御亭信綱持御劔
亭主被移他所云々

又云承久元年正月廿七日戊子定景持被首歸畢即義村
持參京兆御亭々主出居被見其首安東次郎忠家取指
燭李部被仰云正未奉見阿闍梨之面猶有疑殆云
云

又云建長三年十月廿日丙子將軍家并二品相州從御第還
御亭主御引出物等被令獻之云々

○老軍

謚也未明參給被行御神樂云々

○類族

甲陽軍鑑末書云諸士武道類族奴僕ヲ愛スヘキ事

○家名

吾妻鏡云建保四年九月廿日己亥廣元朝臣參御所稱相
州中使御昇進問事諷諫申須令庶幾御子孫之繁榮給
者辭御當官等只為征夷將軍漸及御高年可令兼
大將給歟云々仰云諫諍之趣尤雖甘心源氏正統縮此
時畢子孫敢不可相繼之然者飽帶官職欲舉家名
云々

○亭主

吾妻鏡云元曆元年六月一日戊午武衛招請池前亞相給
是近日可有歸洛之間為餞別也(中略)其後召客之屬
從者又賜引出物武衛先召彌平左衛門尉宗清
平家一族也是亞相下着最初被尋申之處依病遲留之由
被答申之間定今者令下向歟之由令思案給之故歟而
未參着之旨亞相被申之太遠亭主御本意云々

又云元久元年九月十五日甲戌將軍家其夜白地入御相州
御亭即欲有還御處亭主奉抑留給今夜依為月蝕
不意亦御逗留亭主殊入與給其間行光候坐申云京極太閤

吾妻鏡云寬喜二年二月卅日頃之內々依有被命之旨歟
尾藤左近入道平三郎左衛門尉政方兵衛引率郎從出門
外稱有謀叛之輩指濱馳向之間數百騎盡忽以從于彼
三人之後到于稻瀨河(中略)依之老軍二十餘輩獻旗
於御使各自此所離散訖

○義兵

吾妻鏡云治承四年四月廿七日壬申高倉宮令旨今日到着
于前武衛將軍伊豆國北條館八條院藏人行家所持參也
武衛裝水干先奉遣拜男山方謹令披閱之給(中略)
頃年之間平相國禪閣恣管領天下刑罰近臣刺奉遷仙洞
於鳥羽之離宮上皇御憤頻惱欲虛御當于此時令旨到
來仍欲舉義兵定惟天與取時至行謂歟云々

又云同年八月十三日癸巳定綱申明曉可歸畢之由武衛
雖令留之給相具甲冑等稱可參上仍賜身暇仰
曰令誅兼隆欲備義兵之始來十六日必可歸參者又
付定綱被遣御書於澁谷庄司重國是則被恃思食之
趣也

又云同年九月十九日戊辰武衛為流人輒被舉義兵
之間其形勢無高喚相者直討取之可獻平家者仍內
雖乖二圖之存念外備歸伏之義參然者得此數萬合

力可被感悅歎之由思儲之處有被答運參之氣色

殆叶人主之體也依之忽變害心奉和順云々

國太曆云新田注 文和元年三月四日今月十五日於上州揚

義兵同十六日對治國中凶徒同日打越武州打隨當國

凶徒同十八日攻入鎌倉候之處尊氏已下凶徒已沒落楯

籠武州狩野川候之間今日十九日發向彼方仕候決雌

雄候者重可注進候以此旨被加御詞可有洩御

披露候義宗恐惶謹言聞二月十九日武藏守義宗進上御奉

行所

太平記云備後三郎其比備前國兒島備後三郎高德ト云者ア

リ主上笠置ニ御座有シ時御方ニ參シテ揚義兵ニシカ事未

成先ニ笠置モ被落楯モ自害シタリト聞ヘシカハカヲ失

テ黙止ケルカ云々

又云新田起 此時故新田左中將義貞ノ次男左兵衛佐義興三

男少將義宗從父兄弟左衛門佐義治三人武藏上野信濃越後

ノ間ニ在所ヲ定メス身ヲ藏テ時ヲ得ハ義兵ヲ起サント企

テ居タリケル處ヘ吉野殿未住吉ニ御座有シ時由良新左衛

門入道信阿ヲ勅使ニテ南方ト義詮ト御合體ノ事ハ暫時ノ

智謀也ト聞ユル處ナリ

又云新田起 或時執事船田入道義昌ヲ近ケテ宜ヒケルハ古

陣欲貽譽於後代其中安達藤九郎右衛門尉景盛引辛

野田與一加治次郎飽間太郎鶴見平次玉村太郎與藤次等

畢主從七騎進先登取弓狹鏑重忠見之此金吾者弓馬

放遊舊友也云々

○流人

吾妻鏡云治承四年八月四日甲申散位平兼隆前延壽殿者伊

豆國流人也依父和泉守信兼之訴配于當國山木郷漸

歷三年序之後假平相國禪閣之權輝威於郡郷是本依

爲平家一流氏族也

又云同年十二月四日壬午阿闍梨定兼依召自上總國參

上鎌倉是去安元々々年四月廿六日當國流人也

又云建久元年八月十三日乙未右武衛使自京都參着去月

卅日被下流人官府重隆前佐渡守兼信板垣三郎重家高田四郎

等也云々

又云同二年五月八日乙卯佐々木左衛門尉定綱等事依山

門訴所被下之去月廿六日口宣同廿八日院宣案文等到

着(中略)流人左衛門尉源定綱左兵衛尉廣綱云々

又云同四年四月廿九日乙丑去月十二日被召返流人等

佐々木左衛門尉定綱在其中之由一條前黃門被申送之

ヨリ源平兩家朝家ニ仕ヘテ平氏世ヲ亂ル時ハ源家はヲ鎮

メ源氏上ヲ侵ス日ハ平家はヲ治ム義貞不肖也ト雖トモ當

家ノ門楣トシテ譜代弓箭ノ名ヲ汚セリ而ニ今相模入道ノ

行跡ヲ見ニ滅亡遠ニ非ス我本國ヘ歸テ義兵ヲアケ先朝ノ

宸襟ヲ休メ奉ラント存スルカ勅命ヲ蒙テハ叶マシ如何シ

テ大塔宮ノ令旨ヲ給テ此素懷ヲ可達ト問給ケレハ船田

入道畏テ大塔宮ハ此邊ノ山中ニ忍テ御座候ナレハ義昌方

便ヲ廻シテ急テ令旨ヲ申出シ候ヘシト事安ケニ領軍申テ

己カ役所ヘソ歸リケル

豆相記云永祿二己未年景虎以回文告八州列將曰(中

略此故我起義兵而欲使憲政再歸國

○主從

吾妻鏡云養和元年正月五日壬子關東健士等廻南海可

入花洛之由風聞仍平家分置家人等所々海浦其内差

遣伊豆江四郎警固志摩國而今日熊野山衆徒等就集于

件國菜切島襲攻江四郎之間郎從多以被疵敗走江四郎

經大神宮御鎮座神道山通隱宇治岡之處波多野小次郎

忠綱義通同三郎義定義通等主從八騎折節相逢于其所爲

抽忠於源家遂合戰誅江四郎之子息二人云々

又云元久二年六月廿二日戊申爰襲來軍兵等各懸意於先

來專顯勳功之間爲殊寵愛之處依山門訴訟去々年所

被配流薩摩國也

又云同四年十月廿八日辛酉佐々木左衛門尉定綱參着此程

薩摩國流人也去三月十二日依舊院御一廻御佛事被免

勅勘云々

○騎馬

甲陽軍鑑末書云信玄公騎馬數合九千二百二十一騎也但留守

居諸奉行ナト引テ也主從共五人積ニシテ四万五千六百

五十人也

○凶徒

吾妻鏡云治承四年九月三日壬子景親乍爲源家譜代御家

人今度於所々奉射之次第一旦匪守平氏命造意企

已似有別儀但令一味彼凶徒之輩者武藏相模任人計

也

又云同年十一月七日乙卯平山武者所季重殊有勳功於

所々進先登々々更不願身命多獲凶徒首仍其賞可

抽傍輩之旨直被仰下云々

又云建久元年正月六日辛酉奥州故泰衡郎從大河次郎兼任

以下去年窮冬以來企叛逆(中略)遂兼任相具嫡子鶴太

郎次男於畿内次郎并七千餘騎凶徒向鎌倉方令首途云々

又云同年正月廿九日甲申被遣御使於奥州是凶賊雖融所領内御家人等爲立一身之勤功以無勢於所無左右企合戰不可失其利云々

又云建仁四年三月九日壬申武藏守朝政飛脚到着申云去月日雅樂助平維基子孫等起伊賀國中官長司度光子息等起伊勢國各叛逆云々彼兩國守護人山内首藤刑部丞經俊相尋子細之處無左右企合戰經俊依無勢逃込之間凶徒等虜領一箇國固鈴鹿關八峯山等道路仍無上路之人云々

又云建保元年五月二日壬寅又於米町辻大町大路等之所處合戰足利三郎義氏筑後六郎知尚波多野中務次郎經朝潮田三郎義季等乘勝攻凶徒矣

○專一之者

吾妻鏡云養和元年九月十三日丙戌和田次郎義茂飛脚自下野國參申云義茂未到以前俊綱專一者桐生六郎爲顯隱忠斬主人而籠深山搜求之處聞御使之由始入來陣内但於彼首者稱可持參不出渡之何様可計沙汰哉云々仰云早可持參其首旨可令下知者使者則

馳參云々

又云元曆元年正月廿一日辛亥源九郎義經獲義仲首之由奏聞今日及晚九郎主搦進木曾專一者樋口次郎兼光是爲木曾使爲征石川判官代日來在河内國而石河逃亡之間空以歸京於八幡大渡邊雖聞主人滅亡事押以入洛之處源九郎家人數輩馳向相戰之後生虜之二云々

又云建久三年六月十三日癸丑幕下渡御新造御堂之地(中略)愛納土於夏毛行騰有運之者被尋其名之處景時申云四人皆河權六太郎也云々感其功忽蒙厚免是木曾典厩專一者也云々

○主君

伊達日記云彼面々義隆へ申上候ハ刑部少一類餘多申合義隆ヲ取立申ニヲイテハ累代ノ主君ト云誰カ疎ニ可存候氏家彈正一人御退治被成候へハ大崎中ハ可爲如思召之由申上候云々

○逆賊

吾妻鏡云建久元年二月六日庚寅奥州飛脚參著申云去月廿三日出彼國訖其日未無下著之軍兵爰兼任等逆賊群集如蜂云々

○東士

佐木五郎義清向石橋之處不思其功可召禁定綱已下妻子之由蒙命今更所非本懷也者景親伏理云々

○一家棟梁

吾妻鏡云仁治三年十一月卅日癸丑駿河四郎式部大夫家村上野十郎朝村被止出仕昨日喧嘩職而起自彼等武勇(中略)次招若狹前司大藏權少輔小山五郎左衛門尉被仰曰互爲一家數輩棟梁尤全身可禦不慮凶事之處輝私武威好自威之條愚案之所致歟向後事殊可令謹慎之由云々

○義士

太平記云新田足利權抑義貞一舉大軍百戰破堅方卒不願死而退逆徒於干戈下得靜謐於尺寸之中而尊氏附驥尾起險雲控彈丸殺籠鳥大功所建執與論言所最矣尊氏漸爲奪天威憂義士在朝請誅義貞而義貞傾忠臣盡正義爲朝家輕命先勾萌奏爵尊氏國家用捨執與理世安民之政矣

○繼父

吾妻鏡云建久四年六月一日丙申會我十郎祐成妻大磯遊女成雖被召出之如口狀者無其咎之間被放遣畢又

吾妻鏡云治承四年八月廿六日丙午義澄以下涕泣雖失度任命慈以離訖又景親行向澁谷庄司重國許云佐々木太郎定綱兄弟四人屬武衛奉射平家畢其科不足有然者尋出彼身之程於妻子等者可爲内人者重國答云件置者依有年來芳約加扶持訖而今重舊好而參源家事無嫌于加制禁歟重國就貴殿之催相具外孫佐

而伊東九郎祐清妻收養之祐清加平氏北陸道合戦之時被討取後其妻嫁武藏守義信一伴僧同相從有武藏國府可被行兄弟等同意之由祐經妻子訴申之間爲被尋子細被遣御使於義信朝臣之許云々祐成等繼父會我太郎祐信雖消魂依無同人支證被宥

武家名目抄稿第七十五册

塙檢校保己一編

稱呼部附錄二

○誅罰專使

吾妻鏡云元久二年閏七月廿六日辛亥小舎人童走來招金吾告追討使事金吾更不驚動一飯參本所令目筭之後自關東被差上誅罰專使无據于遁逃早可給身暇之旨奏訖退出于六角東洞院宿廬云々

○勇敢者

吾妻鏡云文治五年九月七日甲子宇佐美平次實政生捕泰衡郎從由利八郎相具參上陣岡(中略)仰曰以此男申狀察心中勇敢者也有可被尋事可召進御前云云

又云嘉禎二年十月五日己丑被經評議爲鎮南都騷動暫大和國置守護人沒収衆徒知行庄園悉被補地頭畢又相催畿内近國御家人等塞南都道路可止人之出入之由有議定被撰進印東八郎佐原七郎以下殊勝勇敢壯力之輩衆徒若猶成敵對之儀者更不可有優恕之

思悉可令討亡云々

○武勇之家

吾妻鏡云建保元年五月三日癸卯義盛重擬襲御所(中略)凡自昨日至此晝攻戰不已云々出雲守定長折節祗候之間雖非武勇之家盡防戰之忠云々

○警敵

吾妻鏡云正治二年正月廿一日甲辰羽林卷上御籬覽之彼等皆備男子之相一人可被召加御家人之由被仰行光工藤小次郎申云被追討平家以降亡父景光赴戰場入三方死出一生十箇度其間多以爲彼等被救命也行光又繼家業也而被對治御警敵日於上者我朝勇士悉以爲御家人一行光者僅所待此三輩也云々

○鎌倉殿

吾妻鏡云治承四年十月廿一日庚子今日弱冠一人御旅館之砌稱可奉調鎌倉殿之由實平宗遠義實等怖之不能執啓云々

太平記云安東入道鎌倉殿ノ御屋形モ燒テ入道殿東勝寺へ落サセ玉ヒスト申者有ケレハサテ御屋形ノ燒跡ニハ傍置何様腹切討死シテミユルカト尋ケレハ一人モ不見候トソ答ケル是ヲ聞テ安東口惜事哉日本國ノ主鎌倉殿程ノ年來

住玉ヒシ處ヲ敵ノ馬ノ蹄ニ懸サセナカラソコニテ千人モ二千人モ討死スル人ノ無リシコトヨ後ノ人々ニ被欺事コソ耻辱ナレイサヤ人々トテモ死センヌル命ヲ御屋形ノ燒跡ニテ心閑ニ自害シテ鎌倉殿ノ御耻ヲ洗カントテ被討殘タル郎等百餘騎相順ヘテ小町口へ打莅ム
難太平記云自京都は大休寺殿の御申によりて鎌倉を別に取立申さるとおほしめしつめられて御内心は御怖畏ありしにや如斯にては終に天下の煩と思召て諸神に御ちかひありて大鎌倉殿基氏資徳院殿に先立申させ給ひけるとこそ承及しかとも實説は人の可不知にあらず云々

○大剛一之兵

武藏義経云赤尾は京極代々の老臣也赤尾美濃守は信長公に亡され其子幼少なれば隠して多賀法印弟子にする(中略)後赤尾伊豆守と名乗京極殿へ歸參す彼伊豆守大剛一の兵にて度々の手柄高名隠れなし關ヶ原御陣大津籠城の時伊豆守働尤甚し

○秘藏者

甲陽軍鑑末書云勝頼公仰ラル、申分尤ナレトモ家康一人ニテ我等ト合戦ハ思モヨラス信長ヲウシロタテニ致シテノコト也信長モ一身ニテ此方ト合戦仕ヘキトハ中々存セ

シ家康ヲタテニツキテノ事也去年長祿ニテ法性院殿御秘藏者大形討死スル事我等カ分別違也

○小冠者

太平記云高時井一門以下長崎新右衛門今年十五ニ成ケルカ祖父ノ前ニ畏テ父祖ノ名ヲ顯スヲ以テ子孫ノ孝行トスル

事ニテ候ナレハ佛神三寶モ定テ御免コソ候ハンスラント

テ年老殘リタル祖父ノ圓喜カ臆ノカ、リヲ二刀差テ其刀

ニテ己カ腹ヲカキ切テ祖父ヲトツテヒキ伏セテ其上ニ重

テソ臥タリケル此小冠者義ヲ進メラレテ相模入道モ腹切

給ヘハ城入道ツ、イテ腹ヲソ切タリケル

○老者

甲陽軍鑑末書云諸士武道上タル者ヲ敬ヒ老者道ノ先達ニ隨

○謀士

甲陽軍鑑末書云山縣三郎兵衛内藤修理高坂彈正ハ東西南

北ヘノ出陣ヲハカリ先ツ向ヘキ敵ヲハカリ敵ノ勢ニヨツ

テ軍ヲ出シ軍ヲ止地ニヨツテ備ヲ設ルコトヲ謀ル也謀士

○官軍

吾妻鏡云建久三年九月十二日辛巳小山左衛門尉朝政先年

募勳功浴恩澤常陸國村田下莊也而今日賜政所御下文其狀云去壽永二年三郎先生義廣發謀反企圖亂爰朝政偏仰朝威獨欲相禦即待具官軍同年二月廿三日於下野國野木宮邊合戰之刻抽軍功云々

又云正治二年十二月廿七日己酉先日上洛澁谷次郎高重

土肥先次郎惟光等駁著申云高重等上洛以前官軍發向彼

柏原彌三郎住所近江國柏原庄之刻三尾谷十郎襲件居所

後面山之間賊徒逐電畢今兩使雖伺其行方依無所

據歸參云々

又云建仁元年三月十三日壬戌京都飛脚參申云去月廿九日

城四郎長茂餘黨小次郎資家入道同三郎資正本吉冠者隆衛

以官軍被誅云々

又云建保元年十一月卅日丙申六波羅飛脚參申云南都騷

動事遣官軍被防禦之間去廿日衆徒自宇治無爲退出

云々

○諸將

豆相記云永祿七年相模守氏政發向于關東宇津宮結城小

山等諸將常野甲卒悉降于北條

○所之役人

大内家壁書云盜物御定法之事右彼盜物之事或持出市町

或於置店屋之時號盜物押取有及喧嘩事剽竊主者不知盜物間買置而又買之由申事每度也然者兩方於其場理不盡之口論也所詮彼盜物之事預置其所之役人可批判若有背此旨一族者可被處嚴科也仍執達如件長享三年五月日左衛門尉大藏少輔

○先祖

吾妻鏡云治承四年十一月廿六日甲戌於經俊罪科者雖難遁刑法優老母之悲歎慕先祖之勞効忽被宥梟罪云々

又云承元四年六月三日己未昨日相模國九子河土肥小早川

之輩與松田河村一族有喧嘩事云々件輩納涼道邊之間

頗及雜談就論先祖武功之勝劣雖有此鬪諍應御使諷諫早成和平云々

甲陽軍鑑末書云小山田左兵衛モ時田合戰ニ手負二十一日

目ニ死彌三郎同心指上ルトイヘトモ御先祖ヨリ誓ニテ被

下都留郡ナレハ少モ相違有マシキ旨被仰出也

○國敵

吾妻鏡云治承四年八月四日甲申散位平兼隆者伊豆國流人

也依父和泉守信兼之訴配于當國山木郷漸歷年序之

○御敵

應仁別記云道源板與ニ乘女ノ眞似シテ後ノ山へ落ケルヲ

後假平相國禪閣之權輝威於郡郷是本自依爲平家一流氏族也然間且爲國敵且令挿意趣給之故先試可被誅兼隆也云々

又云治承四年十一月八日丙辰所逃亡之佐竹家人十許輩

出來之由風聞之間令廣常義盛生虜皆被召出庭中若

可挿害心之族在其中否覽其顔色令度給之處著

紺直垂上下之男頻垂面落泪之間令由緒給依思

故佐竹事繼頭無所據之由申之仰曰有所存者彼誅

伏之刻何不弃命者乎答申云彼時者家人等不參其橋之

上只主人一身被召出梟首之間存後日事逐電而令參

上雖非精兵之本意相構伺拜謁之次有可申事故

也云々重尋其旨給申云聞平家追討之計被亡御一

族之條太不可也於國敵者天下勇士可奉合一揆之

力云々

又云建久元年正月廿日乙亥自二所御歸着鎌倉(中略)

日來先御參伊豆權現處於路次石橋山覽眞田與一豐

三等墳墓御落涙及數行是件兩人治承合戰之時爲御

敵被奪命云々

○河原者

應仁別記云道源板與ニ乘女ノ眞似シテ後ノ山へ落ケルヲ

山名殿ノ河原ノ者人シモコソアレ追懸テ討取ケリ

大永三年伊勢貞忠亭御成記云公人御厥者御與昇御牛飼車
そへ舍人河原者以下揃被_レ遣小日記有_レ之

大内問答云一妻戸の出入も常に無_レ之儀候此前にたてず
なるへし殿中は申に及はすはたくし御成にも其亭妻戸
有_レ之者其杵ぬきより間半ほとりけて雨おちのか、らぬ
程に立すな可_レ在_レ之妻戸の柱の通や的の敷つかより少大
る候て河原者作_レ之なり是こしよせの妻戸たるへき也

永祿四年三好義長亭御成記云御妻戸立砂アマタレヨリ六才
出テ立申由河原者

○使節

吾妻鏡云治承四年九月八日丁巳北條殿爲_レ使節_一進_一發甲
斐國_一給

又云元暦元年二月十八日丁丑武衛被_レ發_一御使於京都_一是
洛陽警固以下事所_レ被_レ仰也又播磨美作備前備中備後已上
五箇國景時實平等遣_レ專使_一可_レ令_レ守護_一之由云々

又云同年五月十二日己亥雜色時澤爲_レ使節_一上洛是園城寺
長吏僧正房覺病病危急之由依_レ有_レ其聞_一被_レ訪_一申之_一故
也
又云文治二年三月十二日庚寅小中太光家爲_レ使節_一上洛是

左典厩御覽息二品御依_レ可_レ令_レ加_一首服_一給_上

又云同年八月四日戌寅比企藤内爲_レ使節_一上洛是依_レ進_一上
皇御熊野詣御物等_一也

又云同五年十一月八日甲子因幡前司廣元爲_レ使節_一上洛諸
人莫_レ不_レ饒送_一龍蹄百餘疋云々

又云建久二年四月廿六日癸卯後藤兵衛尉基清爲_レ使節_一上
洛依_レ定綱定重事_一山門之訴更難_レ休殆申_レ可_レ被_レ行_一定重
於斬罪之由云々飛脚連々到來之間重及_レ此儀_一云々

又云正治二年正月廿四日辛亥安達源三親長爲_レ使節_一上洛
被_レ誅_一景時之由依_レ被_レ申也御教書云平景時有_レ用意之
事由依_レ有_レ其聞_一加_レ誅_一候畢件類多在_レ京云々

又云同年八月廿一日甲辰宮城四郎爲_レ使節_一下_一向與
州_一是芝田次郎依_レ有_レ可_レ被_レ尋問_一事_一度々雖_レ遣_レ召稱_一病
病_一不_レ參仍被_レ追討_一也午尅宮城首途出_レ甘繩宅_一參_一御
所_一相_一具家子三人郎等十餘人_一候_一待西南角_一頃_一之廣元朝
臣出_レ廊根妻戸_一招_レ御使_一召_レ仰事之由_一其後退出_一之刻給_一

御馬_一中野五郎能成引_一立庭上_一宮城給_一之退出
又云建仁三年十月十九日甲寅佐々木左衛門尉定綱中條右
衛門尉宗長爲_レ使節_一上洛是將軍御代始也

又云建仁三年二月九日昨日自_レ南方御所_一
園大曆云南方御所臨幸觀應三年二月九日昨日自_レ南方御所_一

被_レ仰之趣爲_レ仰遣_一之使於_一鎌倉_一宰相中將使節近來家僕

窮困更無器用仍後院廳官季定令_レ持_一消息_一且遣_一之所詮恐
可_レ給_一使者之旨示_一其狀自_一南方御所_一就_一臨幸事_一被_レ仰
下_一之旨以_一使者所_レ令_一申也可_レ被_レ存給_一謹言二月九日左
大臣判鎌倉宰相中將殿

又云小申秀信來
申世上奉條文和元年閏二月十六日小申下野守秀信來
申_一按_一內_一惠鎮上人爲_一武家使_一今朝參_一住吉_一御和談之事
爲_一使節_一歟云々

○老將

武陰叢話云小野次郎右衛門辻太郎助中山助六郎朝倉殿十
郎戸田半平太田甚四郎鎮目市右衛門七本鎧と世に稱し御
加増下されけり後に依田兵部を鎧下にて太刀付候事に付
小野と辻と初太刀を論して止ます依田は朱甲に朱頬當を
掛たりと云小野田依田朱甲斗にて頗當なし我等その内甲

を切る初太刀勿論也と争ふ牧野右馬允康成是を扱へとも
證據なし右馬允老將なるゆへ家來二三人馬工郎に作り立
て馬買に上田へ遣し色々調儀して山本清右衛門に逢其時
の様子辻太郎助小野次郎右衛門は相論をかたる云々

○勇卒

豆相記云房州里見未_レ服而殘賊盡害故北條家欲_レ攻_レ之使_一

下_一上總介綱成_一居_一於有木城_一矣房州里見來而攻_レ城矣先
此綱成勇卒朝倉能登守有_レ故而自_レ城行_一于鎌倉_一遙聞_一

里見之至_一而急自_一鎌倉_一發_一向有木_一
○相掣

甲陽軍鑑末書云永祿六年二月十二日ニ信玄公甲府ヲ御立
有テヨ、峠ヲ越ナンモクへ御着小幡尾張ヲ召テ問ヒ給
フ其方相掣圖書ハイカヤウナル氣立ノモノソト被_レ仰尾

張參リ圖書武變ノ儀疎略ノ士ニテハ無_レ御坐_一候へトモ少
ノ事ニモアハテタル形儀ノ者ニテ候ト申上信玄公扱ハ仕
ヤウアリト仰セラレ内藤修理ニ被_レ仰付_一小荷駄一疋ニ挑

燈ニツ宛結付馬オヒニモ一人ニ宛炬ヲ持セ旗元ニテ棹
ノ先ニ挑灯ヲ付火ヲアクル時小荷駄共ニ火ヲ立サセ高所
へオヒアケサセヨト被_レ仰合_一

○召使

吾妻鏡云建久元年四月四日丁亥美濃國內地頭佐渡前司重
隆并堀江禪尼坊_一分領_一爲_レ令_レ沙汰_一其事_一召使則國入部之
處菊松犬丸等公文凌礫之由依_レ有_レ訴被_レ尋下_一云々

○泊番

武陰叢話云上杉謙信家老北條丹後守は大身にて上野國厩
橋と越後北條と兩城の主たり大剛の兵にて軍功重累す云

云此丹後守後に謙信逝去の時三郎景虎と景勝と兄弟家督相論し景虎は春日山の城二の丸に居られしか本城より景勝鐵炮打かくる故景虎たまらず一里半斗の脇の御館城へ取退く是を聞いて前の管領上杉憲政も北條丹後守も館の城へ籠丹後守則坂戸の城へ人數を入れて春日山の城と並たる愛宕山を取んとす此山は春日山の本城より高ければ是を取らるれば景勝叶はしとて姉上條の城主上杉彌五郎義春を愛宕山に置いて坂戸の城は上杉彌五郎陣所愛宕山の麓なれば景勝方よりも大事にして毎夜館城より北條丹後守忍んで泊り番に來り夜明には館へ歸る云々

○御番

蘆名家記云盛隆羽黒ニ於テコノ事ヲ聞召大キニ驚セタマヒテ急キヲタ山ノ城ヲ責ヘシトテ佐瀬河内守平田兩人ニ稻河庄那麻郡之勢トモオリフシ御番ニ相詰タリシヲ云々

○譜第職

吾妻鏡云寛喜元年三月廿六日新判官基綱自京都歸着二月廿七日蒙使宣旨三月九日申畏云々雖爲譜第職日來被超越數輩訖年齒四十九之今適預此恩云々

蒲生氏郷記云然ル處ニ其夜亥尅ハカリ正宗譜代ノ侍ニ隅

度山へ配せられ父昌幸は慶長の末に彼地にて病死なり左衛門佐は獨り住居せしか大坂御陣の初秀頼公より大野修理大夫治長承にて御頼は(中略)秀頼公より速見甲斐守御使として遠方早速に馳參る條御満足におはしめす由旅宿不自由有へきとして黄金二百枚銀三十貫目下されけり組勢與力の事は重ねて仰付らるへしとありしかは修理か支關の侍とも興をさましたり

○城衆

大内家壁書云安藝國西條鏡城法式條々一當城衆當番以名代不可勤事一當城普請毎日不可懈怠一事一縱雖爲城衆知人不可入城内一事一置兵糧無爲之時不可配當城衆一事

○場數之人

小島景憲家譜云掃部は奇正之兩様侍る所今六十歳之士大將十度廿度之武藝場數の人より掃部弓矢の点數は上手なり

○氏長者

○兩院別當

康富記云享徳三年正月十日壬戌予直垂參室町殿年始御禮參賀也西向之御衆殿下以下濟々有御參予遲參西向之

田伯耆ト申ス者蒲生源左衛門カ陣所へ走入正宗逆心定ノ間明日ノ御働キヲ被相止正宗爲體可御覽候

○手傳

太閤記云大佛殿一漆膠之事手傳人は池田備中守河尻肥前守上田主水正奉行は堺の今井宗久なり云々

○御供

吾妻鏡云建久四年六月七日壬寅自駿河國還向鎌倉給而會我太郎祐信候御供之處於路次給暇剩免除會我庄乃貢可訪祐成兄弟夢後之由被仰下是偏依令感彼等勇敢之無忘給

又云正治二年閏二月八日甲午羽林爲狩獵渡御伊豆國

藍澤原北條五郎時連三浦十郎茂連和田平太胤長沼五郎宗政結城七郎朝光波多野次郎經朝海野小太郎行氏大河戸太郎重澄綱島次郎狩野七郎已上射手六十人有殊仰御供御進發之後爲掃部入道奉行御往還之間無魔障之樣可致祈請之由相觸于鶴岡供僧等仍群集廻廊讀誦不斷觀音經今日法華懺法結願也諸僧等給施物口別帖縋三疋白布五端藍摺十端也

○組勢與力

武蔭叢話云真田左衛門佐信賀は父安房守昌幸と高野山九

御人數仍於御東向又十人許被懸御目之衆有之交其中懸御目了大館兵庫頭被候御前依被申次參之御太刀進上之廿九氏長者兩院別當御拜任之御禮今春人々持參有之故也

○北之丸様

湯川查右衛門覺書云今ノ小平太ニハ大納言様ヨリ尾張様ノ北ノ丸様ノ御妹子ヲ大納言様ヨリ御仕付ケ被成候

○惣大將

園太曆云文和元年七月五日傳聞陸奥守顯氏昨日出家今日未尅卒云々今度八幡合戰惣大將也於山下悉燒拂極樂寺被殿以下爲相數ヶ所爲灰燼冥罰可恐之由世稱之歎云々

拾芥記云永正七年二月十六日爲近江國伊庭九里等對治

細川京兆被官遁世者トウ阿彌號雲龍軒向打手也惣大將右馬助云々

○組合同番

伊達日記云窪田ニモ外ヤライ被成然ルユキ山ニテ窪田ノ川ヲ外ニ被成堀ヲホリ土手上垣ヲ御ユハセ候其ヤライ番可被仰付由ニテ人數持申サレ候衆圖取ニ被仰付候濱田伊豆富塚近江原田左馬助遠藤文七郎片倉小十

郎白石若狹我等三人ハ御前へ不罷出後付ニ圖ヲ御トラ
セ候白石若狹ト小十郎一組文七郎ト近江一組左馬助ト伊
豆一組孫七郎殿ト我等一組ニ候然ル處ニ小十郎被申上ニ
圖取ノ義ニ候ヘトモ成實ト御組合可被下由被申上ニ組
ヲ替候間我等ハ小十郎ト同番ニ罷成若狹ト孫七郎殿同番
ニ罷成候惣御陣中ニテ小十郎相手ヲキラヒ成實ト組合候
間此番ニハ合戦可仕ト小十郎存候哉ト唱候云々

○畑衆

靈簡集云土佐國高岡郡津野山 船月村月田氏藏文書去十日於大野見畑衆合戦之時
無比類相働敵仕退候忠節心懸の至神妙候後日可有褒
美候彌奉公之儀肝要候也天文十二年癸卯文月十七日戶
田長右衛門殿基高花押

○打手

園太曆云文和二年三月五日傳聞爲討手土岐右馬權頭頼
康發向攝州今日可宿山島云々

○寄手

園太曆云文和元年四月廿四日今日聞此間八幡御所兵糧米
濟々到來之由有其聞仍此間可食攻之由武家支度之處
南方ハ依兵糧難治沒落之輩多有其聞此上者攻寄可
決雌雄之由風聞昨日南方口枚片町郷民不從武命之

間寄手陸奥守顯氏燒拂歟

○先懸勢

園太曆云文和元年三月四日基經卿升文覺譽法印狀送之書
寫讀之先日午惣念參拜恐悅候(中略)新田武藏守義宗
令警固關東奉行大王義興義治以下諸將立歸武州
可平敵陣云々次與州國司到若白川關先懸勢宇津宮
相伴一方發向芳賀兵衛入道已計會之由同戴此注進候旁
以不口信州御廢無口計存候次江州凶徒引退已及沒落之
企候云々其謂候哉只今餘取紛候間任筆重又可申入候
也恐惶謹言三月五日園殿覺譽

○軍勢

園太曆云觀應元年十一月八日永福門院自今夕被來坐
世上惣念之間女房獨住非無怖畏就中北小路里邊千葉
軍勢多寄宿狼藉之企觸耳仍難治之間談女房被合宿
彼方

○在京人

園太曆云武家勢文和元年閏二月十七日今日朝聞昨日武家
軍勢到着之由有其聞而今朝道譽下向江州是構勢田
橋可渡之由云々其二百人許歟此外多勢在京人無之云
々主上已渡御八幡之由有趣無實歟或云昨日幸天王

寺明日可幸云々今乾峯和尚被送使者先日進使者於
住吉大將對面快然體也其次京都以外物恐且在京人内降
參召口輪旨所望者有之云々如然事予自昔不知事也御
知音歟仰其趣了丹波口江州等自住吉被向其勢之
旨謳歌歟魔縁歟爲謹可惶々々

○兵法者

○兵法ツカヒ

○兵法仁

甲陽軍鑑云小幡上總守申さる、去る程に兵法つかひ兵法
者兵法仁三人有先第一に兵法つかひはおもてなとつかふ
て習のことく人にをしゆる是兵法つかひなり第二に兵法
者は太刀の甲乙仕分勝負の習よくして上手なる者は某か
かへをく前原筑前守などにて候子細は彼前原を座敷の角
にをき五六人扇を投つくるに二三間へた、りて前原も木
刀か何そ手に持たらは右の扇我身にあたらぬこと切御
とし候其上かうよりをなけしにつはきをもつてつけて御
かりたるを前原しないにていくつにも切おとし候殊更六
十二間のかふとを同じしなひにて打くるきなる仕る程の上
手にて此前原など目も足も手も身もき、たる奇特を仕る
かれか兵法者と申さんするか第三つかははらくてんは左

様にきとくなれ共兵法修行仕るに大鷹三もとすへさせ乗
替三疋引を上下八十人許もつれありき兵法修行いたし諸
侍大小共に其むやうに仕なすはくくてんなどは兵法の名
人にて御座候扱又兵法仁と申は勿論につかひ少々手前呼
奇特なく共度々勝負に勝てかうをいたす人河中島合戦に
討死仕らる、山本勘介扱はなみあひ備前長刀をもつて我
は一人敵は二百人許を七八十人切候て其身は堅固に罷退
切處とは申なから何様大きな働のなみあひ備前山本勘
介兩人などは兵法のうへに名人のはくくてん上手の前原か
うからは褒貶の批判は成かたう候其謂は手からつくの場
合の儀其勝負を見たる人おほからん剛なる手柄をは敵に
も味方にもた、しき見聞澤山にてかくれなき者也いはん
や勘介備前などは立あふたる人多此山本勘介なみあひ備
前ふたりの衆のゆうなるは兵法仁と申候はん兵法仁は武
士道にいたれば太刀つかはぬ人にもあるけに候それをい
かんと申に某其の時は武田の御家へ参らす飯富兵部少輔
殿難談を承つるに今井伊勢守殿戸石合戦の時越後衆のき
口に長身の鎧を馬はなれたる敵一人のく所へ今井伊勢守
馬にて乗ころはさんとありし時件の敵さすかの謙信衆な
る故鎧をなをし今井伊勢守をつき落さんとするを件の侍

は歩にて働自由なり馬上は不自由なり馬を乗てにくれば
 比與やそこにて今井伊勢守武功譽の功者故方便て相手を
 見しりたるやうにいはるれば敵鎧をひきて御出候はんと
 挨拶する内に今井伊勢守かせもの多く懸つくる則内衆に
 申付今の敵を討とむるこれらは太刀をつかはす兵法しら
 すと兵法仁と申て名人のほくてんか一ツ太刀是なり惣別
 ほくてんは一ツの太刀一ツの位一太刀と申て一ツを二段
 にわけて極位といたす黒白をしりたる兵法つかひ故其道
 の名人と名をよはれたる由小幡上總か賀の武田典厩信政
 信濃守に語訓申さる、也

又云陣なき時武士かけむかひの勝負をは斬合或はしあひ
 と申此勝負に疑なく勝ことを能習ひ畢て是をよく手に熟
 してしかうして後勝負を決して度々の勝利を得て我名を
 とつて人にも是を訓ゆるを能兵法仁と名付
 義殘後覺云森壹岐守殿に瀬良源内トテ兵法者ノ侍リケル
 カ家中不殘弟子ニ取テ世ニ類様ニ沙汰ヲセシカ有時筑
 紫方ヨリ一方進トテ兵法者ノ許狀ヲ取テ壹岐守へ來リケ
 ルカ中々兵法ノ上ニ於テハ我レ一人ノ如ク云ヒ散ラス程
 ニ家中ニツニ成テ互ニヒイキヲ成シ合フ程ニ後ニハツノ
 リテ瀬良ト一方進ト左アラハ仕合ヲサスヘシト云テ日ヲ

定テ仕合ヲシタリケル何トカシタリケン源内仕負テ肩
 先シタ、カニ打レタリ是ニ依テ家中ニ堪忍ナラスシテ御
 暇給リテ京都ヲ指シテソ飯リケル
 又云檜崎十兵衛ト云者ハ兵法ニ於テハ其比西國ニハ並ヒ
 ナシト沙汰セリ關東北國築方ヨリ兵法者許狀ヲ取ツテ
 此檜崎へ來ル然レトモ一人ニテモ利ヲ得ル者ナカリケ
 ル

武林往昔日記云或人の語けるは吉岡といふ兵法者男子三
 人もちけるか子とも何も兵法の上手也云々

○軍法者

○軍者

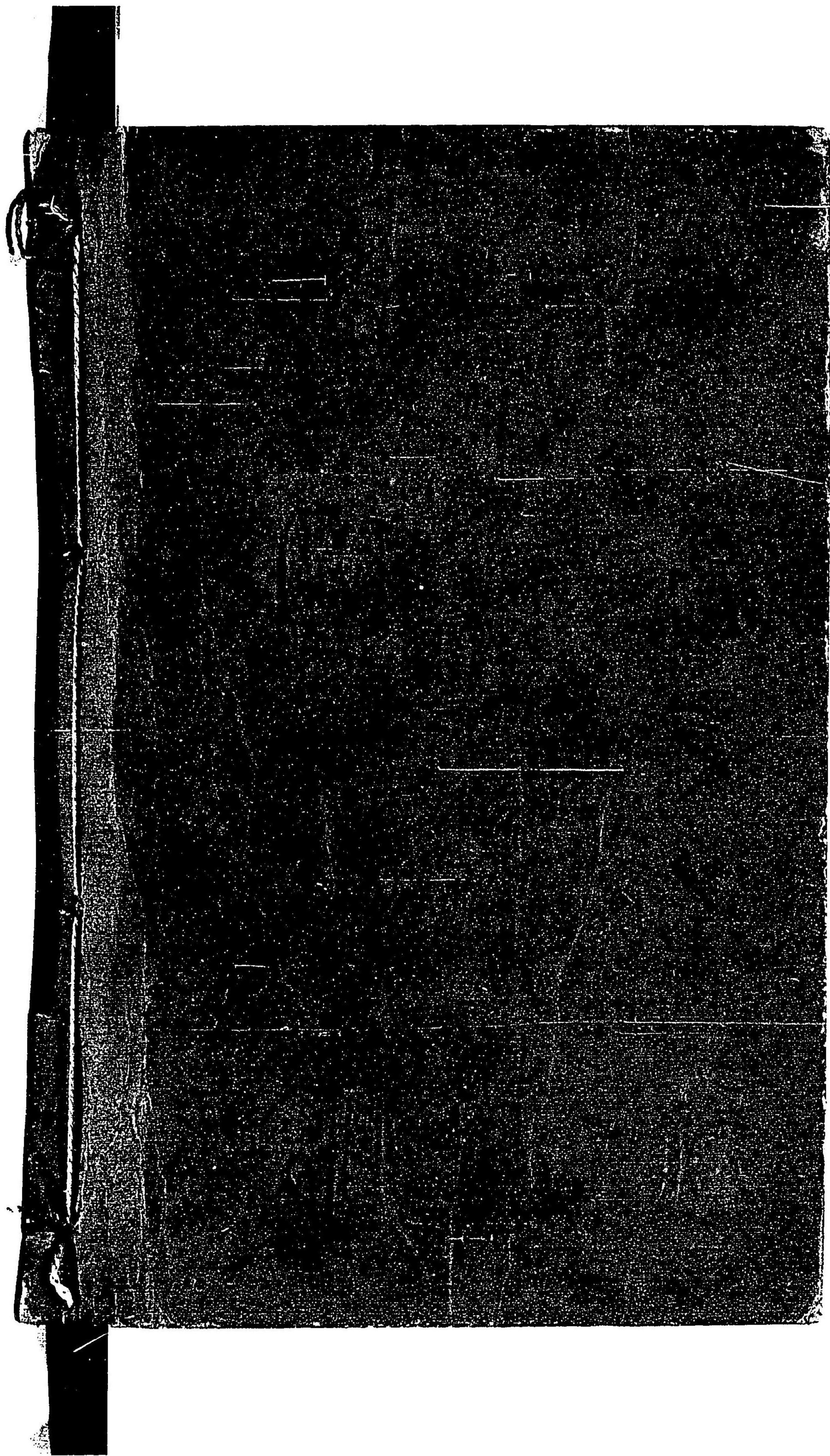
大友與廢記云大將心持之條爰に薩州の太守義久公の家臣河田大
 膳入道休叱と聞えしは名譽の軍法者なり神變奇特の事と
 もおほかりきたとへは我ちからはさにもなりかたき城頭
 は天火をいのり下し焼却する神變あり(中略)さるほとに
 豊後におゐても角隈越前守といふ軍者あり云々

192
 55

192
55

Handwritten notes in cursive script, including the words "Cavalry" and "Cavalry".

千四百九十六



五

蘇武牧羊圖
梅呼
畫